浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 1

森 山 遺 跡

鴨方駅南土地区画整理事業に伴う発掘調査

2008

岡山県浅口市教育委員会

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 1

森 山 遺 跡

鴨方駅南土地区画整理事業に伴う発掘調査

2008

岡山県浅口市教育委員会



1 遺跡周辺空中写真

巻頭図版2



1 溝 29 土器出土状況(北東から)



2 分銅形土製品と土錘

浅口市は、岡山県の南西部、続日本紀にも記されている元浅口郡の西端部(正確には笠岡市大島と里庄町が西端)に位置し、平成18年3月21日、金光・鴨方・寄島の3町が合併して誕生しました。南は、瀬戸内海国立公園の一角で、神功皇后の伝説に彩られた寄島の海岸線、北は山岳仏教の名残を留める遥照山、峰続きに陰陽師安倍晴明縁の阿部山、その間に現代の星の観測所である国立天文台岡山天体物理観測所のある竹林寺山等を擁する遥照山山系の山並み、中央南寄りを西から東へ里見川が流れ、それに沿って山陽本線と国道2号、そのやや北に旧鴨方往来と自然が豊かで歴史的文化的魅力に富んだ新生浅口市です。

森山遺跡の発掘調査は、鴨方駅南土地区画整理事業の計画に伴って、平成16・17年度に確認調査を行い、平成18年度に本調査を実施しました。調査の結果、縄文時代以降の竪穴住居跡や土壙等の他、サヌカイトの石包丁や土錘・分銅形土製品など、多くの遺構や石器・土器等、貴重な資料が出土しました。特に分銅形土製品は国内6番目、最大級のものです。また、9月には現地説明会を行い、多くの方々のご参加をいただきました。

本報告書は、今回の発掘調査の成果をまとめたものです。この報告書が今後の文化財の保護・保存とともに学術研究の資料として、また、郷土の歴史研究の資料とし、地区住民の心の糧として活用されることを願っております。

終わりになりましたが、発掘調査から本報告書の作成まで、諸々のご指導・ご支援を賜りました岡山県教育庁文化財課・岡山県古代吉備文化財センターをはじめとする関係各位と格段のご理解とご協力を賜りました地元自治会の皆様、猛暑の中にも誠心誠意従事してくださった地元有志の作業員の方々に、衷心より御礼申し上げます。

平成20年3月

浅口市教育委員会

教育長 工 藤

淮

例 言

- 1 本書は、鴨方駅南土地区画整理事業に伴い、浅口市教育委員会(旧鴨方町教育委員会)が浅口市 産業建設部都市計画課(旧鴨方町建設課)の依頼を受け、浅口市教育委員会が平成16~18年度 に発掘調査を実施した、森山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 森山遺跡は岡山県浅口市鴨方町六条院中(旧浅口郡鴨方町六条院中)に所在する。
- 3 確認調査は平成 16・17 年度に行い、本発掘調査は平成 18 年度に行った。担当調査員は水田貴士の1名で、調査面積は 1,500 ㎡である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、各氏から、終始有益な御指導と御助言をいただいた。 記して感謝の意を表する次第である。

安東康宏 大橋雅也 岡田 博 岡本泰典 河合 忍 小林利晴 下澤公明 重根弘和 柴田英樹 高田知樹 中野雅美 西野 望 林田真典 平井典子 平井泰男 弘田和司 福田正継 間壁忠彦 間壁葭子 正木茂樹 光永真一 山元敏裕 米田克彦 和田 剛 岡山県教育庁文化財課 岡山県古代吉備文化財センター 倉敷考古館

- 5 本書の作成は平成18・19年度に実施し、水田が担当した。
- 6 出土遺物の鑑定・分析については、次の諸氏・機関に依頼し有益な教示を得た。また分析結果の 一部については報告文をいただき、本書付載に収録した。記して感謝の意を表する。

土器の胎土分析

白石 純(岡山理科大学自然科学研究所)

- 7 本報告書の作成・執筆・編集は、水田が担当した。
- 8 本報告書に関連する出土遺物および図面・写真類は、浅口市教育委員会(岡山県浅口市鴨方町鴨方 2244 2)に保管している。

凡 例

1 本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標 V 系の座標北である。報告書抄録に 記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

2 遺構および遺物の挿図縮尺は図中に示したが、おおむね次のとおり統一している。

遺構 竪穴住居:1/60 柱穴列:1/60 土壙:1/30 溝:1/30・1/40

遺物 土器・瓦:1/4 石器:1/2 鉄器:1/2 銅銭:1/2 土製品:1/3

3 遺構配置図に示した遺構略称は、次のとおりである。

住:竪穴住居 列:柱穴列 土:土壙 溜:土器溜り

4 遺構番号は、遺跡ごとに通し番号とし、土器以外についてはその材質等により番号の前に次の略号を付して別番号とした。

石器・石製品: S 金属製品: M 土製品: C

5 土層断面および土器観察表における色調は、『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修)によっている。

- 6 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「笠岡」 を複製・加筆したものである。
- 7 本報告に用いた遺構・遺物の時期区分については、一般的な政治区分に準拠したが、古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指している。
- 8 本報告書に掲載した遺構・遺物図においては、遺構断面図の地山、石器・土・金属器の断面等を 次に示すトーンで表現している。

遺構の地山

石器の断面

土・金属器の断面

目 次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第1章 地理的・歴史的環境
第 2 章 発掘調査の契機と経過
第1節 発掘調査の契機
第2節 発掘調査の体制
第3節 発掘調査及び報告書作成の経過
1. 調査経過の概要
2. 調査日誌抄
3. 報告書の作成と体制
第3章 確認調査の概要
第1節 調査の概要
第2節 定月地区の概要
第3節 西ノ岡地区の概要
第4節 位田地区の概要
第5節 森山地区の概要
第6節 確認調査のまとめ
第4章 発掘調査の概要
第1節 調査の概要と調査区 2
第2節 1区の概要
1. 概要
2. 弥生時代の遺構と遺物
(1)竪穴住居
(2) 柱穴列
(3)土壙
(4) 溝
3. 中世・近世の遺構と遺物
(1) 土壙
(2)柱穴列
(3) 溝
4. 遺構に伴わない遺物

第3節 2区の概要	44
1. 概要	44
2. 弥生時代の遺構と遺物	46
(1) 竪穴住居	46
(2) 土壙	47
(3)溝	49
. (4)下がり	50
3. 中・近世の遺構と遺物	50
(1) 土壙	50
(2) 溝	55
4. 遺構に伴わない遺物	57
第4節 3区の概要	59
1. 概要	59
2. 弥生時代の遺構と遺物	61
(1) 10	61
\-/ m	63
/ - / mage tale Lieu	74
3. 古墳時代の遺構と遺物	76
\ - / III	76
	77
(1) 土壙	77
(2) 柱穴列	79
(3)溝	79
(4)耕作痕	80
(5) 下がり	81
5. 遺構に伴わない遺物	81
第5節 4区の概要	82
1. 概要	82
2. 近世の遺構と遺物	82
(1) 溝	82
3. 遺構に伴わない遺物	
第5章 まとめ	
第1節 遺構の変遷	
第2節 弥生時代後期の土器について	85
付載 自然科学分野における鑑定報告	
付載 森山遺跡出土土器胎土分析について(白石 純)	86

遺物観察表	90
図版	
報告書抄録	
密 付	

図 目 次

第1図	遺跡位置図 ······]	1 	第 28 図	土壙 2 (1/60)	3
第 2 図	調査周辺の主要遺跡分布(1/40,000)	2	第 29 図	土壙 3 (1/60)	3
第 3 図	土地画整理計画範囲図(1/6,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5	第 30 図	土壙 4 (1/60)	3
第 4 図	調査区周辺の小字名 (1/8,000) 10	0	第 31 図	土壙 5 (1/60)	3
第 5 図	トレンチ配置図 (1/3,000) 1.	1	第 32 図	土壙6 (1/60)	3
第 6 図	T1~T6 (1/60) 13	3	第 33 図	土壙7 (1/60)	3
第7図	T 7~T 9 (1/60) 12	4	第 34 図	土壙 8 (1/60)	3
第 8 図	T7出土遺物 (1/4) ······ 15	5	第 35 図	土壙 9 (1/60)	3
第 9 図	T 10 ~ T 13 (1/60) ····· 16	6	第 36 図	土壙 10 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)	3
第 10 図	T 14 · T 15 (1/60) ····· 17	7	第 37 図	溝 1 (1/30)	3
第11図	T 14 出土遺物(1/4) · · · · · 17	7.	第 38 図	溝1出土遺物 (1/4)	3
第 12 図	T 16 (1/60) 17	7	第 39 図	溝 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	3
第 13 図	T 16 出土遺物(1/4) · · · · · 18	8	第 40 図	溝 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)	3
第 14 図	T 17 (1/60) ····· 18	8	第 41 図	土壙 11 (1/30)	3
第 15 図	T 17 出土遺物(1/4) 19	9	第 42 図	土壙 12 (1/30)	3
第 16 図	T 18 ~ T 20 (1/60) 20	0	第 43 図	土壙 13 (1/30)	3
第17図	T 21 · T 22 (1/60) · · · · 21	1	第 44 図	1 区中・近世遺構全体図 (1/250)	3
第 18 図	遺跡推定範囲図(1/3,000)	2	第 45 図	柱穴列 2 (1/60)	3
第 19 図	森山遺跡位置図(1/3,000)2	4	第 46 図	溝4~7 (1/30)	3
第 20 図	グリッド設定図(1/800) 25	5	第 47 図	溝 8 ~ 10 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	3
第 21 図	1 区堆積状況柱状図(1/60) 26	6	第 48 図	溝5・8出土遺物 (1/4)	3′
第 22 図	竪穴住居 1 (1/60) 26	6	第 49 図	1 区遺構に伴わない遺物①(1/4)	3
第 23 図	竪穴住居 1 出土遺物 (1/4) 27	7	第 50 図	1 区遺構に伴わない遺物②(1/4)	3
第 24 図	1 区弥生時代遺構全体図(1/250) 27	7	第 51 図	1 区遺構に伴わない遺物③ (1/4)	40
第 25 図	竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4) 28	8	第 52 図	1 区遺構に伴わない遺物④ (1/4)	4
第 26 図	柱穴列1 (1/60) 28	8	第 53 図	1 区遺構に伴わない遺物⑤ (1/4)	4:
第 27 図	土壙1 (1/60)・出土遺物 (1/4) 29	9	第 54 図	1 区遺構に伴わない遺物⑥(1/4)	4

第 55 図	2 区堆積状況柱状模式図 (1/60)	44	第 90 図	溝 27(1/30)・出土遺物(1/4)	63
第 56 図	2 区弥生時代遺構全体図 (1/250)	45	第91図	溝 28 (1/30)	63
第 57 図	竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/2)	46	第 92 図	溝 28 出土遺物①(1/4)	64
第 58 図	竪穴住居 4(1/60)	47	第 93 図	溝 28 出土遺物②(1/4)	65
第 59 図	土壙 14(1/30)	47	第 94 図	溝 29 (1/30)・出土遺物 (下層) ① (1/4)	66
第 60 図	土壙 15(1/30)	47	第 95 図	溝 29 出土遺物(下層)②(1/4)	67
第 61 図	土壙 16(1/30)	48	第 96 図	溝 29 出土遺物(上層)①(1/4)	68
第 62 図	土壙 17(1/30)・出土遺物 (1/4)	48	第 97 図	溝 29 出土遺物(上層)②(1/4)	69
第 63 図	土壙 18(1/30)	48	第 98 図	溝 29 出土遺物(上層)③(1/4)	70
第 64 図	土壙 19(1/30)	48	第 99 図	溝 29 出土遺物(上層)④(1/4)	71
第 65 図	溝 11(1/40)	49	第100図	溝 29 出土遺物(上層)⑤(1/4)	72
第 66 図	溝 12 ~ 14(1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	50	第101図	溝 29 出土遺物(1/3・1/2)	73
第 67 図	溝 15(1/30)・出土遺物 (1/2)	50	第102図	溝 30(1/30)・出土遺物(1/4)	73
第 68 図	土壙 20 · 21(1/30) ······	51	第103図	溝 31 (1/30)	74
第 69 図	土壙 22(1/30)	51	第104図	土器溜り1(1/30)・出土遺物①(1/4)	74
第 70 図	土壙 20 ~ 22 出土遺物 (1/4)	51	第105図	土器溜り1出土遺物② (1/4)	75
第71図	2 区中・近世遺構全体図 (1/250)	52	第106図	3 区古墳時代遺構全体図(1/250)	76
第 72 図	土壙 23(1/30)・出土遺物 (1/4)	53	第107図	溝 32 (1/30)	76
第 73 図	土壙 24 (1/30)	53	第108図	3 区中・近世遺構全体図 (1/250)	77
第 74 図	土壙 24 出土遺物(1/4)	54	第109図	土壙 32 (1/30)・出土遺物 (1/4)	78
第 75 図	土壙 25 (1/30)・出土遺物 (1/4)	54	第110図	土壙 33 (1/30)・出土遺物 (1/4)	78
第 76 図	土壙 26 (1/30)	54	第111図	土壙 34 (1/30)	79
第 77 図	土壙 26 出土遺物(1/4)	55	第112図	柱穴列(1/60)	79
第 78 図	溝 16 ~ 26 (1/30)	56	第113図	溝 33 (1/30)・出土遺物 (1/4)	80
第 79 図	溝 19 出土遺物(1/4)	56	第114図	溝 34 (1/30)・出土遺物 (1/4)	80
第 80 図	2 区遺構に伴わない遺物① (1/4)	57	第115図	溝 35 (1/30)・出土遺物 (1/4)	80
第 81 図	2 区遺構に伴わない遺物②(1/4・1/2・1/3)	58	第116図	溝 36 (1/30)	80
第 82 図	3 区堆積状況柱状模式図(1/60)	59	第117図	耕作痕 1 (1/30)	81
第 83 図	3 区弥生時代遺構全体図(1/250)	60	第118図	耕作痕 2 (1/30)	81
第 84 図	土壙 27 (1/30)・出土遺物 (1/4)	61	第119図	3区遺構に伴わない遺物(1/3・1/2)	81
第 85 図	土壙 28 出土遺物(1/4)	61	第120図	4 区堆積状況柱状模式図(1/60)	82
第 86 図	土壙 28(1/30)	62	第121図	溝 37 (1/30)	82
第 87 図	土壙 29(1/30)	62	第122図	4 区遺構全体図(1/250)	83
第 88 図	土壙 30 (1/30)	62	第123図	4 区遺構に伴わない遺物 (1/4)	83
第89図	土壙 31 (1/30)	62	第124図	土器分類図 (1/8)	85

巻頭図版目次

巻頭図版1 遺跡周辺空中写真

巻頭図版 2 1 溝 29 土器出土状況(北東から)

2 分銅形土製品と土錘

図版目次

図版1 1 調査区遠景(北西から) 図版6 1 土壙28 (南東から) 2 溝 28 土器出土状況 (東から) 2 1 区弥生時代全景(南東から) 3 溝 29 土器出土状況(東から) 3 竪穴住居1・2 (東から) 図版 2 1 竪穴住居 1 土器出土状況 (東から) 図版7 1 溝30 (南東から) 2 土壙 32 (南東から) 2 土壙 10 土器出土状況 (南から) 3 柱穴列3 (東から) 3 溝1 (北西から) 図版8 1 4区完掘状況(南東から) 図版3 1 溝1 堆積状況(北東から) 2 中・近世全景(北西から) 2 溝 37 (北から) 3 現地説明会風景 3 竪穴住居3 (北東から) 図版9 1 1区溝1出土遺物 図版4 1 竪穴住居4 (北東から) 2 土壙 15 (南から) 2 1区包含層出土遺物 3 3区出土遺物① 3 溝 15 (南東から) 図版 10 1 3区出土遺物② 図版 5 1 溝 15 石包丁出土状況(北から) 2 1区出土石器 2 3区弥生時代全景(北西から) 3 土壙 27 (南東から) 3 1区出土サヌカイト片 4 2区出土石斧

写真目次

写真 1	小学生による発掘体験8	写真3 溝29 土器出土状況(南西から)	70
写真 2	溝 28 土器出土状況(南東から) 65	写真4 土器溜り1 土器出土状況(南から)	74

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

表2 トレンチ一覧表

遺物観察表

土器観察表

石器・石製品観察表

金属製品観察表

土製品観察表

第1章 地理的・歴史的環境

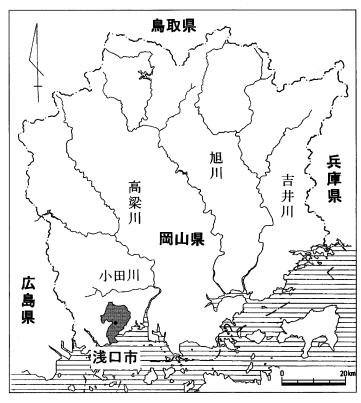
森山遺跡は岡山県の南西部に位置する浅口市(旧浅口郡)鴨方町六条院中に所在している。浅口市は北側を小田郡矢掛町、東側を倉敷市、西側を浅口郡里庄町・笠岡市、南側を瀬戸内海に面している。本市の中央には、東西方向に里見川が流れており、河川沿線は沖積層を形成している。北側に位置している遙照山・阿部山はゼノリスに富む花崗岩によって形成されている。

森山遺跡は、北を標高 400 mの阿部山・遥照山山系、南を標高 230 m泉山・竜王山山系に囲まれた谷底平野に位置する。中新世代の氷河期の洪水痕跡である山砂利層が現在の小田川流域と里見川流域に散見できる。山砂利層は標高 18 ~ 23 mにみられ、浅口市内でも確認できる。森山遺跡 4 区の基盤層はこの山砂利層であり、また、阿藤伯海記念公園内でも確認することができる。

市内の遺跡は古くは旧石器時代から存在する。笠岡市の阿部山からは小形のナイフ形石器が表採され、鴨方町益坂和田遺跡の発掘調査で槍先形石器が出土している。

弥生時代に入ると遺跡の数は飛躍的に増加する。前期の遺跡では、鴨方町小坂東犬飼本谷遺跡では 木葉文土器片が出土し、また、鴨方町六条院中仏堂池(六条院東)は弥生土器・サヌカイトが表採さ れている。中期の遺跡では、金光町上竹西の坊遺跡で竪穴住居が6軒検出され、弥生時代中期中葉の 土器、石鏃や石包丁、分銅形土製品等が出土している。鴨方町地頭上段林遺跡においても柱穴から中 期の土器がまとまって出土している。後期に入ると、高地と平地丘陵に立地する遺跡に二分される。 小坂東阿部山遺跡・本庄竹林寺天文台遺跡・本庄地蔵峠遺跡・小坂西大内七原遺跡は前者に属する。

竹林寺天文台遺跡は、標高 360 mに 所在する遺跡で、岡山県教育委員会の 確認調査の結果、弥生時代後期前葉の 焼失住居を含む竪穴住居が2軒確認さ れた。段林遺跡や道面遺跡なども標高 120mの丘陵上に位置し、水田との 比高差は 70 mを測る。段林遺跡や道 面遺跡では発掘調査が実施され、弥生 時代後期を中心としており、竪穴住居 1軒、土壙6基、炉跡1基を検出して いる。遺物では、弥生時代中期から後 期の土器、分銅形土製品1点、石錘1 点が出土している。道面遺跡でも竪穴 住居2軒、貯蔵穴1基等が検出されて いる。和田遺跡では終末期の木棺墓・ 土壙墓群からは特殊器台形土器、多量 の玉類が供献・副葬されており、首長 墓であることが確認されている。



第1図 遺跡位置図



第2図 調査地周辺の主要遺跡分布(1/40,000)

	◎ 調査地点	弥生時代	集落・散布地 ●	古墳 ▲	窯跡
	口 寺院跡	△ 製鉄遺跡	中世散在	午地 ■	城跡
	1 森山遺跡 2	定月遺跡 3	西の岡遺跡 4 三	ケ田遺跡 5	仏堂池散布地
. (5 近長遺跡 7	龍王池東塚古墳 8	畑岩屋塚古墳 9 山	ノ神塚古墳 10	算用ヶ岡古墳
1	1 阿部山遺跡 12	竹林寺天文台遺跡 13	竹林寺地蔵岩遺跡 14 地流	蔵峠遺跡 15	遙照山廃寺
1	6 遙照山瓦窯跡 17	日原散布地 18	犬飼本谷古墳群 19 杉名	谷古墳群 20	杉山城跡
2	1 字月原窯跡 22	坪古墳 23	段林遺跡 24 段林	林古墳 25	道面遺跡
2	6 塚地古墳 27	金屋遺跡 28	向山古墳群 29 向に	山 遺跡 30	地頭上八幡塚古墳
3	1 地頭上八幡塚遺跡 32	光林房古墳 33	日吉神社古墳 34 日	吉塚古墳 35	宮の脇古墳
3	6 和田遺跡 37	西知山城跡 38	片山古墳群 39 阿坎	坂古墳 40	上竹西の坊遺跡
4	1 城山城跡 42	沖ノ店遺跡 43	小坂東遺跡 44 両名	名遺跡 45	谷井遺跡
4	6 内平遺跡 47	石井古墳群 48	鴨山城跡 49 上名	名口荒神塚古墳 50	上名口古墳
5	1 下名口古墳 52	鴨山石鎚塚古墳 53	安芸守山城跡 54 安芸	告守山西南古墳群 55	占見廃寺
5	6 山崎瓦窯跡 57	奥迫遺跡 58	加賀池遺跡 59 加賀	賀谷古墳群 60	赤鉢遺跡
6	1 畳屋古墳 62	荒神山遺跡 63	土居遺跡 64 泉山	山城跡 65	下原塚古墳
6	6 侍山塚古墳 67	天神山塚古墳 68	向ヶ市塚古墳 69 鴻の	の巣山遺跡 70	山の後遺跡
7	1 タンゴ山古墳 72	岸名遺跡 73	金光須恵古窯跡群 74 長海	津遺跡 75	奈良井古墳
7	6 宮原古墳群 77	佐方城跡 78	長山城跡 79 竜	E山城跡	

古墳時代前期では、六条院東の鴻ノ巣山遺跡から庄内式~布留式にかけての土器が出土しており、 首長墓の可能性がある。この地域は前期から中期になると尾根先端部に箱式石棺を埋葬主体とする円 墳が造営される。タンゴ山古墳、侍山塚古墳 (六条院中)、向山古墳群 (小坂東) などがあり、また、 安芸守山から南側へ延びる尾根上には、竪穴式石室を主体とする小規模な円墳3基が築造されている。 小坂東には向山古墳群が所在しており、中でも箱式石棺を有する向山一号墳は報告がされており、人 骨2体と鉄製品である剣、鉇、鎌が出土している。人骨は鑑定の結果、一体は不明で、もう一体は熟 年男子のものと判明している。タンゴ山古墳は、2基の箱式石棺があり、2号石棺には人骨が残存し ており、銅鏃が発見されている。当地域の特徴として現段階では、古墳時代を通じて前方後円墳が築 造されない地域である。後期に入ると、横穴式石室を内部主体とする古墳が飛躍的に増加し、市内各 地に分布する。大半の古墳は丘陵部か中腹部に位置する。ここでは地域ごとにまとめる。小坂東では 犬飼古墳群、杉谷古墳群がある。本庄では、上名口古墳群がある。本庄川の上流域には乳文鏡が出土 した坪古墳がある。発掘調査の実施された段林古墳・塚地古墳では、須恵器、豊富な鉄器があり、塚 地遺跡からは馬具の轡の引手が出土していることは注目される。発掘調査の行われた宮の脇古墳には 金銅製の大刀や釧が副葬されていた。益坂の片山古墳群では、2号墳で発掘調査が行われ、幅1mの 無袖式横穴式石室が検出されている。六条院の四条原地区では、規模の大きな石室をもつ古墳が所在 している。天神山塚古墳、真戸止山下原塚古墳、向ヶ市古墳、永広塚古墳、軽部荒神塚古墳などがあ る。金光町の佐方宮原では、佐方川の東岸に宮原古墳群が4基存在していたが、現在は1号墳の別名 片山古墳だけである。円墳であり、市内では珍しく墳丘の残存状況が良好である。西岸には、奈良井 古墳を含む2基の古墳が築造されている。

古墳時代後期の集落遺跡は市内ではあまり知られていない。発掘調査の行われた金光町須恵の岸名遺跡では7世紀の竪穴住居11軒が検出されている。この周辺には須恵器窯が点在することが想定できる。そこから北東へ直線で3km離れた上竹西の坊遺跡では、7世紀頃の須恵器窯が1基検出されている。また、瀬戸内海沿岸部では製塩活動が盛んになり、金光町八重の東郷遺跡、寄島町三郎島遺跡、大浦神社裏遺跡で製塩土器が出土している。

古代には、高梁川以西の瀬戸内海沿岸は小田郡の笠岡市の大部分を除き、浅口郡となる。『和名類 聚抄』では浅口郡に八つの郷があったとされるが、浅口市に関係するのは占見郷・川村郷・小坂郷・ 大島郷とみられる。

7世紀以降に浅口郡にも仏教が本格的に導入される。金光町占見に所在する占見廃寺は、1950年代に発掘調査が行われており、七個の礎石と瓦が検出されているが、建物や伽藍配置などはわかっていない。瓦には、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、平城宮六二二五系軒丸瓦、平城宮六六六三系軒平瓦、均整唐草文軒平瓦などが出土している。占見廃寺の東100mほどの丘陵裾には占見廃寺の瓦生産をした2基の同瓦窯である山崎瓦窯跡群が築かれている。ロストル式平窯であり、平城宮六六六三系軒平瓦が出土している。市内には平地に築造された伽藍の他に遙照山から阿部山にかけての山上にも仏教聖地が求められ始める。標高約400mの遙照山山頂からは蓮華文軒平瓦や平瓦が表採されている。また、経筒も出土しており、現在は東京国立博物館に所蔵されている。阿部山からは、塔形品の相輪断片が表採されている。

中世になると遺跡の分布はさらに広がる。発掘調査の実施された小坂西の沖の店遺跡は、土師器の高台付椀や小皿を焼成した窯2基や溝からは中世後葉時期の日常雑器が一括で出土している。沖ノ店遺跡から東へ500mの距離にある小坂西の引野中世墓地では五輪塔が多数群集しており、亀山焼骨蔵器に古銭が副葬されていた。六条院中の真山戸山不動坊遺跡では一帯に窯壁が散布しており、亀山焼の窯跡が数基操業していたとみられている。中世段階では、他に注目される遺跡に山城がある。鴨方町では、小坂東の杉山城(標高:223m)・益坂の西知山城跡(標高:183m)・安芸守山城跡(標高:204m)、鴨方の鴨山城跡(標高:168m)、六条院中の泉山城跡(標高:221m)、六条院西の竜王山城跡(標高:289m)、金光町では、佐方の佐方城跡・竜王山城跡、大谷の長山城跡、寄島町では、青佐の青佐山城跡、柴木の茶臼山城跡などがある。森山遺跡南側の泉山城は、標高231mに位置する。秋田氏の居城とも云われ、北側約3.5kmに位置する鴨山城の出城とされている。山頂には平坦面が拡がり、可視域は沼限丘陵から笠岡湾が一望できる。

江戸時代には、備前岡山城下と備後福山城下を結ぶ鴨方往来(以西、浜街道)が整備される。寛文12 (1672) 年に池田光政の次子政言は鴨方に御用所を設ける。現在は、石組の井戸と石垣が残存している。幕末には攘夷を目的として御用所の背後に陣屋が設置される。また、鴨方藩御用地から東に300 m離れた庄屋役をつとめた旧高戸家住宅は、現在「かもがた町家公園」として改修され、母屋は県指定重要文化財、新宅は市指定文化財となっている。

主要参考文献

間壁忠彦「第二章 郷土のあけぼの」『鴨方町史』本編 鴨方町 1990 年

伊藤晃ほか『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 42 岡山県教育委員会 1981 年 小林利晴ほか『段林遺跡・段林古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 132 岡山県教育委員会 1998 年

岡本寛久『道面遺跡・塚地古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 147 岡山県教育委員会 1999

伊藤晃ほか『山陽新幹線建設に伴う調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 2 岡山県教育委員会 1974 年

桑田俊明ほか『内平遺跡』岡山県埋蔵文化財報告 22 岡山県教育委員会 1992 年

柴田英樹『内平遺跡』岡山県埋蔵文化財報告 26 岡山県教育委員会 1996 年

間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例(浅口郡鴨方町宇月原)」『倉敷考古館研究集報第4号』1968 年

柳瀬昭彦『岸名遺跡発掘調査』岡山県埋蔵文化財報告 9 岡山県教育委員会 1979 年

平井勝『鴨方町片山古墳群の発掘調査報告』岡山県埋蔵文化財報告 10 岡山県教育委員会 1980 年

鎌木義昌「岡山県浅口郡占見廃寺址」『日本考古学年報』2 誠文堂新光社 1954 年

宗澤節雄「浅口郡金光町占見瓦窯跡発見報告」『吉備考古第81・2合併号』1951年

中山薫ほか「第三章 ひらけゆく鴨方」『鴨方町史』本編 鴨方町 1990年

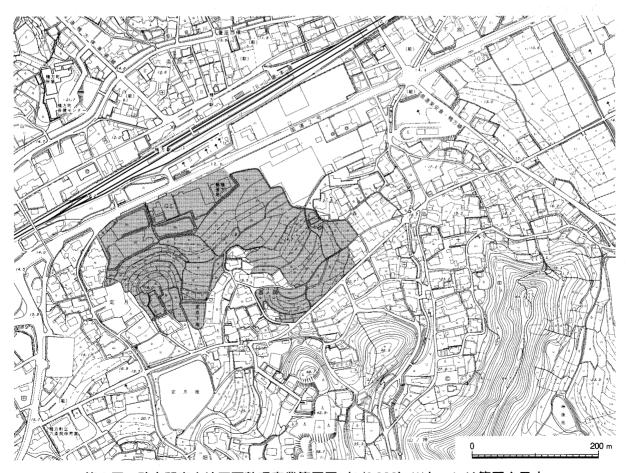
第2章 発掘調査の契機と経過

第1節 発掘調査の契機

鴨方町 (現:浅口市)では、平成16年度新規事業として鴨方町六条院中地区鴨方駅南土地区画整理事業の計画を策定した。事業は平成18年度から3ヵ年計画で、共愛地区、六愛地区にまたがる6haの農地を改良する計画である。

平成16年1月、鴨方町建設課(現:浅口市産業建設部都市計画課)から鴨方町教育委員会(現:浅口市教育委員会)に対して、浅口市鴨方町六条院中地内で埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。

予定地内は、周知の埋蔵文化財包蔵地の森山散布地・西の岡遺跡・定月散布地に該当することから、町教育委員会は遺跡の取り扱いについて岡山県教育庁文化財課と協議を行った。これを受け、文化財課と鴨方町教育委員会は協議を行い、鴨方町には専門職員がいないことから同町から派遣依頼を受けた岡山県古代吉備文化財センター職員が平成16・17年度施工範囲となる6haについて工事着工に先立ち確認調査を実施することとなった。



第3図 鴨方駅南土地区画整理事業範囲図 (1/6,000) ※トーンは範囲を示す

第2章 発掘調査の契機と経過

確認調査の結果、森山地区にて弥生時代の遺構が検出されたことから、岡山県教育庁文化財課、鴨 方町教育委員会と鴨方町建設課との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、いずれも記録保存 の措置をとることで合意をした。その後、浅口郡3町(金光町・鴨方町・寄島町)の合併により平成 18年3月21日に浅口市が誕生し、その業務は浅口市教育委員会に引き継がれた。

発掘調査は、浅口市産業建設部より委託を受け、岡山県教育庁文化財課の指導のもと、確認調査の結果から土地区画整理工事の影響を受ける1,500 ㎡について、浅口市教育委員会が発掘調査を平成18年5月9日から実施することとなった。

第2節 発掘調査の体制

平成 16 年度

鴨方町教育委員会

教 育 長 瀬良田 信雄

社会教育課

課 長 柚木忠明

課長代理 秋田 裕

発掘調査担当 大橋雅 也 (岡山県教育委員会から派遣)

平成 17 年度

鴨方町教育委員会

教 育 長 瀬良田 信雄

教育次長 岩井 勉

社会教育課

課 長 柚木忠明

課長代理 秋田 裕

発掘調査担当 河 合 忍 (岡山県教育委員会から派遣)

平成 18 年度

浅口市教育委員会

教 育 長 瀬良田 信雄(5月まで)

工 藤 進

教育次長 柚木忠明

国際文化交流課

課 長 秋田・裕

主 事 大橋由武(事務担当)

埋蔵文化財発掘調査員 水 田 貴 士 (調査担当)

浅口市文化財保護委員会委員

秋田征矢雄(委員長) 川﨑恪郎(副委員長) 大島至孝 貝畑正己 加原耕作 (故)川上順二 金光英子 西野良一 花房泰志 藤沢 雅 山本敏夫 弓削 崇

発掘調査作業員及び遺物整理作業員

今井脩二 太田清明 尾崎正章 尾崎満子 栗山林二 栗山幸子 斉藤修司 定兼清明 清水浩介 清水登幾至 細羽千枝 山下 勝 山下昭三 山下恵美子 柚木富喜子

表 1 文化財保護法に基づく書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告 (第99条/旧第98条の2)

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	主体者	担当者	処理の内容 ・理由
鴨教社 第 108 号 H17.2.10	周知	集落跡 定月遺跡・森山遺跡・ 西の岡遺跡	浅口郡鴨方町六条院中 定月、森山ほか	76	土地区 画整理	有	鴨方町長 田主智彦	大橋雅也	H16.12.14 ~ H17.1.18
鴨教社 第 76 号 H18.3.20	周知	集落跡 定月遺跡・森山遺跡・ 西の岡遺跡	浅口郡鴨方町六条院中 定月、同森山ほか	80	土地区 画整理	有	鴨方町教育委員会 教育長 瀬良田信雄	河合 忍	H18.1.24 ~ H18.2.8

埋蔵文化財発掘の通知(第93条/旧第57条の3)

岡山県文書 番号 日付	種類及び名称	所在地	面積	(m๋)	目的	主体者	期間	処理の内容・理由
教文埋 第 246 号 H18.5.18	集落跡 森山遺跡	浅口市鴨方町六条院中 森山ほか	1,	,500	土地区画整理	事業者	H18.10.1 ~ H20.3.31	発掘調査

発掘調査の報告 (第99条/旧第98条の2)

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	主体者	担当者	処理の内容 ・理由
浅教国 第 38 号 H18.5.10	周知	集落跡 森山遺跡	浅口市鴨方町六条院中 森山所在ほか	1,500	土地区 画整理	有	浅口市教育委員会 教育長 瀬良田信雄	水田貴士	H18.5.9 ~ H18.9.1

埋蔵文化財発見通知 (第100条/旧第61条)

岡山県文書 番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第 1416 号 H17.3.17	弥生土器・土師器 ・陶磁器 1箱	浅口郡鴨方町六条院中 定月遺跡・森山遺跡・ 西の岡遺跡	H16.12.14 ~ H17.1.18	鴨方町教育委員会 教育長 瀬良田信雄	個人	鴨方町教育委員会
教文埋 第 151 号 H18.4.26	弥生土器ほか 整理箱 1 箱	浅口市鴨方町六条院中 森山遺跡	H18.3.30	浅口市教育委員会 教育長 瀬良田信雄	個人	浅口市教育委員会
教文埋 第 803 号 H18.10.24	弥生土器ほか 整理箱 49 箱	浅口市鴨方町六条院中 森山遺跡	H18.5.9 ~ H18.10.14	浅口市教育委員会 教育長 工藤進	個人	浅口市教育委員会

第3節 発掘調査及び報告書作成の経過

1 調査経過の概要

発掘調査は、平成18年5月9日に着手し、同年10月14日に終了した。着手後、浅口市教育委 員会教育長から、岡山県教育委員会教育長宛に平成18年5月10日付で文化財保護法第99条に基 づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」が提出された。発掘調査面積は1,500 ㎡である。平成18年4月 28日から浅口市教育委員会職員が1名で調査にあたった。調査は、12m規格道路の南側部分である 1区から着手し、順次北側の2区を実施した。この年は梅雨を向かえる前にも長雨が続き、また、調 査内に現代の暗渠用水路が設置されていたことから浸水や排水作業等の影響で調査の進捗状況に遅れ が生じた。重機により現代水田層を除去したのち、人力で遺構の検出・掘り下げを行い、随時、遺構 の実測・写真撮影を行った。当遺跡では、確認調査の結果を受けて、3区から多くの遺構や遺物が検 出されることが想定された。調査では、遺構が希薄だと思われていた1区南側の微高地部分から竪穴 住居・土壙や溝等が検出された。2区においても予想とは異なり、弥生時代の遺構が検出された。3 区では、弥生時代の遺構面で溝から多量の土器が出土し、貴重な成果をあげる反面、調査の進展を遅 らせる一因ともなった。同年 10 月 24 日付で玉島警察署長宛に文化財保護法 100 条に基づく「埋蔵 文化財発見通知」を提出した。成果としては、主に弥生時代中期から後期、古墳時代後期、中世から 近世にいたる集落跡を確認し、出土した遺物は整理箱にして49箱であった。なお、発掘調査期間中 には、浅口市教育委員会が主催する「チャレンジ女性学級」の生徒90名が発掘現場見学を行った。 夏休み期間中には小学生を対象とした「あさくちっこわくどき体験」事業の一環で、森山遺跡での発 掘体験や浅口市中央公民館で出土した土器の洗浄や接合等の体験学習を実施した。また、9月9日(土) には現地説明会を実施した。市としては初めての現地説明会で、1・2区で検出された弥生時代の竪 穴住居や溝、近世の土壙・溝等の検出状況の説明や、テント内では出土遺物・写真パネル・発掘調査 道具、発掘調査器材・土器に触れるコーナーの展示を行い、60名を越える参加者で賑わった。

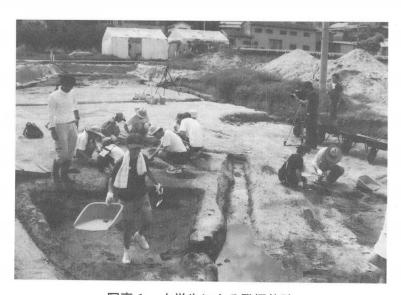


写真 1 小学生による発掘体験

2 調査日誌抄

平成 18 年 4 月 28 日 (金) 表土掘削開始。

5月9日(火)発掘資材搬入

1 区発掘調査開始。

7月4日(火)2区発掘調査開始。

7月26日(水)チャレンジ女性学級

現地研修開催。

7月29日(土) わくどき体験

「森山遺跡で発掘体験」開催。

8月9日(水)4区発掘調査開始。

8月22日(火)3区発掘調査開始。

9月9日(土)現地説明会開催。

10月14日(土)発掘調査終了、発掘資材撤去。

3 報告書の作成と体制

整理作業と報告書の作成は中央公民館において行った。発掘調査は、平成18年10月中旬には終了していたが、調査の最終段階まで遺構・遺物の検出作業を継続して行っていたことから、調査期間中に全ての出土品の洗浄及び注記、遺物整理、遺構図面整理、写真整理といった整理作業を終了することができなかった。そのため、報告書の作成業務は、これらの未整理の遺物、図面、写真等の整理作業から開始した。出土した遺物は整理箱49箱であったが、そのうち半数ほどは未洗浄であったため、洗浄作業が急務となった。土器は鉄分が付着しており、洗い難く困難を窮めた。土器の注記・復元・抽出、石器と石製品・金属器、遺物実測と作業を進めていった。遺物の実測は一部を整理作業員が行った。調査で検出し、整理を行った遺構は、竪穴住居4、柱穴列3、土壙35、溝38、土器溜り1に及んだ。出土した遺物のうち、土器284点、石器と石製品20点、金属製品5点、土製品5点を本書に掲載している。出土した遺物のうち、報告書に掲載したものについては、報告書に記載されている遺構名および遺物番号で整理している。また、その他の遺物は、調査時の旧遺構番号で保管している。なお、これらの遺物は、図版や写真とともに、中央公民館及び鴨方郷土資料館収蔵庫で保管している。

報告書作成の体制

平成 19 年度

浅口市教育委員会

教育長 工藤 進

教育次長 柚木忠明

国際文化交流課

課 長 谷本 靖

埋蔵文化財専門員 水 田 貴 士 (報告書・整理担当)

主 事 三 宅 泰 英

報告書作成協力者

定金司郎(浅口市かもがた町家公園長)

第3章 確認調査の概要

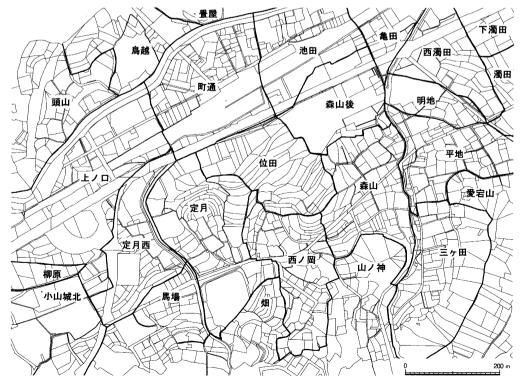
第1節 調査の概要

現在は森山丘陵、西ノ岡丘陵、定月丘陵は宅地に改変されており、丘陵裾部は、ほとんどが水田や畑として利用されている。、

鴨方駅南土地区画対象範囲は『改訂 岡山県遺跡地図』(第四分冊)の「鴨方町」に掲載されている 211 定月散布地、212 西の岡遺跡、213 森山散布地に隣接または重複しており、丘陵部分を中心に 遺跡の存在が考えらている。

調査地内には、第4図の示す通り、東から「森山(もりやま)」、「位田(くいだ)」、「西ノ岡(にしのおか)」、「定月(さだつき)」などの字名がある。また、周辺字には東から「濁田(にごた)」、「下 濁田(しもにごた)」、「西濁田(にしにごた)」、「亀田(かめだ)」、「下ノ原(しものはら)」、「畳屋(たたみや)」、「平地(なるぢ)」、「明地(みょうぢ)」、「三ヶ田(みかだ)」、「愛宕山(あたごやま)」、「森山後(もりやまあと)」、「山ノ神(やまのかみ)」、「町通(まちどおり)」、「鳥越(とりごえ)」、「上ノ口(うえのくち)」、「畑(はだ)」、「馬場(ばば)」、「定月西(さだつきにし)」、「小山城北(こやまじろきた)」、「柳原(やなぎはら)」、「頭山(つむりやま)」などの小字名が残る。

この呼称と境界が現在も使用されていることから、トレンチの位置や遺跡の範囲を示す際にはこれ を用いて表記することとする。

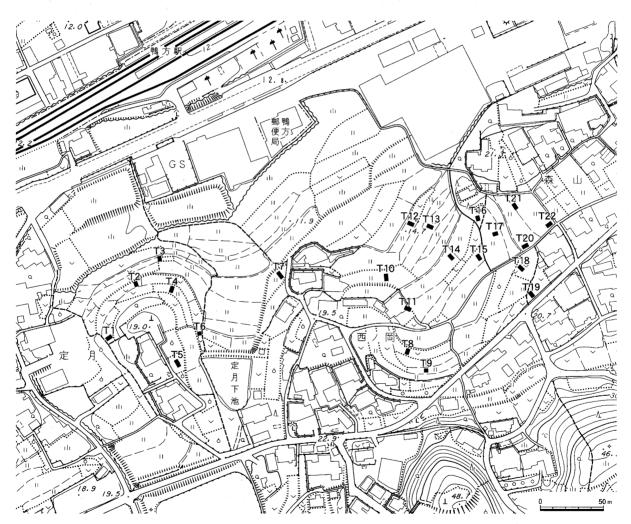


第4図 調査地区周辺の小字地名 (1/8,000)

確認調査は平成 16・17 年度に行った。平成 16 年度に 11 箇所、平成 17 年度に 11 箇所の合計 22 箇所を調査した。定月地区に 6 箇所、西の岡地区に 3 箇所、位田地区に 6 箇所、森山地区に 7 箇所に設定した。

調査の方法は、4地区とも重機を使用せず人力で掘削を行った。調査面積は、定月地区で37 ㎡、 西の岡地区で31 ㎡、位田地区で36 ㎡、森山地区で54 ㎡の合計158 ㎡である。

調査終了後は、排土を数段階づつ分けて戻し、ランマーで叩き締めて旧状に復旧するように努めた。



第5図 トレンチ位置図(1/3,000)

第2節 定月地区の概要

T1 (第6図)

T1は、調査区西側に位置する。北東側約 40 m付近にはT2 が、南東側約 50 m付近にはT3 が位置する。 $2 \times 3 \text{ m}$ のトレンチである。現地表の標高は 15.2 mであり、現耕作土下、標高 15 mで 岩盤の風化土壌が認められた。結果、遺構は存在しなかった。

T2 (第6図)

T2は、調査区の北側に位置する。北東約 30 m付近にはT3が、南東側約 30 m付近にはT4が位置する。 $2 \times 3.5 \text{m}$ のトレンチである。現地表の標高は 14.8 m を測る。現耕作土の下には水平堆積層があり、この下、標高 14.4 m で北西に傾斜する堆積層を確認している。この灰黄褐色細砂層から中世段階の土師器が出土している。岩盤の風化土壌は標高 14 m から北西方向に傾斜して下がっていく。

T3 (第6図)

T3は、調査区の最も北側に位置する。南西側約 30 m付近にT2が、南側約 20 m付近にはT4が位置する。 2×3 mのトレンチである。現地表の標高は 12.8 mである。現代の耕作土第 1 層の下には、少量の中世の遺物を包含する第 $4 \sim 6$ 層が確認されるものの、遺構は認められない。この層の直下、標高 12.5 m付近で緩やかに北側へと傾斜するにぶい黄褐色粘土第 7 層を確認した。

T4 (第6図)

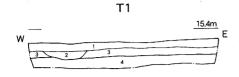
T4は、調査区の中央部よりやや北東側に位置する。北側20m付近にはT3が、南東側約40m付近にはT6が位置する。2×3mのトレンチである。現地表の標高は15.5mを測る。耕作土の下に近世以降と思われる水平堆積の水田層を確認した。この下は北側に傾斜する灰黄褐色細砂層が堆積しており、中近世の遺物をわずかに包含する。標高15.2mで岩盤の花崗岩風化土壌になる。

T5 (第6図)

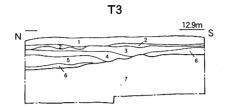
T5は、調査区の中央よりやや南側に位置する。北西側約60m付近にはT1が、北東側約30m付近にはT6が位置する。丘陵頂部に設けた2×4mのトレンチである。現地表の標高は18mである。現耕作土の下には、灰黄色細砂層があり、この直下標高17.7m付近で基盤層である花崗岩風化土壌を確認した。このことから大きく削平を受けているものと推測される。出土遺物は中世以降の土師器・陶磁器の細片のみである。

T6 (第6図)

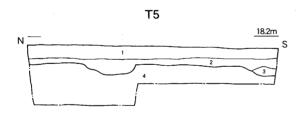
T6 は、調査区中央よりやや東側に位置する。北西側約 40 m付近にはT4 が、南西側約 30 m付近にはT5 が位置する。 2×2 mのトレンチである。現地表の標高 15.10 mである。現代の耕作土第 1 層の直下には、わずかに中世の遺物を包含する第 $3\sim5$ 層が確認されるものの、遺構は認められない。



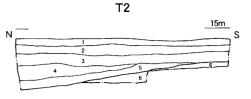
- 1 暗灰色微~細砂(耕作土)
- 2 黄灰色微~細砂
- 3 黒色微砂く炭層〉
- 4 黄橙色粗砂~砂礫(地山)



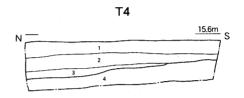
- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 にぶい黄橙色粘質土〈Fe 多含〉
- 4 明黄褐色粘質土(中世包含層)
- 5 にぶい黄褐色粘質土(中世包含層)
- 6 明黄褐色粘土(中世包含層 XMn 多含 >
- 7 にぶい黄色粘土(基盤層)



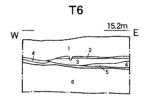
- 1 暗灰色微~細砂(耕作土)
- 2 黄灰色微~細砂
- 3 暗灰黄色微〜細砂(近現代の土壙)
- 4 黄橙色細~粗砂(地山)



- 1 黒色微~細砂(耕作土)
- 2 黄灰色微~細砂(耕作土)
- 3 浅黄色微~細砂
- 4 にぶい黄色微〜細砂
- 5 灰黄褐色細砂
- 6 黄橙色粘土(基盤層)



- 1 暗灰色微~細砂(耕作土)
- 2 灰黄色微~細砂
- 3 灰黄褐色細砂 (Mn 多含)
- 4 明黄褐色砂礫混粘土(基盤層)



- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 明黄褐色粘質土(中世包含層)
- 4 にぶい黄褐色粘質土(中世包含層)
- 5 明黄褐色粘土(中世包含層 XMn 多含 >
- 6 にぶい黄褐色粘土(基盤層)



第6図 T1~T6 (1/60)

この層の直下、標高 14.7 m付近で緩やかに東側へと傾斜する基盤層のにぶい黄褐色粘土第 6 層を確認した。

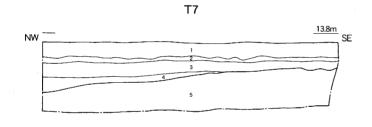
第3節 西ノ岡地区の概要

T7 (第7・8図)

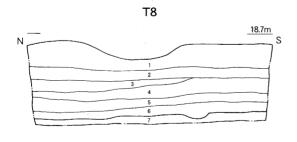
T7は、調査区の北西側に位置する。南西側約80m付近にはT6が、東側約90m付近にはT10が位置する。2×5mのトレンチである。現地表の標高は13.76mである。古代~中世の遺物を包含する第3・4層のうち、褐灰色粘土層第3層の下面が平坦であるのに対し、暗灰黄色粘土層第4層の下面は緩やかに北西へと傾斜することから、出土した少量の土器から古代以降の自然堆積層と考えられる。この旧地形を留める基盤層上面で遺構は認められない。図化できる出土遺物は、亀山焼の甕1であり、胴部外面には格子目タタキを残し、内面はナデを施す。

T8 (第7図)

T8は、調査区の南東側に位置する。北側約60m付近にはT10が、南東側約20m付近にはT9が位置する。2×4mのトレンチである。現地表の標高は18.5mである。弥生時代後期の包含層と考えられる層は標高17.6m付近で確認され、緩やかに北側へと傾斜する。この層の直下、標高17.5m付近で黄褐色粘土の基盤が確認される。また、平面の検出はできなかったが、土層の断面の観察によって溝状の落ち込みを確認した。



- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 にぶい黄褐色粘土
- 3 褐灰色粘土(中世包含層)
- 4 暗灰黄色粘土(古代~中世包含層)
- 5 明黄褐色粘土(基盤層)



T9

N

19.4m

2

3

4

- 1 暗灰色微~細砂(耕作土)
- 2 浅黄色細砂〈Fe 含〉
- 3 灰白色細~粗砂
- 4 にぶい黄褐色細砂
- 5 灰黄褐色微~細砂
- 6 褐灰色細砂く遺物含〉
- 7 黄橙色微砂~粘土(基盤層)

- 1 暗灰色微~細砂(耕作土)
- 2 灰白色細~粗砂
- 3 灰黄褐色細砂〈遺物含〉
- 4 黄褐色微~粘土(基盤層)

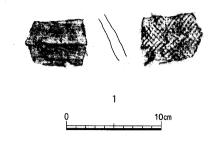


第7図 T7~T9 (1/60)

T9 (第8図)

T9は、調査区の南東側に位置する。北側約80 m付近にはT10が、北西側約20 m付近にはT9が位置する。2 $\times 1.5$ mのトレンチである。現地表の標高は19.2 mである。現耕作土の下には20cmほどの厚さで粗砂が堆積し、その下、標高18.7 mで北側に傾斜する厚さ10cmほどの灰黄褐色細砂層を確認した。

出土遺物は細片のみであったが、この層が T 16・ T 21 で確認された弥生時代後期の遺物包含層と対応するものと推測された。標高 18.6 mで黄褐色の基盤層を確認した。



第8図 T7出土遺物(1/4)

第4節 位田地区の概要

T 10 (第9図)

T 10 は、調査区の中央やや西側に位置する。西側約80 m付近にはT7が、東側約50 m付近にはT 14 が位置する。 2×5 mのトレンチである。現地表の標高は、15.78 mである。現代の耕作土第1層の直下には、中世の遺物を包含する第 $3\cdot 4$ 層が確認される。この層には基盤層がブロック上に入っており、直下の標高15.5 m付近で基盤層である明褐色粘土第5 層が存在することから、この地点は中世以降に削平されたと考えられる。

T 11 (第9図)

T 11 は、調査区の最も北側に位置する。南側 20 m付近にはT 12 が、南東側約 30 m付近にはT 13 が位置する。2×2 mのトレンチである。現地表の標高は13.48 mである。現代の耕作土第1層の直下には、近世以降の水田層第3層が水平堆積している。その下層にはT 12 の古代~中世の水田層(T 12 第4層)に対応する鉄分を含んだ灰黄褐色粘質土第4層が確認できる。その直下にはT 12・T 13 で認められた弥生時代遺物包含層の鉄分・マンガンを含む灰褐色砂質土(T 12 第5層・T 13 第7層)や黒褐色砂質土(T 12 第7層・T 13 第10層)が認められず、遺物を含まない第5~9層がある。標高12.9 m付近で黄褐色粘土の基盤層第10層を確認した。

T 12 (第9図)

T 12 は、調査区中央の北西側に位置する。北側約 20 m付近にはT 11 が、東側約 20 m付近にはT 13 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 14.48 mである。鉄分・マンガンを含む灰黄褐色砂質土第 5 層の下層から土壙を 6 基検出した。検出面での土壙の埋土は黒褐色粘質土である。出土遺物は少ないものの、T 13 同様、弥生時代中期に属する可能性が考えられる。これより下層は遺物を含まない粗砂層である。

第3章 確認調査の概要

T10

N

15.9m

s

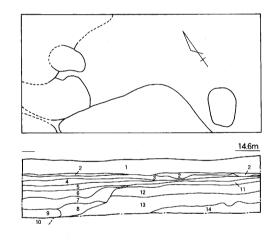
15.9m

s

- S 1 黒褐色粘質土(耕作土)
 - 2 灰黄褐色粘質土(床土)
 - 3 にぶい黄褐色粘土(中世包含層)(地山ブロック混、Fe含)
 - 4 暗灰黄色粘土(中世包含層)(地山ブロック混)
 - 5 明褐色粘土(基盤層)

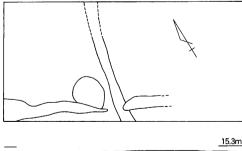
- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 灰黄褐色粘質土(近世以降水田層)(暗褐色粘質土塊混、Fe 多含)
- 4 灰黄褐色粘質土…(古代~中世水田層 XFe 多含 >
- 5 灰黄褐色〜黒褐色粘質土く粗砂混〉
- 6 暗褐色粘土〈Fe、Mn 多含、粗砂混〉
- 7 灰黄褐色粗砂 〈Fe 多含 〉
- 8 灰黄褐色~黒褐色粗砂〈Fe、Mn 多含〉
- 9 褐灰色粗砂
- 10 黄褐色粘土(基盤層)

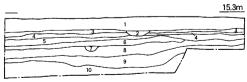
T12



- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 褐灰色~灰黄褐色粘質土(近世以降水田層)(Fe 多含)
- 4 褐灰色~灰黄褐色粘質土(古代~中世水田層 XFe 含 >
- 5 灰黄褐色砂質土…(弥生後期包含層)(Fe、Mn 多含)
- 6 褐灰色砂質土…(弥生中期?土壙埋土)
- 7 黒褐色粘質土…(弥生中期?土壙埋土)
- 8 灰黄褐色粗砂(弥生中期?土壙埋土)
- 9 黒色粘土(弥生中期?土壙埋土)
- 10 黒褐色粘土(弥生中期?土壙埋土)
- 11 灰黄褐色砂質土〈褐灰色~黒褐色砂質土塊混〉
- 12 暗褐色粗砂〈褐灰色粗砂塊混〉 13 暗褐色粗砂〈Fe 多含〉
- 14 にぶい黄褐色粗砂

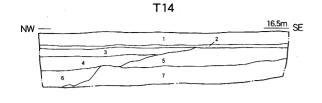
T13





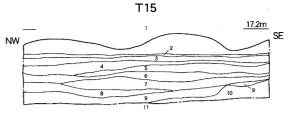
- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 褐灰色~灰黄褐色粘質土(近世以降水田層)(Fe含)
- 4 灰黄褐色砂質土 (弥生後期包含層 XFe、Mn 多含 >
- 5 褐灰色砂質土(弥生中期~後期?包含層)
- 6 褐灰色~黒褐色砂質土(弥生中期?包含層)
- 7 黒褐色砂質土(弥生中期?溝埋土)
- 8 灰黄褐色砂質土~粗砂〈黒褐色砂質土塊混〉
- 9 にぶい黄褐色粗砂く褐灰色粗砂塊混、Fe 含〉
- 10 暗褐色粗砂〈Fe 多含〉

0 2



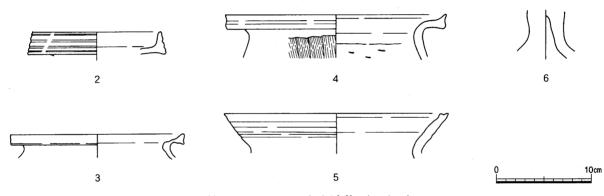
- 1 暗青灰色砂礫混粘土(耕作土)
- 2 暗緑灰色砂礫混粘土(床土)
- 3 青灰色粗砂~細砂
- 4 灰色粗砂混粘土
- 5 暗灰色粗砂~細砂〈遺物多含〉
- 6 黒褐色粗砂〈Fe 含〉
- 7 淡黄色粗砂 〈Fe 含 〉





- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 灰黄褐色砂質土(近世以降水田層)
- 4 灰黄褐色砂質土~粗砂
- 5 黒色粘質土(弥生中期~後期包含層)
- 6 褐灰色粗砂〈黒褐色砂質土塊混〉
- 7 褐灰色砂質土~粗砂
- 8 褐灰色粗砂
- 9 褐灰色砂
- 10 にぶい黄褐色粗砂〈暗褐色粗砂塊混〉
- 11 暗褐色粗砂〈Fe 多含〉

第 10 図 T 14 · T 15 (1/60)

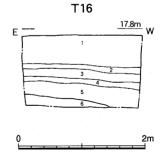


第 11 図 T 14 出土遺物 (1/4)

T 13 (第9図)

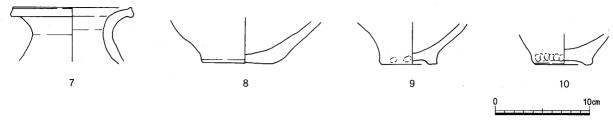
T 13 は、調査区中央に位置する。北西側約 30 m付近にはT 11 が、南東側約 30 m付近にはT

14が位置する。2×4mのトレンチである。現地表の標高は15.21 mである。調査区南西では鉄分・マンガンを多く含む灰褐色砂質土第4層を切って掘り込まれた鎌倉時代の溝1条(第4~6層)が検出された。鉄分・マンガンを含む灰褐色砂質土第4層の下からは、弥生時代中期~後期の遺物を包含する褐灰色~黒褐色砂質土を含む第5・6層を確認でき、その下から幅15~20cm、深さ10cm前後の溝1条と径50cm、深さ10cm前後の土壙1基を検出した。出土した土器は小片であり、時期の判断が難しいものの、層位的な関係及び埋土(黒褐色砂質土)から判断すれば、弥生時代中期に属する可能性が考えられる。これより下層は遺物を含まない粗砂層である。



- 1 灰色細砂(造成土)
- 2 灰色粗砂
- 3 明黄褐色細砂〈Fe多〉
- 4 黄灰色細~粗砂〈Fe 含〉
- 5 褐灰色細砂〈遺物多含〉
- 6 黄橙色粘土(基盤層)

第 12 図 T 16 (1/60)



第 13 図 T 16 出土遺物 (1/4)

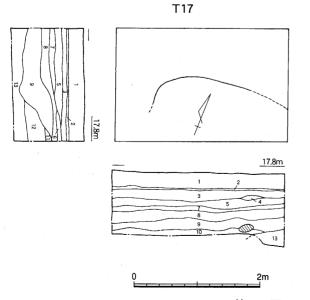
T 14 (第 10 · 11 図)

T 14 は、調査区中央部の南側に位置する。北西約 30 m付近にT 13 が、東側約 20 m付近にT 15 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は、16.5 mである。現耕作土下は、粗砂や砂礫の堆積であり湧水が激しい。現耕作土の下は北側へ傾斜する堆積を認め、標高 16.2 mで厚さ $20 \sim 30$ cm ほどの弥生時代後期の遺物を包含する暗灰色の粗砂層を確認し、低位部の堆積状況と考えられる。

出土遺物は、弥生土器の壺2、甕3・4、須恵器の壺5、土師器の高杯6である。2は、二重口縁を呈し、外面・内面とともに赤色顔料が塗布されている。また、胎土に角閃石を多く含む。3・4は甕である。4の外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリを施している。5は口径22.6cmを測る。

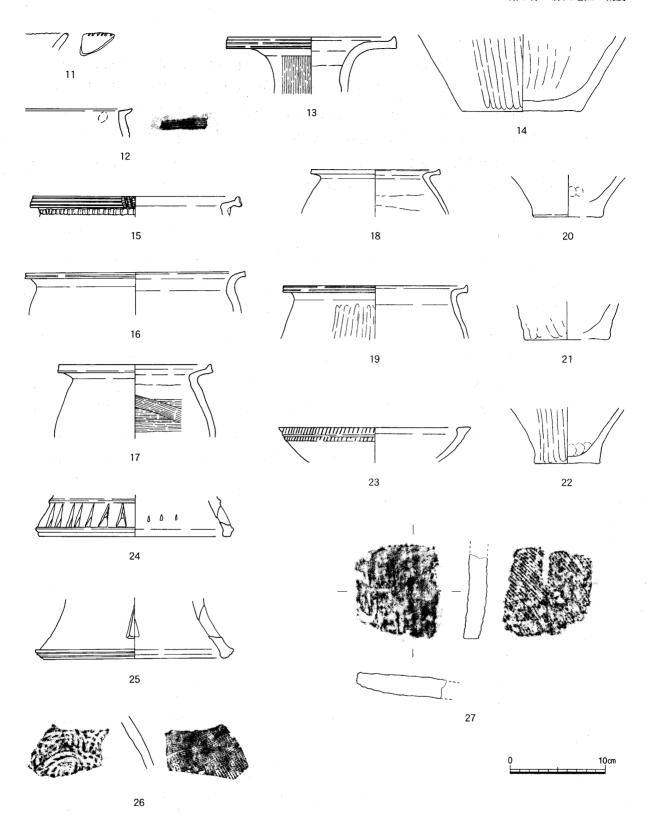
T 15 (第 10 図)

T 15 は、調査区中央の南側に位置する。西約 20 m付近にはT 14 が、北側 30 m付近にはT 16 が位置する。2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 17.00 mである。現代の耕作土第1層の直下には、近世以降の水田層第3層が水平堆積しており、その下層には粗砂を多く含む灰黄褐色砂質土第4層が確認された。この灰黄褐色砂質土は鉄分・マンガンを含む灰褐色砂質土層を削平している可能性が高く、その下層に存在する弥生時代中~後期の遺物包含層である黒色粘質土第5層の一部も削平している。黒色粘質土より下は遺物を含まない粗砂層である。



- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 灰黄褐色粘質土(近世以降水田層 XFe 多含)
- 4 にぶい黄褐色粘質土
- 5 にぶい黄橙色粘質土(古代~中世水田層)(Fe 含)
- 6 灰黄褐色砂質土(弥生後期包含層)(Fe、Mn 多含)
- 7 褐灰色~黑褐色粘質土(弥生中期溝埋土)
- 8 黒褐色粘質土(弥生中期溝埋土)
- 9 黒色粘土(弥生中期溝埋土)(暗褐色粘土塊混)
- 10 黑褐色粘質土(弥生中期(前期含)溝埋土)(粗砂混)
- 11 黒褐色砂質土~粗砂
- 12 暗褐色粗砂く粘質土混〉
- 13 褐灰色粗砂(縄文晚期包含層) 黑褐色粘質土塊混>

第 14 図 T 17 (1/60)



第 15 図 T 17 出土遺物 (1/4)

第5節 森山地区の概要

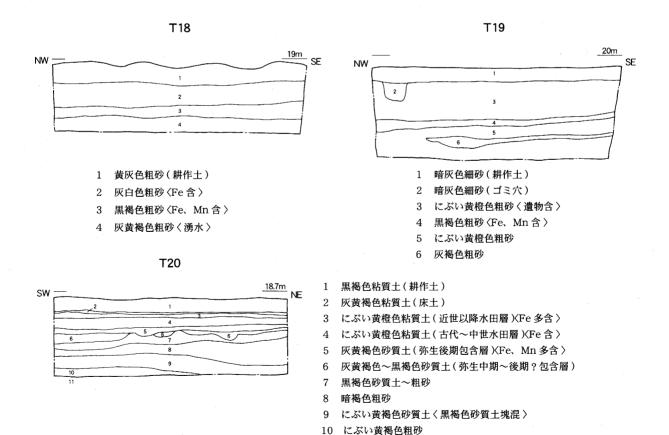
T 16 (第12·13 図)

T 16 は、調査区中央の北西に位置する。北東側約 30 m付近にはT 21 が、南東約 20 m付近にはT 17 が位置する。 2 × 2 mのトレンチである。現地表の標高は 17.7 mである。堆積状況は標高 16.95 m付近で褐灰色を呈する弥生時代後期の遺物包含層を確認した。この層の下位には黄灰色の基盤層があり、南西側へ低く傾斜している。遺物は、弥生土器の壺・甕が出土しているが、図化できたのは 4 点である。 7 は壺で口径 12.4cm を測る。口縁部には微量ながら赤色顔料が塗布されていた痕跡が残る。 8 は壺の底部である。11・12 は甕の底部である。

T17 (第14・15図)

T17は、調査区の中央西側に位置する。北西側約20m付近にはT16が、南東側約30m付近にはT20が位置する。 2×3 mのトレンチである。現代の現地表の標高は17.72mである。調査区北東側で検出された鉄分・マンガンを含む灰褐色砂質土第6層の下で幅2mを超える溝を検出した。溝は埋土が黒褐色粘質土・黒色粘土第7~10層などであり、最深部で深さが55cm、弥生時代中期の遺物を大量に包含する。これより下層は粗砂層である。

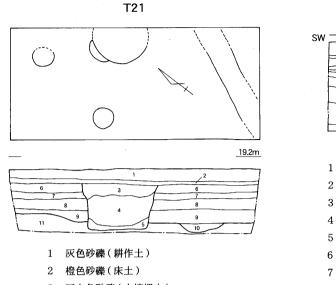
出土遺物は、縄文晩期の鉢 11、弥生時代前期の甕 12、弥生時代中期の壺 13・14、甕 15~22、高杯 23~25、須恵器 26、瓦 27 がある。11 は口縁端部に刻目を持つ。12 は口縁下に多条の櫛描沈線をめぐらす。13 は口縁端部を上方に摘み上げ、頸部にタテ方向にハケメがみられ、口径 17.6cmを測る。15 は口縁部に3条の凹線文を施し、棒状浮文で加飾をし、また、頸部には貼付突帯を巡らし、



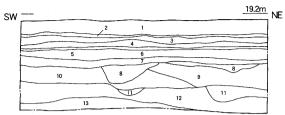
第 16 図 T 18 ~T 20 (1/60)

11 暗褐色粗砂〈Fe 多含〉

2m



- 3 灰白色砂礫(土壙埋土)
- 4 浅黄橙色粘土混じり細砂(土壙埋土)
- 5 灰白色粘土(土壙埋土)
- 6 灰白色粘土
- 7 浅黄色細砂
- 8 黄灰色細砂
- 9 暗赤灰色細~粗砂(弥生時代後期包含層)
- 10 暗赤灰色細~粗砂(溝埋土)
- 11 明黄褐色粘土(基盤層)



T22

- 1 黒褐色粘質土(耕作土)
- 2 灰黄褐色粘質土(床土)
- 3 にぶい黄橙色粘質土(近世以降水田層 XFe 多含>
- 4 にぶい黄橙色粘質土(古代~中世水田層 KFe 含>
- 5 灰黄褐色砂質土(弥生後期包含層)(Fe、Mn 多含)
- 6 灰黄褐色砂質土(弥生後期?包含層)(黒褐色砂質土塊混)
- 7 灰黄褐色~黒褐色砂質土(弥生中期~後期?包含層)
- 8 黒褐色砂質土(弥生時代中期?包含層)
- 9 にぶい黄褐色粗砂
- 3 にぶい黄橙色粘質土(近世以降水田層) (Fe 多含)
- 10 暗褐色粗砂
- 11 黒褐色砂質土
- 12 にぶい黄褐色砂質土〈黒褐色砂質土塊混〉
- 13 にぶい黄褐色砂質土〜粗砂



第 17 図 T 21 · T 22 (1/60)

その上を指で押さえている。17 は内面にハケメを施す。19 は口径 19.4cm を測り、外面はタテ方向のヘラミガキによって調整している。20~22 は甕の底部である。23 は椀状に立ち上がる口縁部に水平方向に引き出され、外面には二段に刻み目が巡らされている。24・25 は高杯の脚部で透かしが施される。26 は破片であるが、壺か甕の胴部であると推測できる。27 は凹面には布目痕跡が、凸面には縄目タタキがみられる。

T 18 (第 16 図)

T 18 は、調査区の中央南側に位置する。北側約 20 m付近にはT 20 が、南側約 20 m付近にはT 19 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 18.9 mである。T 19 と近似した粗砂の堆積状況であり、標高 18.2 m付近のマンガン集積層の上位で遺物をわずかに含むが、これ以下には遺物を含まない。

T 19 (第 16 図)

T 19 は、調査区の最も南側に位置する。北側約 20 m付近にはT 18 が、北東側約 50 m付近にはT 22 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 19.85 mである。現代の耕作土直下に厚く粗砂が堆積しており、この粗砂中に弥生時代後期から中近世までの遺物が包含されていた。粗砂は粘土塊なども含まず均質的であることから、自然堆積と思われるが、時期幅のある遺物の包含状況を考えると 2 次堆積である可能性が高い。なお、標高 19 m付近のマンガン集積層以下の粗砂層は、

遺物を含まない砂礫を含む粗砂層である。

T 20 (第 16 図)

T 20 は、調査区の中央部に位置する。北西約 30 m付近にはT 17 が、北側約 30 m付近にT 21 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 18.6 mである。T 22 と近似した堆積状況を示すが、弥生時代遺物を包含する第 $5 \cdot 6$ 層より下の粗砂層中には、T 22 で認められた黒褐色砂質土が認められない。

T 21 (第17図)

T 21 は、調査区中央のやや北側に位置する。南側約 30 m付近にはT 20 が、南西約 20 m付近にはT 17 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 19 mである。現在の耕作土下から径約 90cm ほどの井戸状の土壙を検出した。この土壙は深さ 75cm ほどを測り、江戸時代末期以降の陶磁器などが出土し、この時期の遺構である。現耕作土以下には、中世以降と考えられる水田層が水平堆積している。標高 18.35 m付近で、弥生時代後期の遺物を包含する厚さ 20cm ほどの暗赤灰色の細砂土を確認した。この遺物包含層の下位は明黄褐色粘土層であり、丘陵基盤層と考えられる。基盤層上面で幅 35cm、深さ 15cm ほどの溝や柱穴を検出した。これらの遺構の時期は弥生時代後期と判断される。



第 18 図 遺跡推定範囲図(1/3,000)

T 22 (第17 図)

T 22 は、調査区の最も東側に位置する。北西側 30 m付近にはT 21 が、南西側約 20 m付近にはT 20 が位置する。 2×4 mのトレンチである。現地表の標高は 19.08 mである。鉄分・マンガンを含む灰褐色砂質土第 5 層の下層には、弥生時代中期~後期の遺物を包含する灰黄褐色~黒褐色砂質土を含む第6~8 層を確認したものの、明瞭な遺構を確認できなかった。これより下層は遺物を含まない粗砂層であるが、標高 18 m付近で黒褐色砂質土第 11 層が認められる。

第6節 確認調査のまとめ

今回調査した地点は、鴨方町六条院中地区のうち泉山から派生している尾根の舌端部と狭長な谷部で、鴨方駅南土地区画整理事業の計画されている 6 ha のうち、22 ケ所、合計 158 ㎡のトレンチを設定して確認調査を行った。

調査地周辺には周知の遺跡として定月遺跡、西の岡遺跡、森山遺跡が存在しており、調査の結果、これらの遺跡の範囲をほぼ把握することができた。定月遺跡では丘陵全体の斜面堆積の角度に対して、基盤層の傾斜が緩やかであることから、中世以降に地形の改変を受けている可能性が高い。旧地形の残存が認められることから、丘陵上に中世以降の集落があった可能性はあるものの、遺構が残存する可能性は著しく低いと判断される。西の岡遺跡では旧地形が残されて可能性はあるものの、遺構は認められず、出土遺物は少ない。今回の調査地点周辺部に集落が広がる可能性は低いと考えられる。集落の本体は、この地点よりやや高い南方に位置すると考えられる。森山遺跡では、T17周辺で弥生時代中期から後期の土器を多く含んでおり、集落が存在する可能性が高いと推測できる。

調査の結果、森山遺跡のT 17 付近からT 13 付近までの範囲とT 17 付近からT 11 の東方付近までの範囲で調査が必要であると判断された。

調		T	遺構・包含層			遺物	調査面積	/# - */
地区名	トレンチ	種類	現地表標高(m)	基盤層標高(m)	量	時代	(m)	備考
定月	Т1		15.20	15.00	×		6	-
	T 2		14.80	14.40	Δ	中近世	7	
	Т 3		12.80	12.50	0	中世	6	
	T 4		15.50	15.20	Δ	中近世	6	
	T 5		18.00	17.80		中近世	8	
	Т 6		15.10	14.71	Δ	中世	4	*
	Т7		13.76	13.24	0	中世	10	
西ノ岡	T 8	溝	18.50	17.50	Δ	弥生	8	
	Т 9		19.20	18.60	Δ	弥生	3	
	T 1 0		15.78	15.50	0	中世	10	
	T 1 1		13.84	12.93	Δ		4	
	T 1 2	土壙	14.48		Δ	弥生	8	
位田	T 1 3	土壙・溝	15.21		Δ	弥生	8	
	T 1 4		16.50		0	弥生	8	
	T 1 5		17.00		Δ	弥生	8	
	T 1 6		17.70	16.80	0	弥生	8	
	T 1 7	溝	17.72		0	弥生	6	
	T18		18.90		Δ	弥生	8	
森山	T19		19.85		Δ	弥生	8	
	T 2 0		18.60		0	弥生	8	
	T 2 1	土壙・溝・柱穴	19.00	18.20	0	弥生	8	
	T 2 2		19.08		0	弥生	8	

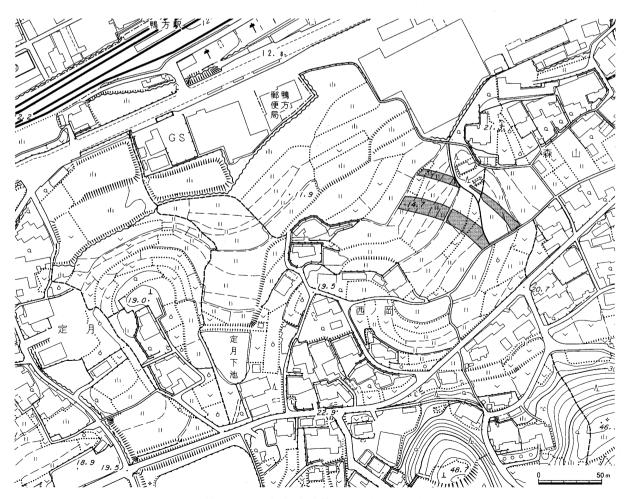
表2 トレンチー覧表

第4章 発掘調査の概要

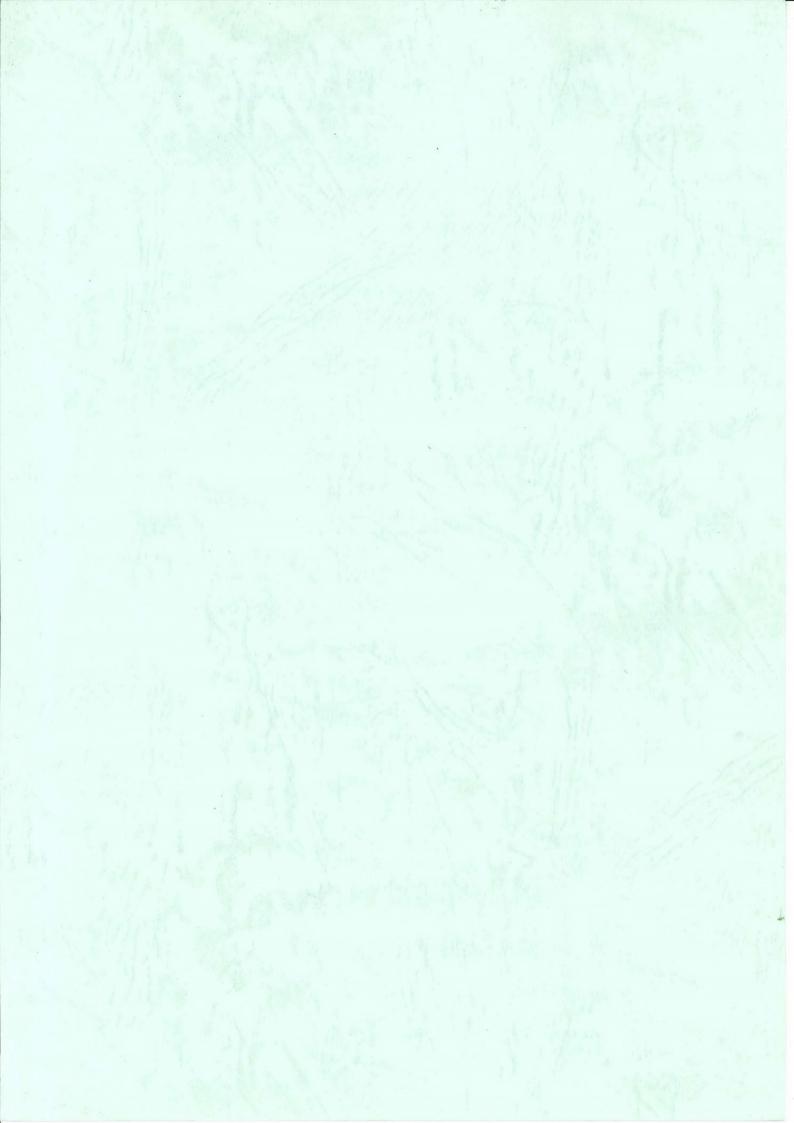
第1節 調査の概要と調査区

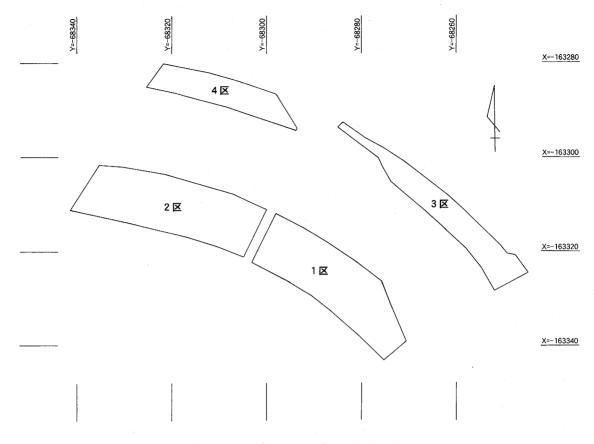
調査は、現代水田の耕作土及び、造成土については重機によって除去し、以下は手掘りにより行った。調査範囲内には、南北に横切る道路と現代水田の畦畔の関係から4区に分けた。12m規格道路部分について南から1・2区、6m規格道路部分については南から3・4区と設定した。調査は1区から行い、2区、4区、最後に3区を行った。概観すると小字名で森山といわれる低丘陵から西側の谷筋の低位部にかけて調査区を設定したことになる。調査前はほぼ全域が水田及び畑として利用されていた。

遺跡は、海抜 14 m~ 18 mで北側に延びる丘陵の縁辺部に営まれている。遺構は、弥生時代と中・近世のものが確認される。 1・2 区では弥生時代の竪穴住居 4 軒、3 区では弥生時代の土器溜りや溝から多くの弥生時代中期から後期の土器などが出土した。中・近世では溝や土壙以外に目立った遺構は形成されていない。



第 19 図 森山遺跡位置図 (1/3,000)





第 20 図 グリッド設定図 (1/800)

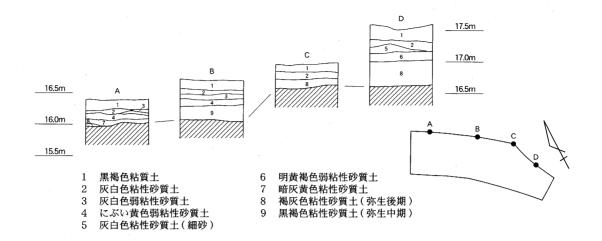
第2節 1区の概要

1 概要

1 区は 12 m規格道路の南側、海抜高は 17.00 mから 15.75 mに位置している。調査区はこの遺跡の西側縁辺部分にあたると考えられる。平成 17 年度にT 15 が実施された箇所に該当する。

調査以前は水田が広がっていた。基本層序は、現代水田層である黒褐色粘質土(1層)、床土である灰白色粘性砂質土(2層)が広がっている。暗灰黄色粘性砂質土(7層)は中世の基盤層となる。褐灰色粘性砂質土(8層)は弥生時代後期の土器を多く含有する包含層である。また、調査区南半側では確認できないが、北半部では黒褐色粘性砂質土は弥生時代中期の土器を含有する包含層である。それより下層は遺物を含有しない、にぶい黄褐色粗砂が続く。元々、この西側に向かって地形が低く、傾斜したために中世以降に整地されたものと推測される。主な遺構は弥生時代、中世〜近世のものである。弥生時代では、調査区南東側の海抜高16.50 mから17.00 mの微高地部分において竪穴住居2軒、柱穴列1列、土壙8基、溝2条、調査区中央部で土壙2基、北西部分で溝1条を検出した。中・近世では、柱穴列1列、土壙3基、溝7条を検出した。近世の溝が南北方向に流走する現在の水田畦畔と平行することから少なくともこの時期には水田化されていたとみられる。

、第4章 発掘調査の概要



第21図 1区堆積状況柱状模式図(1/60)

2 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

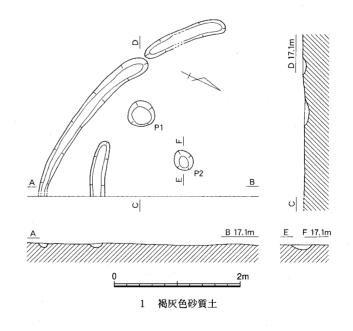
竪穴住居 1 (第 $22 \cdot 24$ 図、図版 $1-2 \cdot 3$ 、 2-1)

調査区南側の海抜高17mの微高地上に位置する住居で、一部が検出された。竪穴住居2に隣接する。 この竪穴住居は上部を削平されているために床面の検出はできず、壁体溝のみの検出である。竪穴住 居内の堆積土は単層で褐灰色砂質土が堆積している。竪穴住居の壁体溝は幅24cm、検出面からの深 さは9~10cmを測り、東側では2条の弧を描いている。住居の平面形態は、円形を呈する住居で ある。外側の壁体溝から28、内側の壁体溝から29がそれぞれ出土している。柱穴を2基検出したが

検出面からの深さが5cmと浅いこと から竪穴住居には伴わないものと考え ている。規模は、直径が推定で約6m を測る。

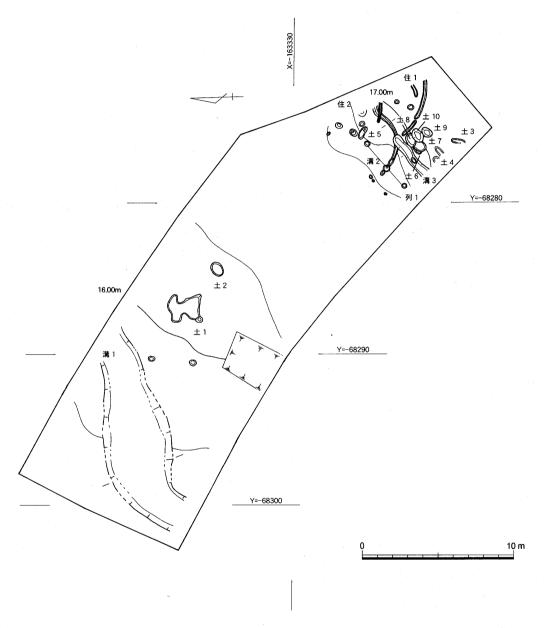
出土遺物には 28 ~ 30 などがある。 壺 28 は口径 22.2cm であり、口縁端 部は面をもちながら上方に引き上げら れている。外面には2本の凹線文を施 す。また、内外面に赤色顔料が塗布さ れていた痕跡がある。壺 29 は大型に 分類できるもので、外面にはハケメを 施す。30 は壺の口縁部である。

これらの遺物から、竪穴住居1は弥 生時代後期前葉に位置付けられる。



第 22 図 竪穴住居 1 (1/60)





第24図 1区弥生時代遺構全体図(1/250)

竪穴住居 2 (第 $24 \cdot 25$ 図、図版 $1-2 \cdot 3$)

調査区南側の海抜高 17 mの微高地上に位置する住居であり、竪穴住居 1 と同様に一部が検出された。弥生時代後期の竪穴住居 1 に住居の一部を切られている。また、この竪穴住居は上部を削平されているために床面の検出はできず、壁体溝と柱穴 3 基が検出された。住居の平面形態は、円形を呈す

る住居であるが、正確な規模は不明であ る。

壁体溝は幅 $10\sim15$ cm、検出面からの深さは 5 cm を測る。

柱穴は平面形態が楕円形を呈し、直径 $40\sim57\,\mathrm{cm}$ 、深さ $13\sim33\,\mathrm{cm}$ を測る。柱痕が確認されていないために正確ではないが、柱穴の心々間は、 $P1\,\mathrm{Le}\,P2\,\mathrm{cm}$ $106\,\mathrm{cm}$ 、 $P2\,\mathrm{Le}\,P3\,\mathrm{cm}$ $160\,\mathrm{cm}$ を測る。柱穴の深さは削平の影響で異なるが、海抜高 $16.50\,\mathrm{m}$ での深さで掘削を行っている。

遺物は、壁体溝から31、P3から32・33が出土している。甕31は口径26cmを測り、口縁部が強く屈曲し、肥厚する端部をもつ。32・33は甕の底部である。32は底径8.4cmを測る。内面はユビオサエが施される。33は底径6.6cmを測る。外面はタテ方向のヘラミガキが施されている。また、外面には黒斑がみられる。P3出土の石は使用痕跡・加工痕跡がみられなかった。

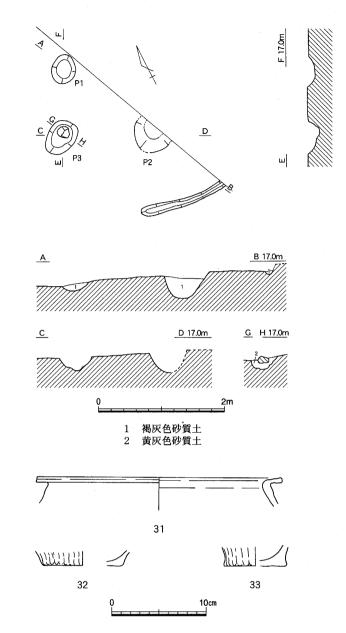
これらの出土遺物から、竪穴住居2の 時期は弥生時代中期後葉に位置付けられ る。

(2) 柱穴列

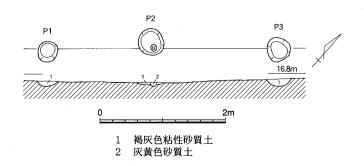
柱穴列1 (第24・26図)

調査区南側の微高地北端に位置する。平面形態が円形もしくは楕円形を呈する。直径 30 ~ 40cm、検出面からの深さは、6~10cmを測る。掘り形規模に差異はみられない。P2で検出した柱痕跡から柱径は約10cmである。

遺物は弥生土器の細片が出土して いるが図示はできない。埋土が弥生



第 25 図 竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第 26 図 柱穴列 1 (1/60)

時代後期の遺構と共通であることから、同じ時期のものと考えられる。

(3) 土壙

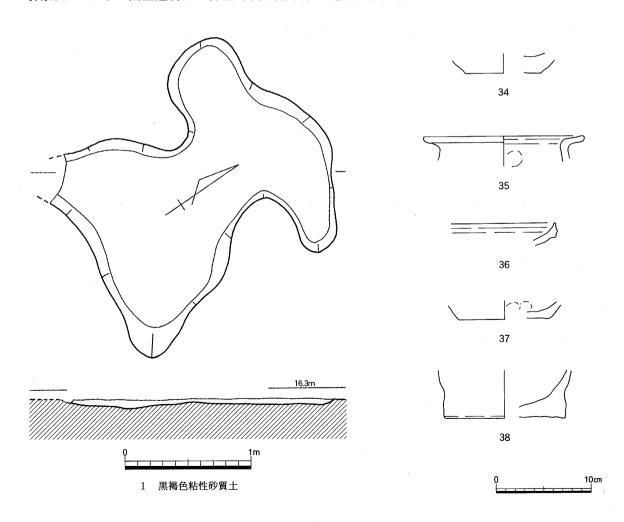
土壙1 (第24・27図)

調査区の中央部に位置する。調査区南側微高地から北西 15 mの距離にあたる。溝 1 から 3.5 m南東に位置する。規模は長軸 260cm、短軸 210cm のややいびつな不整形を呈する。たわみに近いが、今回は土壙として扱う。

検出面からの深さは8cm を測る。西側の一部を弥生時代後期の柱穴によって削平を受けている。 土壙内には埋土は黒褐色粘性砂質土が堆積しており、弥生土器の小片が多く出土している。

出土遺物は、弥生土器が5点とサヌカイトの細片が出土している。34 は壺の底部で8 cm を測る。35 は甕の口縁部で口径26cm を測る。内面にはユビオサエが施される。口縁部内側には黒斑が観察できる。36 は甕の口縁部で端部をわずかに上方に摘み上げられる。凹線文が3条施されている。37 は甕の底部で、底径9.6cm を測る。38 はジョッキ形土器である。底径は12.8cm を測る。外面には黒斑がみられる。

時期は、これらの出土遺物から弥生時代中期中葉の範疇に位置付けられる。

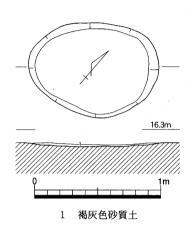


第 27 図 土壙 1 (1/30) 出土遺物 (1/4)

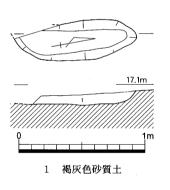
土壙2 (第24・28図)

調査区の中央部に位置する。調査区南側微高地から 15 mの北西の距離にあたる。土壙 1 の 2 m南東に位置する。規模は長軸 100cm、短軸 75cm を測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 3 cm を測る。土壙の埋土は褐灰色砂質土が堆積している。

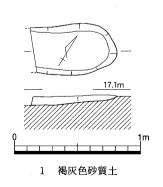
遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。周囲の土壙の埋土が弥生時代後期の遺構と共通であることから、同じ時期のもの考えられる。



第28図 土壙2 (1/30)



第29図 土壙3 (1/30)



第 30 図 土壙 4 (1/30)

土壙3 (第24・29図)

調査区南側の微高地上に位置する。土壙4の1.2 m南東に位置する。西半は調査区外へと続く。規模は、長軸96 cm、短軸31cmを測る。平面形は細長い楕円形を呈する。検出面からの深さは8 cmを測る。

土壙の埋土は褐灰色砂質土が堆積している。遺物は出土していない。

周囲の土壙の埋土が弥生時代後期の遺構と共通であることから、同じ時期範疇と考えられる。

土壙4 (第24・30図)

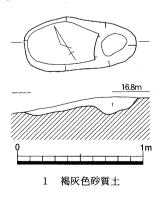
調査区南側の微高地上に位置する。土壙9の0.8 m南西に位置する。西半は調査区外へと続く。規模は長軸68cm、短軸40cmを測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは7cmを測る。土壙の埋土は褐灰色砂質土が堆積している。

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。

時期は、出土遺物や周囲の土壙の埋土から弥生時代後期の範疇 と考えられる。

土壙 5 (第 24・31 図)

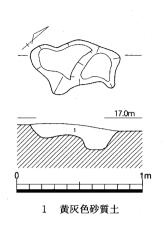
調査区南側の微高地上北側の斜面上に位置する。柱穴列1のP3の0.2 m北東に位置する。規模は長軸89cmと短軸39cmを



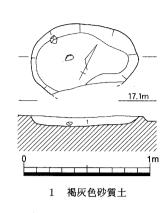
第31図 土壙5 (1/30)

測る。平面形は楕円形を呈する。 検出面からの深さは12cmを 測る。断面から土壙の東半が一 段深くなる。土壙の埋土は褐灰 色砂質土が堆積している。

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。周囲の土壙の埋土が弥生時代後期の遺構と共通であることから、弥生時代後期の範疇と考えられる。



1 黄灰色砂質土



第 32 図 土壙 6 (1/30)

第 33 図 土壙 7 (1/30)

第34図 土壙8 (1/30)

土壙6 (第24・32図)

調査区南側の微高地上、土壙4の2m北側に位置する。土壙7、 土壙8に切られている。規模は長軸70cm、短軸36cmを測る。 平面形は歪な不整円形を呈する。検出面からの深さは東半の一段深 くなるところで19cm、西半で10cmを測る。土壙の埋土は黄灰 色砂質土の単層が堆積している。

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。 時期は出土遺物から弥生時代後期の範疇と考えられる。

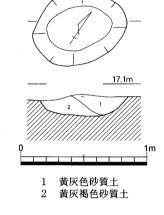
土壙7 (第24・33図)

調査区南側の微高地上に位置する。土壙8と土壙10に切られている。規模は長軸93cm、短軸75cmを測る。平面形は楕円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは10cmを測る。埋土は黄灰色砂質土が堆積している。

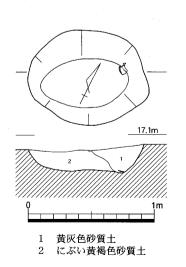
遺物は弥生土器の細片とサヌカイト片が出土している。時期は出土遺物から弥生時代後期の範疇と考えられる。

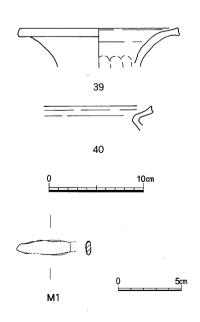
土壙8 (第24・34図)

調査区南側の微高地上に位置する。土壙10に切られており、土壙7を切っている。規模は長軸86cm、短軸50cmを測る。平面形は楕円形を呈する。検出面から7cmを測る。土壙の埋土は褐灰色砂質土が堆積している。



第 35 図 土壙 9 (1/30)





第 36 図 土壙 10 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

第4章 発掘調査の概要

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。時期は出土遺物から弥生時代後期の範疇と考えられる。

土壙9 (第24・35図)

調査区南側の微高地上に位置する。規模は長軸 70cm、短軸 61cm を測る。平面形は円形を呈する。 検出面からの深さは 17cm を測る。

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片とサヌカイト片が出土している。時期は出土遺物 から弥生時代後期の範疇と考えられる。

土壙 10 (第 24・36 図、図版 2 - 2)

調査区南側の微高地上に位置する。規模は長軸 95cm、短軸 75cm を測る。平面形は円形を呈する。 検出面からの深さは 21cm を測る。

出土遺物は弥生土器 **39・40** と鉄器が 1 点出土している。 壺 **39** は口径 16.8cm を測る。 **40** は甕の口縁部である。 鉄製の刀子**M** 1 がある。

時期は、出土遺物から弥生時代後期の範疇と考えられる。

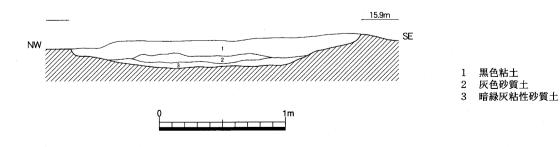
(4) 溝

溝1 (第24·37 図、巻頭図版2-2、図版2-1、3-1、9-1)

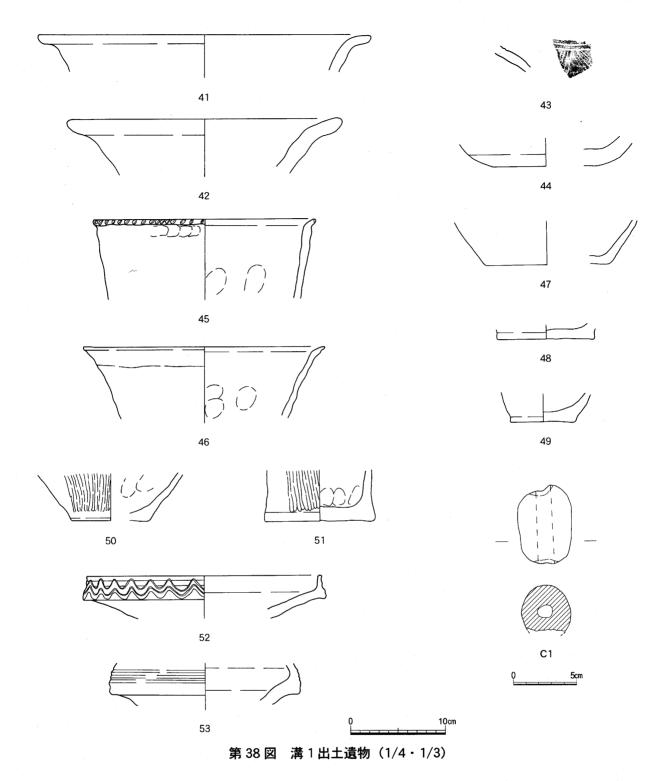
調査区の北西側に位置する。わずかに湾曲しながらも調査区の東西方向に掘削されており、約13 mにわたって検出された。西端は南の方へ振っており、調査区外へ延びる。検出面での幅は溝の中央部にて最大幅約4mを測るが、約3m前後である。底面は平らで、断面形は逆台形を呈する。底面の海抜高は、東側で15.58m、西側で15.37mとなり東側が高くなっている。埋土中からは弥生時代の遺物が出土している。この内の一部は、混入した古い時期の遺物もある。

41~44 は壺である。43 は壺の体部の破片で、全てにヘラ描き沈線による木葉文が加飾されている。45・46 は甕である。45 は口唇部に刺突文がみられ、ヘラ状工具で施文されたものとみられる。46 は口径 25.6cm を測る。47~49 は甕の底部である。51 はジョッキ形土器の底部であり、外面はタテ方向のヘラミガキが施されている。52 は口径 24.8cm を測る。口縁部外面に3条の凹線文を施した後に波状文に装飾されている。53 は口縁部が上方にのび、二重口縁になるとみられる。C1は土錘である。外面にて焼成時の破裂痕跡と黒斑が観察できる。重量は、107 gである。

この溝は、弥生時代後期の段階で埋没したと考えられる。

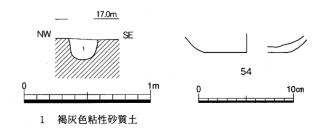


第37図 溝1 (1/30)



溝2 (第24・39図)

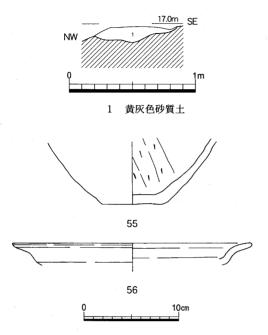
調査区南側の微高地部分に位置する。竪穴住居 2、柱穴列1のP2に切られている。東側は調査 区外に延びる。溝は調査区の中央において北西方 向に屈曲し、微高地上から低位部へと掘削されて いる。現存長は約5mで、上端幅22cm、底面幅 12cm、検出面からの深さは16cmを測る。断面



第39図 溝2(1/30)・出土遺物(1/4)

形は「U」字形である。

遺物は弥生土器の細片が出土している。図示できるのは 54 の甕の底部である。 時期は弥生時代中期後葉の範疇に位置付けられる。



第 40 図 溝 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝3 (第24・40図)

調査区南側の微高地部分に位置する。溝2を 切っている。西側は調査区の外へ延びる。西側 は後世の削平を受けている。

現存長は 3.06 mであり、上端幅で 64cm、 底面幅 31cm、検出面からの深さは 14cm を 測る。

遺物は弥生土器 2 点が出土している。32 は 甕の底部であり、底径 6.6cm を測る。内面は ヘラケズリが施されている。外面には黒斑がみ られる。33 は高杯の杯部であり、口縁端部が 外方に屈曲する。口径は 25.4cm を測る。

時期は、弥生時代後期中葉に位置付けられる。

3 中世・近世の遺構と遺物

(1) 土壙

土壙 11 (第 41・44 図、図版 3 - 2)

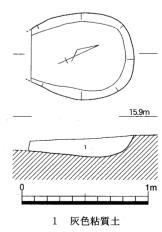
調査区の西側、溝5・6の南西4mに位置する。南側は調査区外へと続く。規模は、長軸75cm、短軸70cmを測る。平面形は円形を呈する。検出面からの深さは15cmを測る。埋土は灰色粘質土が堆積している。

遺物は図示できるものはないが、時期は中世の範疇と考えられる。

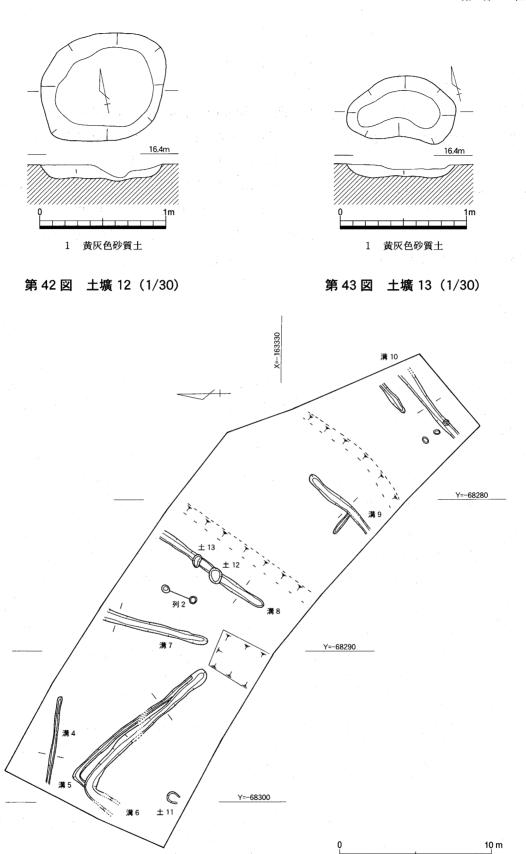
土壙 12 (第 42・44 図、図版 3 - 2)

調査区の中央に位置する。溝8を切って掘削をしている。規模は、長軸 100cm、短軸 85cm を測る。平面形は円形を呈する。 検出面からの深さは、11cm を測る。時期は近世と考えられる。 土壙 13 (第 43・44 図、図版 3 - 2)

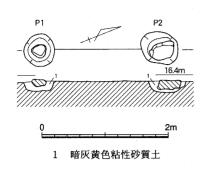
調査区の中央に位置する。溝8を切って掘削をしている。規模は、長軸86cm、短軸48cmを測る。平面形は楕円形を呈する。 検出面からの深さは、10cmを測る。時期は近世と考えられる。



第 41 図 土壙 11 (1/30)



第 44 図 1区中·近世遺構全体図 (1/250)



第 45 図 柱穴列 2 (1/60)

(2) 柱穴列

柱穴列2 (第44・45 図、図版3-2)

調査区の中央、土壙 12 の西 1.5 mに位置する。直径は、 $52 \sim 63$ cm、検出面からの深さは $15 \sim 18$ cm を測る。共に石材が据え置かれた状態で検出された。柱穴の心々間は 190cm を測る。柱穴は 2 基分しか検出できなかったが、柱穴列として扱う。時期は周囲の土壙の埋土と共通していることから近世の範疇と考えられる。

(3) 溝

溝4 (第44·46 図、図版3-2)

調査区の北西隅を東西に流走する溝である。現存長は $5.8\,\mathrm{m}$ を測る。上端幅 $30\,\mathrm{cm}$ 、底面幅 $15\,\mathrm{cm}$ で、断面形は「U」字形である。 検出面からの深さは $4\,\mathrm{cm}$ である。 時期は、中世の範疇とみられる。 **造 5** (第 $44\cdot46\,$ 図、図版 3-2)

調査区の西側を南東方向から北西方向に流走する溝である。南側を併走する溝 6 に切られている。溝は調査区の西側で屈曲し、南西方向に流れを変える。上端幅 37cm、底面幅 23cm で、深さは 8 cm を測る。遺物は土師器椀 57 が出土しているが混入とみられる。時期は近世の範疇と考えられる。溝 6 (第 $44\cdot 46$ 図、図版 3-2)

調査区の西側を溝5と併走する溝である。溝5と同様に調査区の西側で屈曲し、流れを変えている。 上端幅76cm、底面幅30cm、深さは13cmを測る。時期は出土遺物から近世の範疇とみられる。

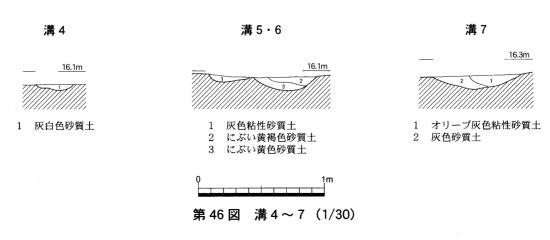
溝7 (第44・46図)

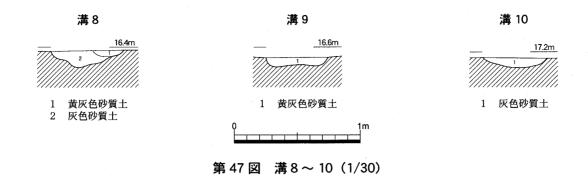
調査区中央を南北に流走する溝である。北側は調査区の外へ延びる。現存長は約7mで、上端幅50cm、底面幅30cm、検出面からの深さは9cmを測る。遺物は染付碗58が出土している。

時期は出土遺物から近世に位置付けられる。

溝8 (第44・47図)

調査区の中央を南北に流走する溝である。北側は調査区の外へ延びる。現存長は 8.3 mで、上端幅





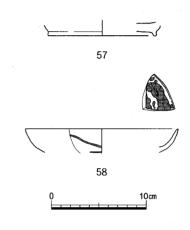
48cm、検出面からの深さは6cmを測る。時期は近世の範疇と位置付けられる。

溝9 (第44・47図)

調査区の南北に流走する溝である。南側は調査区の外へ延びる。現存長は 5.3 mで、上端幅 50cm、深さは 5 cm を測る。時期は近世と位置付けられる。

溝 10 (第 44・47 図)

調査区南側を南北に流走する溝である。両端は調査区の外へ延びる。現存長は5.3 mで、上端幅50cm、深さは9 cm を測る。時期は近世と位置付けられる。



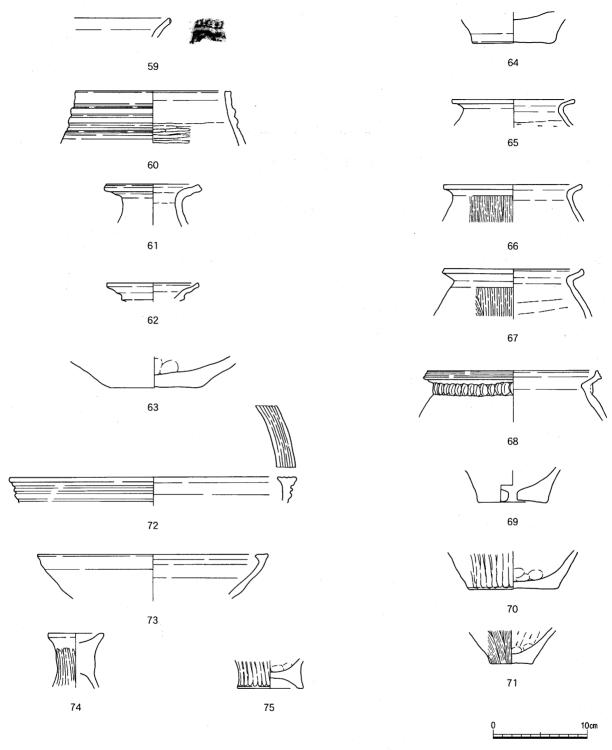
第48図 溝5・8出土遺物 (1/4)

4 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物 (第 49 ~ 53 図、図版 9 - 2、10 - 2)

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器を取り上げる。このようにして出土した土器の大半は弥生時代中期から弥生時代後期に属する遺物であり、本遺跡の消長を反映している。ここでは当該期の遺物の中から、残存状況のよいもの、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げている。

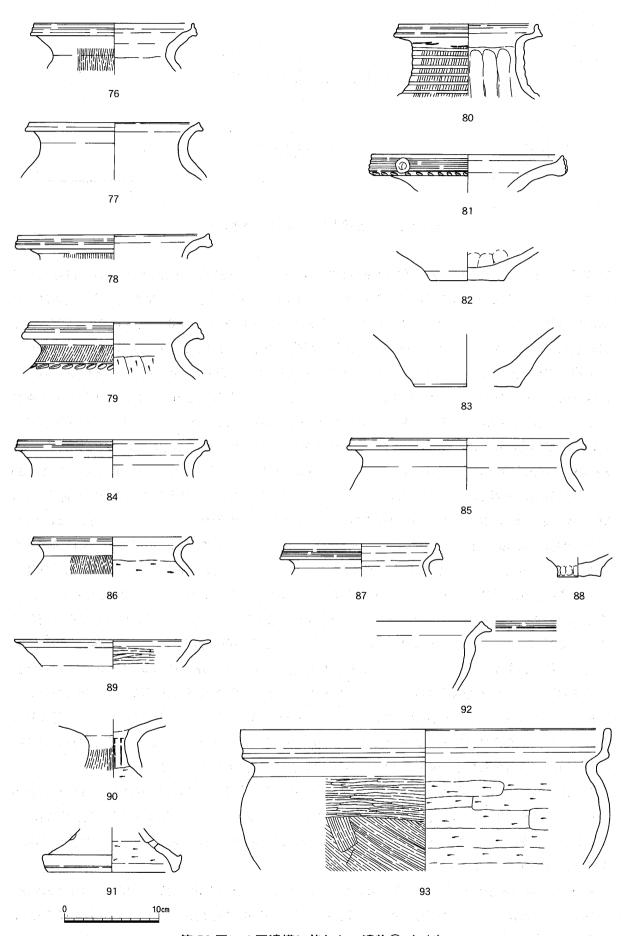
59 は甕の口縁部であり、破片ではあるが口縁端部には刻み目が施されている。弥生時代前期に位置付けられる。無頸壺 60 は内傾して立つ口縁部の外面を 2条の突帯がみられる。口径は 16.4cm を測る。内面はヨコ方向のミガキが施されている。長頸壺 61・62 は、口縁端部が外傾する面を形成している。口径は共に 9.6cm を測る。63・64 は壺の底部である。63 は外面に黒斑が観察できる。64~71 は甕である。65~67 は口縁部が「く」の字状に屈曲し、肩の張りが弱い。69 は口径 13cm を測り、内面にヨコ方向のヘラケズリ、66・67 は外面にタテ方向のハケメを施している。68 は口縁端部に 2条の凹線文、頸部には指頭圧痕文を施している。口径は 18cm を測り、外面に黒斑がみられる。73 は底部に穿孔がある。70 は底径 9.6cm を測り、外面はヘラミガキを行う。71 は外面をハケメ、内面をヘラケズリやオサエ、外面には薄い黒斑が観察できる。72・73 は高杯である。72 は口縁端部が肥厚をし、3条の凹線文を施している。口径は 30.2cm を測る。73 は口縁端部が内側に肥厚し、水平面を形成する。内面はヨコナデを行う。74 は、支脚形土器と考える。外面はヘラミガキを施している。内面はシボリメがみられる。残存高で 4.7cm を測り、上面は中央部が窪む。75 は台付鉢の



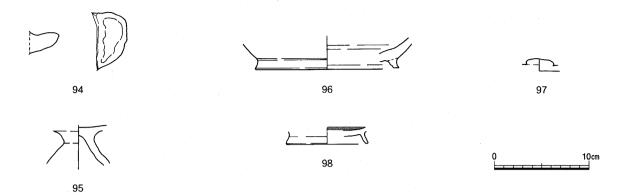
第 49 図 1 区遺構に伴わない遺物① (1/4)

脚部とみられる。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はオサエを施す。底径は9cmを測る。底部全面から外面にかけて黒斑がみられる。

76~82 は壺である。76 は「ハ」の字状に開く頸部を持つもので外反し、上方へ張り出す口縁部を形成する。口縁端部は2条の凹線文、外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコナデを施す。77 は口縁端面にはヨコナデによる凹部が認められる。口径は18cmを測る。78 は屈曲する口縁部をヨコナデにより、肥厚させ2条の凹線文を施す。外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコナデを施す。口径



第50図 1区遺構に伴わない遺物② (1/4)

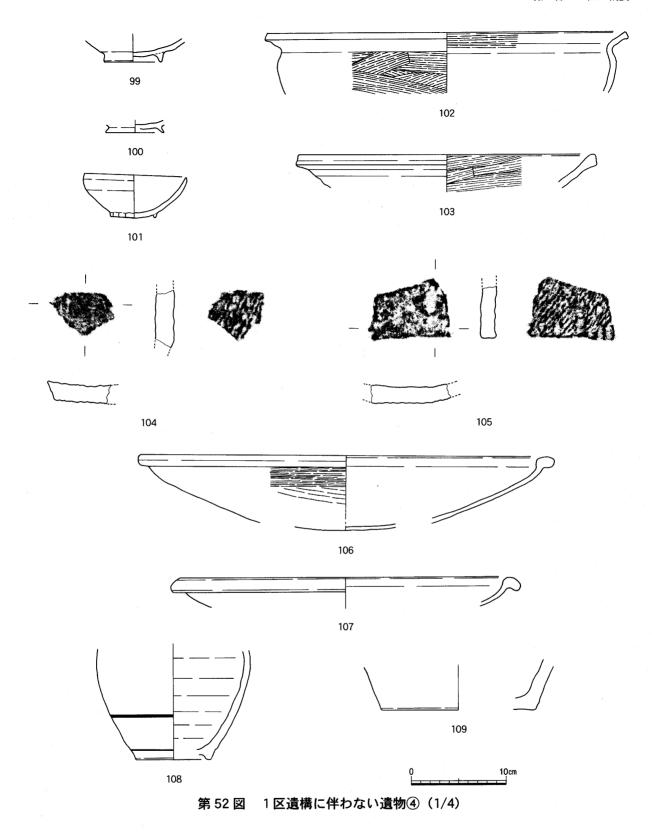


第51図 1区遺構に伴わない遺物③(1/4)

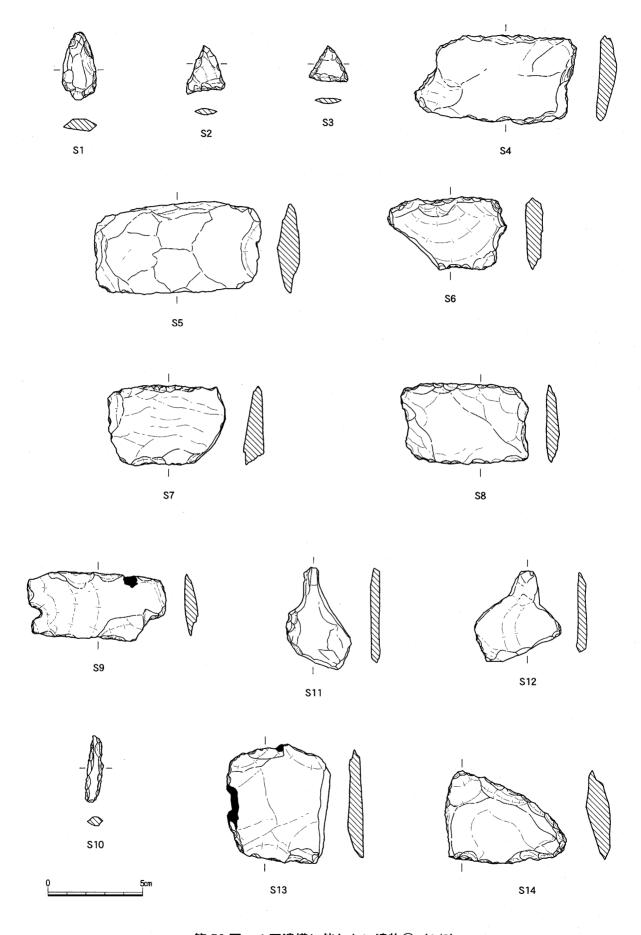
は 20.2cm を測る。**79** は口縁端部を内傾させ拡張させるが、下方の張り出しが大きい。口縁端部は ヨコナデののち3条の凹線文を施す。外面はタテ方向のハケメ、下方に刺突文を巡らす。内面は口縁 部から頸部にかけてはヨコナデ、以下はタテ方向のヘラケズリを施す。80 は上東式の長頸壺である。 口縁端部を上方へ拡張し、ヨコナデの後に2条の凹線文を施す。頸部にはタテ方向のハケメの後6条 の沈線を描く。内面は、ユビオサエとナデで調整されている。口径は 14.6cm を測る。81 は広口壺で、 口縁端部を肥厚気味にし、4条の凹線文、下端部に工具による刻み目を施す。また、円形浮文で加飾 をする。口径は 20.2cm を測る。82 ~ 83 は壺の底部である。82 は内面にユビオサエを施す。外面 には黒斑がみられる。83 は内外面共に剥離が顕著である。底径 11cm を測る。84 ~ 88 は甕である。 84 は口縁端部を僅かに上方へ摘み上げ、2条の凹線文を施す。内面はヨコナデで調整している。85 は口径 24.4cm を測る。ここでは大型に分類される。口縁部は強いヨコナデによる条線が施される。 86 は外面をタテ方向のハケメ、内面をヨコナデとヘラケズリで調整されている。口径は 16.6cm を 測る。87 は口縁端部を上方へ拡張し、3条の凹線文を施す。口径は16cm を測る。胎土に角閃石を 多く含有し、内外面ともに赤色顔料が塗布されている。89~91は高杯である。89は口縁部を外方 へ拡張する。内面はヨコ方向のヘラミガキで調整をする。口径は 20.8cm を測る。 90 は脚柱部である。 外面はタテ方向のハケメを施している。91 は裾端部を肥厚し、強いヨコナデで調整をする。円形の 透しは裏面に抜ける。内面はヨコ方向のヘラケズリを施している。脚径は13.4cm を測る。89と91 は胎土に角閃石を多く含有し、内外面に赤色顔料を塗布している。92・93 は鉢である。92 は口縁部 端部を肥厚し、凹線の施文が認められる。93 は口径 41cm を測る大型の鉢である。口縁部を上方に 拡張し、二重口縁をなす。口縁端部はヨコナデにより稜が形成されている。外面は胴部下半部は斜方 向のハケメ、上半部はヨコ方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。外面は全体に黒斑がみられ る。本遺跡では古墳時代前期に位置づけられる土器はこれ1点のみであった。

ここからは古墳時代後期から中・近世にかけての遺物を紹介する。94 は甑の把手、95 は須恵器の高杯である。96 は杯の底部で、高台が貼り付けられている。底径は15.2cmを測る。97 は須恵器の蓋で、扁平なツマミを持つ。7 世紀の中頃に位置づけられる。98 は内面黒色の土師器椀である。底径は8.6cmを測る。10 世紀後半に位置づけられる。

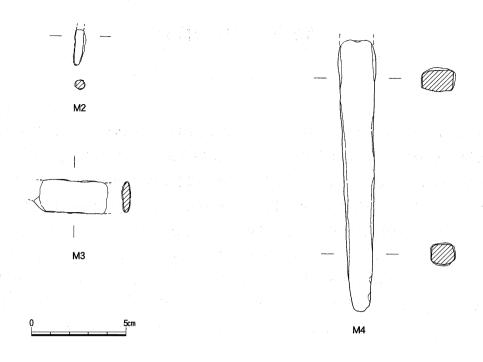
99~101 は土師器の椀である。99 は底径 6 cm、100 は底径 6.2cm を測る。101 は口径 10.8cm、器高 4.3cm、底径 4.6cm を測る。99·100 は古相、101 は新相の特徴を示している。102 は鍋である。外面はヨコ方向のハケメで調整をしている。口径は 37.6cm を測る。また、外面には黒斑がみられる。



103 は口径 31.4cm を測る土師質の捏鉢である。内面はヨコ方向のハケメを施している。104・105 は平瓦である。凹面には布目痕跡、凸面には縄目タタキがみられる。106・107 は近世の焙烙である。106 は口縁端部が肥厚し、外反する。口径は 42.2cm を測る。外面はヨコ方向のミガキで調整されている。また外面は煤の付着が顕著である。107 は口縁端部が下方へ肥厚する。時期は $18 \sim 19$ 世紀の範疇に位置付けられる。本遺跡から西側 4 km には浅口郡里庄町里見大原が所在し、ここで生産さ



第53図 1区遺構に伴わない遺物⑤ (1/2)



第54図 1区遺構に伴わない遺物⑥ (1/3)

れた大原焼が搬入されたものと考えられる。108・109は陶器の鉢である。

石器は、調査区南側で多く出土する傾向にある。材質はいずれもサヌカイトである。S1~S3は石鏃である。S1は凸基式で未製品とみられる。S2・S3は平基式である。S4~S9は石包丁である。抉りが施されているものもある。小形化しており弥生時代後期の範疇に位置付けられるのではないかと考えている。S10は石錐であり、全長3.6cmを測る。S11・12は石匙であり、未製品である。S13・S14はスクレイパーである。S13は自然面がみられる。これ以外にも1区では多くのサヌカイト片が出土している。

M 2 ~ M 4 は鉄製品である。M 2 は釘である。M 3 は鎌の一部とみられる。M 4 は馬鍬の歯であり、上部は欠損している。残存長は 21.4cm を測る。

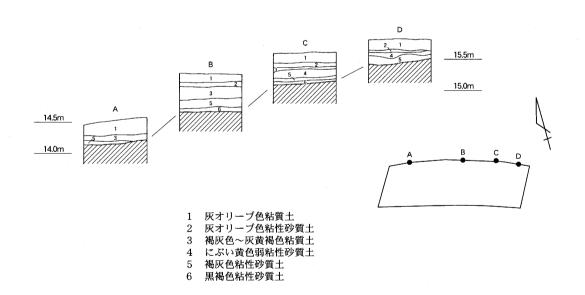
第3節 2区の概要

1 概要

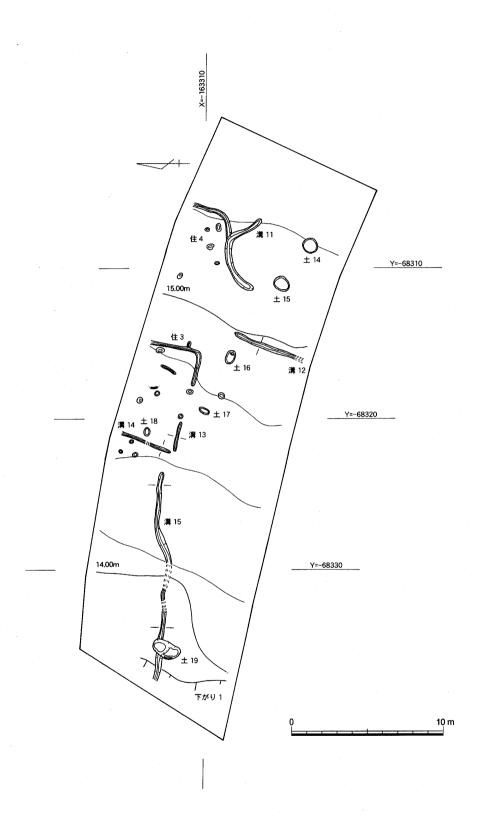
2区は 12 m規格道路の北側、海抜高は 15.25 mから 14.00 mに位置している。調査区は 1 区と同様にこの遺跡の西側縁辺部にあたると考えられる。平成 17 年度に T $12 \cdot 13$ が実施された箇所である。

調査以前は水田として利用されていた。基本層序は、現代水田層である灰オリーブ色粘質土(1層)、床土である灰オリーブ粘性砂質土(2層)、近世水田層の床土である褐灰色・灰黄褐色粘質土(4層)、近世水田層であるにぶい黄色弱粘性砂質土(3層)、褐灰色粘性砂質土(5層)は弥生時代後期の土器を多く含有する包含層である。また、調査区南半側では確認できないが、北半部では黒褐色粘性砂質土(6層)は弥生時代中期の土器を含有する包含層である。それより下層は灰白色粗砂が続く。元々、この南方向と西方向へ向かって地形が低く、傾斜したと考えられる。また、調査区西側では弥生時代遺構検出面では海抜14.10m付近で下がり、中・近世遺構検出面では海抜高14.50m付近で地形の下がりを検出した。

主な遺構は弥生時代、中世〜近世のものである。弥生時代では、竪穴住居2軒、土壙6基、溝5条を検出した。竪穴住居は平面形が方形・円形のものを1軒ずつ検出した。1区の竪穴住居1・2とは比高差は約2mを測る。中・近世では、土壙7基、溝11条を検出した。土壙内には土器片の他に多くの石が廃棄されている。溝は東西方向と南北方向に流走するように掘削されている。近世には、集落域外の水田域が広がるものとみられる。



第 55 図 2 区堆積状況柱状模式図(1/60)



第 56 図 2 区弥生時代遺構全体図 (1/250)

2 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

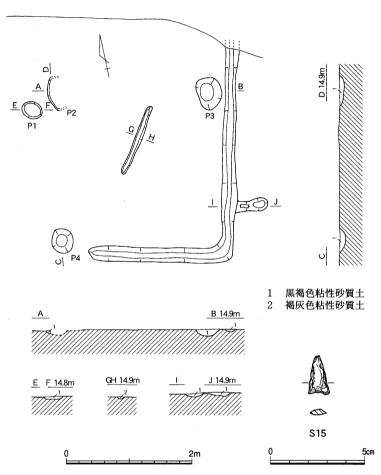
竪穴住居3 (第56・57 図、図版3-3)

調査区中央の北東方向から南西方向にかけての傾斜地で海抜高 14.75 mに位置する住居で、一部 が検出された。北半部分は調査区

外へ続くとみられる。この竪穴住居は上部を削平されているために床面の検出はできず、壁体溝、柱穴、土壙の検出となった。竪穴住居内の堆積土は単層で黒褐色粘性砂質土が堆積している。竪穴住居は傾斜面であるために南側のコーナー部分を検出したのみである。コーナー部分が概ね直角に周ることから平面形態は方形を呈するものと考えられる。

規模は、不明であるが、検出長は南北方向で3.4 m、東西方向で2.2 mを測る。壁体溝は、上端幅18~20cm、底面幅は12cm、検出面からの深さは、8 cmを測る。また、壁体溝のコーナー部分で東側に用途不明の張り出し部が付く。

遺物は、中央の細長い土壙から石鏃 S 15 が出土している。



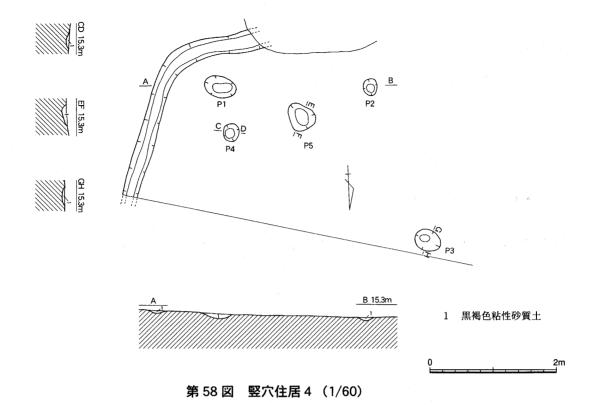
第 57 図 竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/2)

時期は、堆積土から弥生時代中期の範疇と位置付けたいと考えている。

竪穴住居4 (第56・58 図、図版4-1)

調査区東側の北東方向から南西方向にかけての傾斜地で海抜高 $15.25~\mathrm{m}$ に位置する住居で、一部が検出された。南側は溝 $11~\mathrm{c}$ によって切られている。この竪穴住居は上部を削平されているために床面の検出はできず、壁体溝、柱穴を検出したのみで、全容は不明である。検出長は $3.5~\mathrm{m}$ 、壁体溝の上端幅 $25\mathrm{cm}$ 、底面幅 $15\mathrm{cm}$ 、検出面からの深さは $6~\mathrm{cm}$ を測る。柱穴は直径 $30~\mathrm{c}$ $48\mathrm{cm}$ で、平面形が円形を呈する。

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片やサヌカイト片が壁体溝や柱穴から出土している。 時期は、出土遺物や周囲の土壙の埋土から弥生時代後期の範疇に位置付けられる。



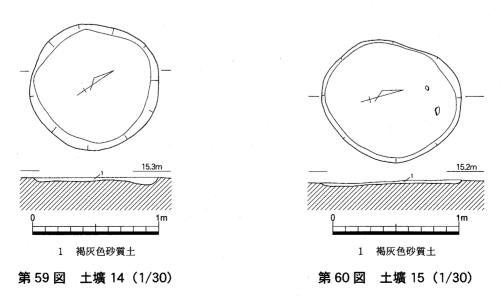
(2) 土壙

土壙 14 (第56・59図)

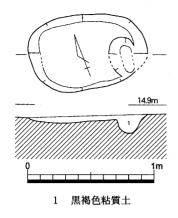
調査区東側、土壙 15 の南東 2 mに位置する。規模は、長軸 100cm、短軸 98cm、検出面からの深さは 5 cm を測る。平面形は円形を呈する。土壙の埋土は褐灰色砂質土が堆積している。遺物は弥生土器の細片が出土している。時期は、弥生時代後期の範疇に位置付けられる。

土壙 15 (第 56・60 図、図版 4 - 2)

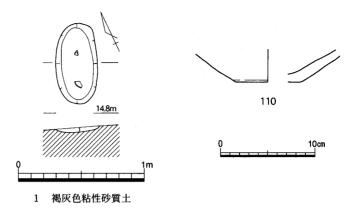
調査区東側、溝 12 の 3.6 m東に位置する。規模は、長軸 112cm、短軸 95cm、検出面からの深さは 3 cm を測る。



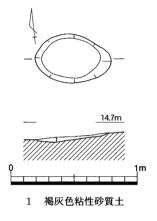
-47 -



第61図 土壙 16 (1/30)



第 62 図 土壙 17 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第 63 図 土壙 18 (1/30)

遺物は図示できるものはないが弥生土器片が出土している。 時期は出土遺物から弥生時代後期に位置付けられる。

土壙 16 (第56・61 図)

調査区のやや中央、竪穴住居3の南1.7 mに位置する。規模は 長軸95cm、短軸60cmの楕円形を呈する。時期は、弥生時代 中期の範疇と考えられる。

土壙 17 (第56・62図)

調査区の中央、土壙 16 の西側 3 mに位置する。規模は長軸 63cm、短軸 34cm、検出面からの深さは 4 cm を測る。平面形 は楕円形を呈する。遺物は弥生土器の甕 110 が出土している。 110 は底径 7 cm を測る。時期は出土遺物等から弥生時代中期の

範疇と考えられる。

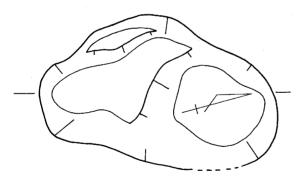
土壙 18 (第56・63 図)

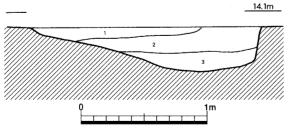
調査区中央北側、溝 14 の 0.4 m東に位置する。規模は長軸 59cm、短軸 38cm、検出面からの深さ 4 cm を測る。平面形は楕円形を呈する。

遺物は、弥生土器の細片が出土している。時 期は弥生時代後期の範疇と考えられる。

土壙 19 (第 56・64 図)

調査区の西側の低位部に位置する。溝 15を切っている。規模は長軸 190cm、短軸 115cm、検出面からの深さは 35cm を測る。平面形は不整円形を呈する。西半では検出面から 2 段落ち込む。遺物は出土していないが、周囲の土壙の埋土と共通であることから弥生時代後期の範疇と考えている。





- 1 褐灰色粘質土
- 2 褐灰色粘質土〈地山ブロック含む〉
- 3 黄灰色粘質土微砂

第 64 図 土壙 19 (1/30)

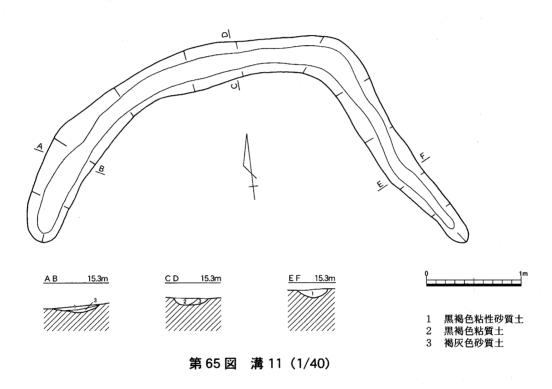
(3) 溝

溝 11 (第56・65 図)

調査区東側、竪穴住居4の南側の海抜高 15.25 mに位置する。この溝は竪穴住居4を切っている。 検出中に竪穴住居の壁体溝と考え精査したが、柱穴が検出されないことから本書では溝として扱うことにする。

溝は東端から北西方向へ湾曲しながら南方向に流走する。検出長は $6.4 \,\mathrm{m}$ 、溝の上端幅 $35 \sim 50 \,\mathrm{cm}$ 、底面幅 $16 \sim 25 \,\mathrm{cm}$ 、検出面からの深さは $8 \sim 10 \,\mathrm{cm}$ を測る。断面形は椀状を呈している。溝の東端の底面高 $15.2 \,\mathrm{m}$ 、西端の底面高は $14.9 \,\mathrm{m}$ $\geq 30 \,\mathrm{cm}$ の高低差がある。

遺物は、図示できるものはないが弥生土器の細片が出土している。時期は出土遺物や竪穴住居4との切り合いから弥生時代後期の範疇と考えられる。



溝 12 (第 56・66 図)

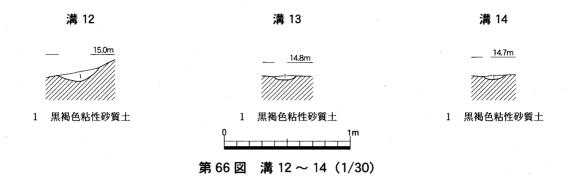
調査区東側、土壙 16 の東 1 mに位置する。調査区を北北東から南南西に流走する溝である。検出長は 4.4 m、上端幅 34cm、底面幅 15cm、検出面からの深さは 5 cm を測る。遺物は、図示できるものはないが弥生土器の細片が出土している。時期は、弥生時代後期の範疇と考えられる。

溝 13 (第 56・66 図)

調査区を東西方向に流走する溝である。現存長は約2m、上端幅17cm、検出面からの深さは4 cm を測る。遺物は出土していない。時期は堆積土の判断で弥生時代中期の範疇と考えられる。

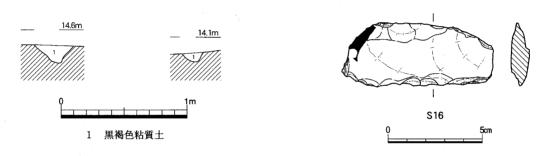
溝 14 (第 56・66 図)

調査区を南北方向に流走する溝である。検出長は 3.5 m、上端幅 16cm、底面幅 10cm、検出面からの深さは 3 cm を測る。遺物は出土していない。時期は、弥生時代中期の範疇と考えられる。



溝 15 (第 56 \cdot 67 図、図版 $4-3\cdot 5-1$)

調査区の西側に検出した溝である。東方向から西方向を向くものである。検出長約 14 mを測る。この溝は弥生時代後期の遺構である土壙 19 に切られているものである。また、途中、後世の削平で一部溝が途切れる。検出面での溝の上端部は 33cm、底面幅 10cm、検出面からの深さは 9~ 15cmを測る。断面形は逆台形を呈している。遺物は弥生土器の細片とサヌカイト製の石包丁 S 16 が出土している。時期は、黒褐色土が堆積していることから弥生時代中期の範疇と考えられる。



第 67 図 溝 15 (1/30)・出土遺物 (1/2)

(4) 下がり

下がり1 (第56図)

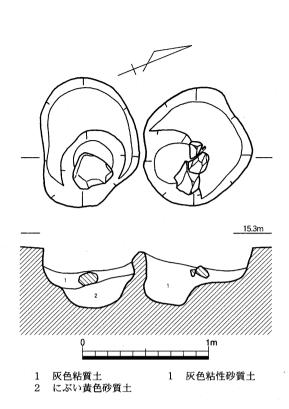
下がり1は、調査区西端部、海抜高は14mで検出した。西方側に調査区外へさらに下がっており、低湿地等が推測される。時期は弥生時代の範疇に位置付けられる。

3 中・近世の遺構と遺物

(1) 土壙

土壙 20 (第68・70・71 図)

調査区の東側、土壙 21 の南側に位置する。溝 16 を切っている。規模は長軸 103cm、短軸 75cm を測る。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは 46cm を測る。西半では検出面から 20cm



第 68 図 土壙 20・21 (1/30)

の深さで段を持つ。また、堆積途中で石が廃棄されていた。遺物は土師質の皿 111 が出土している。時期は、近世に位置付けられる。

土壙 21 (第68・70・71 図)

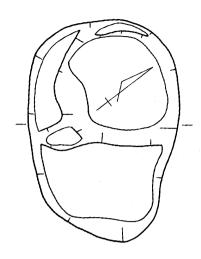
調査区の東側、土壙20の北側に位置する。溝17を切っている。規模は長軸93cm、短軸82cmを測る。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは42cmを測る。北西側では検出面から25cmの深さで段を持つ。遺物は、土師器土釜112が出土している。外面には煤が付着している。

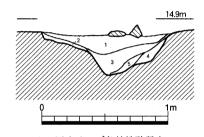
時期は、近世に位置付けられる。

土壙 22 (第69・70・71 図)

調査区中央、土壙 23 の北側 1 mに位置する。溝 18 を切っている。規模は長軸 175cm、短軸 116cm を測る。 平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 32cm を測る。土壙内には多くの石が廃棄された状態でその中で土器片を検出した。

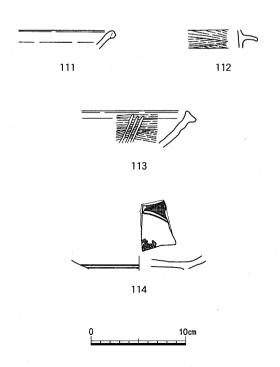
遺物は、擂鉢 113 と磁器の皿 114 が出土している。 時期は近世に位置付けられる。



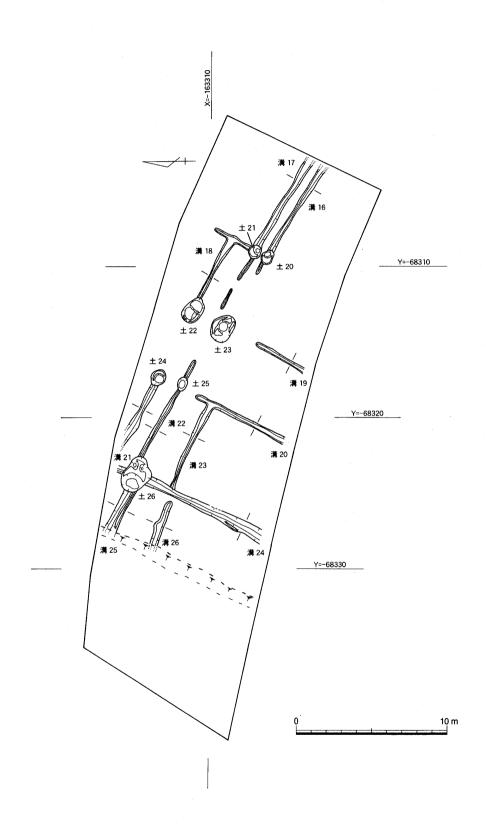


- 1 灰オリーブ色粘性砂質土
- 2 黄灰色粘性砂質土
- 3 灰色粘性砂質土
- 4 灰黄色粘性砂質土く粗砂>
- 5 黒褐色粘性砂質土

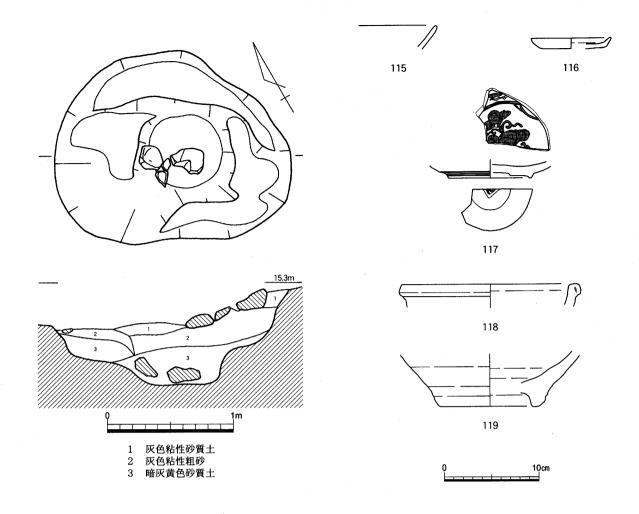
第69図 土壙22(1/30)



第 70 図 土壙 20 ~ 22 出土遺物 (1/4)



第71図 2区中・近世遺構全体図 (1/250)



第72図 土壙23(1/30)・出土遺物(1/4)

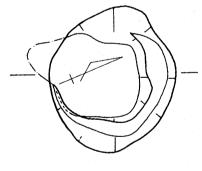
土壙 23 (第71・72図)

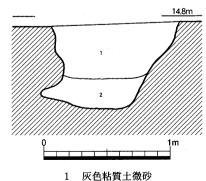
調査区中央、土壙 22 の南側 1 mに位置する。土壙は 西側へ下る地形に即し掘削されている。規模は長軸 191 cm、短軸 146cm を測る。平面形は不整円形を呈する。 検出面からの深さは、54cm を測る。中央が一段窪む形 状をなすために、何かを据え置いた痕跡とも考えられる。 この土壙においても土壙 22 同様に多量の石が廃棄され ていた。

出土遺物には、磁器碗 115、土師器の皿 116、磁器皿 117、陶器の鉢 118・119、鉄滓がある。

116 は口径 8.4cm、器高 4.9cm を測る。底部は糸切り痕が残る。117 は、蛇ノ目凹形高台をもつ。底径 8.8cm を測る。118 は口縁端部を折り返し、玉縁状になる。口径は 18.8cm を測る。119 は底径 12.4cm を測る。

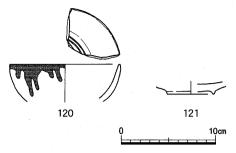
時期は、17~18世紀の範疇に位置付けられる。





1 灰色粘質土像砂2 灰色粘性砂質土

第73 図 土壙 24 (1/30)



第74図 土壙24出土遺物(1/4)

土壙 24 (第71・73・74 図)

調査区中央、土壙25の北側1mに 位置する。土壙は溝21を切って掘削 されている。規模は長軸 116cm、短 軸 97cm を測る。平面形は楕円形を 呈する。検出面からの深さは57cm を測る。断面形は南西側が大きく抉れ ており、袋状を呈している。検出面か ら30cmで段がみられる。埋土は2 層に区分でき、水平堆積をしている。 調査中に随時湧水を確認している。遺 物は磁器皿 120 と磁器碗 121 が出土 している。時期は17~18世紀に位 置付けられる。

土壙 25 (第71・75 図)

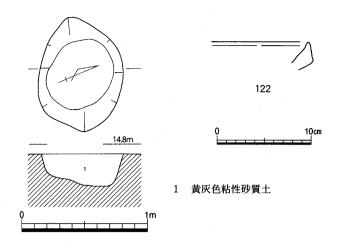
調査区中央、土壙24の南側1m に位置する。溝22を切っている。規 模は長軸 91cm、短軸 67cm を測る。 平面形は楕円形を呈する。検出面から の深さは 26cm を測る。断面形は逆 台形を呈する。土壙内の埋土は、黄灰 色粘性砂質土が単層で堆積している。

遺物は、土師器の鉢 122 や磁器の 細片が出土している。122の口縁端部 はヨコナデにより成形されている。

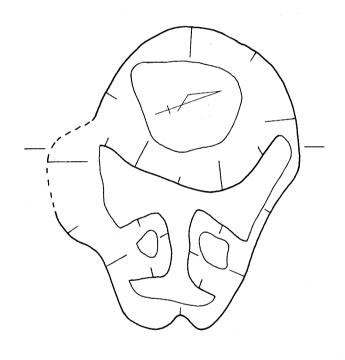
時期は、近世に位置付けられる。

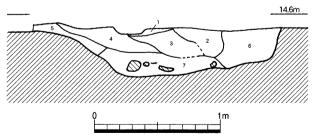
土壙 26 (第71・76・77 図)

調査区西側、土壙25の北西5mに 位置する。溝 22・24・25 を切って 掘削されている。規模は長軸 242cm、



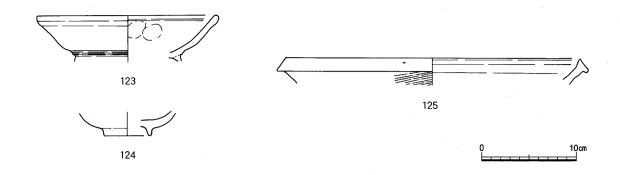
第 75 図 土壙 25 (1/30)・出土遺物 (1/4)





- 灰色粘性砂質土 1
- 灰色弱粘性砂質土く砂質土ブック含む〉
- 灰オリーブ色粘質土微砂 灰オリーブ砂質土 3
- 灰オリーブ粘性砂質土
- 灰色粘質土微砂
- 灰色砂質土

第 76 図 土壙 26 (1/30)



第 77 図 土壙 26 出土遺物 (1/4)

短軸 161cm を測る。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは 40cm を測る。土壙内は土壙 22・23 と同様に多量の石が廃棄されていた。

出土遺物は、図示できるものとして3点掲載する。123は瓦質の椀で口径19.2cm を測る。欠損している高台は貼り付けによるものである。124は磁器碗で底径5cm を測る。125は捏鉢である。外面はヨコ方向のハケメを施している。

時期は、近世に位置付けられる

(2) 溝

溝 16 (第71・78図)

調査区東側に位置し、南東方向から北西方向に流走する溝である。検出長は 9.1 m、上端幅 32 cm、底面幅 20cm、検出面からの深さは 11cm を測る。時期は近世に位置付けられる。

溝 17 (第 71・78 図)

調査区東側に位置し、溝16と併走する溝である。検出長は、8.2 m、上端幅32cm、底面幅12cm、検出面からの深さは6 cm を測る。時期は溝16と同様に近世に位置付けられる。

溝 18 (第 71・78 図)

調査区東側に位置し、土壙 22 に切られている。検出長は、4.7 m、上端幅 27cm、検出面からの深さは 2 cm を測る。時期は、1 区溝 4 と堆積土が共通であり中世に位置付けられる。

溝 19 (第 71・78・79 図)

調査区中央に位置し、南北方向に流走する溝である。検出長は 3.6 m、上端幅 23cm、検出面からの深さは 5 cm を測る。遺物は、磁器の皿 126 が出土している。126 は蛇ノ目高台をもつ。時期は近世に位置付けられる。

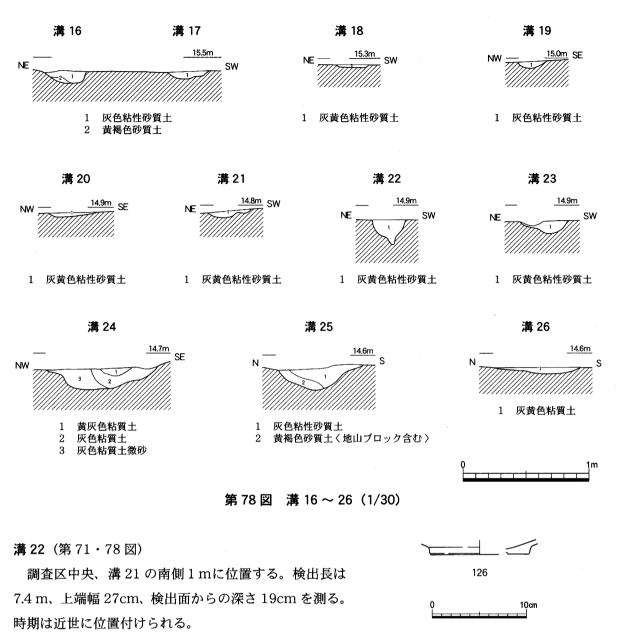
溝20 (第71・78図)

調査区中央、溝 19 の西側 4.5 mに位置する。検出長は 6.6 m、上端幅 39cm、底面幅 22cm、検出面からの深さは 4 cm を測る。時期は近世の範疇と考えられる。

溝 21 (第71・78 図)

調査区中央北側に位置する。検出長は4mであり、北西側は調査区外へ延びる。上端幅は3.5 m、 検出面からの深さは5 cm を測る。時期は近世と考えられる。

第4章 発掘調査の概要



溝 23 (第 71·78 図)

第 79 図 溝 19 出土遺物 (1/4)

調査区中央、溝22の南2mに位置する。この溝は

西側を溝 24 に切られている。検出長は 6.2 m、上端幅 38cm、底面幅 15cm、検出面からの深さ 10cm を測る。時期は近世に位置付けられる。

溝 24 (第 71・78 図)

調査区の西側に位置する。この溝は北側で土壙 26 に切られている。検出長は 10.5 m、上端幅 90cm、底面幅 58cm、検出面からの深さ 17cm を測る。時期は近世に位置付けられる。

溝 25 (第71・78 図)

調査区北西側に位置する。この溝は土壙 26 に東側を切られており、北西側は調査区外へ延びる。 検出長は $2.7~\mathrm{m}$ 、上端幅 $67\mathrm{cm}$ 、検出面からの深さ $17~\mathrm{cm}$ を測る。時期は近世に位置付けられる。

溝 26 (第71・78図)

調査区西側に位置する。検出長は 3.2 m、上端幅 67cm、底面幅 31cm、検出面からの深さ 6 cm を測る。時期は近世に位置付けられる。

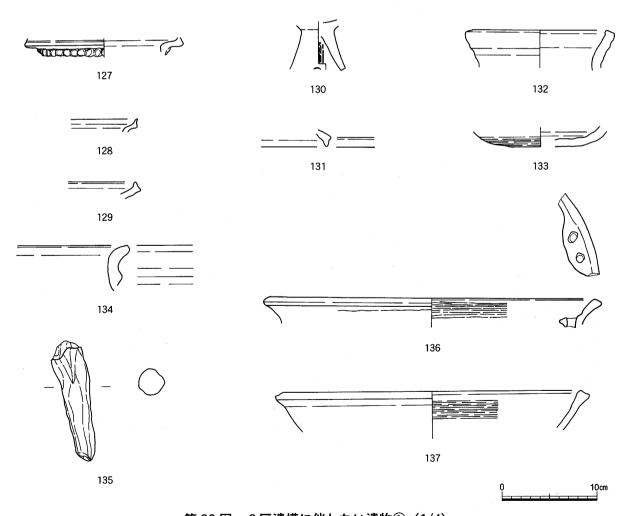
4 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物 (第80・81 図、図版10-4)

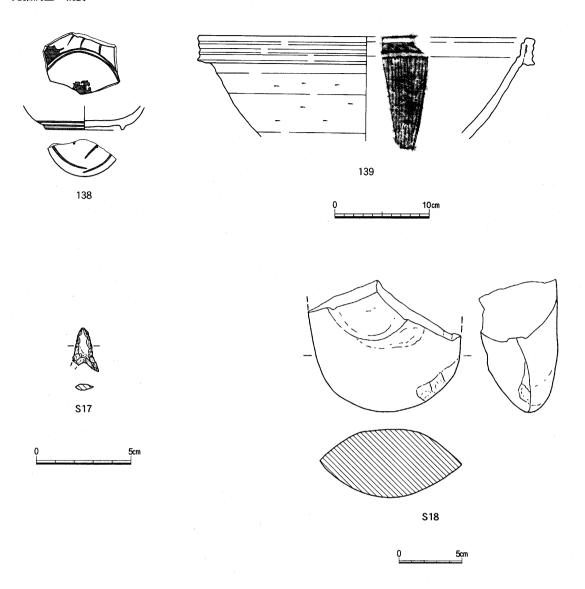
遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器のうち図示可能遺物、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げる。

127 は弥生時代中期の甕である。外反する口縁は端部を上方へ摘み上げる。口縁部を欠損しており、1条の凹線文がみられる。また、頸部には指頭圧痕文突帯が巡る。128・129 も弥生土器の甕である。128 は口縁端部を肥厚せず、上方へ摘み上げる。129 は口縁端部を僅かに摘み上げている。130・131 は弥生土器の高杯である。130 は円形の穿孔が施されている。132 は高杯の脚端部、精良な胎土で製作されている。132・133 は須恵器である。132 は壺であり、口径は 14cm を測る。133 は杯身であり、底径は 14.2cm を測る。

134 は亀山焼の甕である。135 は土師器土釜の支脚である。136 は土師器把手付土鍋である。口径は 34cm を測る。外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメで調整している。また外面には煤が付着している。137 は土師器の捏鉢である。外面はヨコナデ、内面はヨコ方向のハケメを施している。口径は 31.4cm を測る。



第80図 2区遺構に伴わない遺物① (1/4)



第81図 2区遺構に伴わない遺物② (1/4・1/2・1/3)

138 は磁器碗であり、肥前産とみられる。底径は 8 cm を測る。139 は陶器の擂鉢である。口径 35.4cm を測り、内面に擂目を施したのちナデによって鋭い段をつくり出す。関西系の堺産とみられる。18 世紀に範疇に位置付けられる。

S 17 は凹基式の石鏃である。材質はサヌカイトである。S 18 は磨製石斧である。上半部を欠損している。材質は砂岩である。

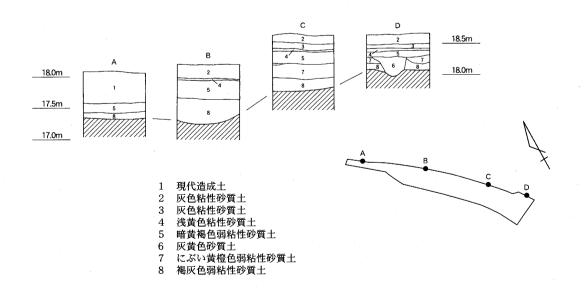
第4節 3区の概要

1 概要

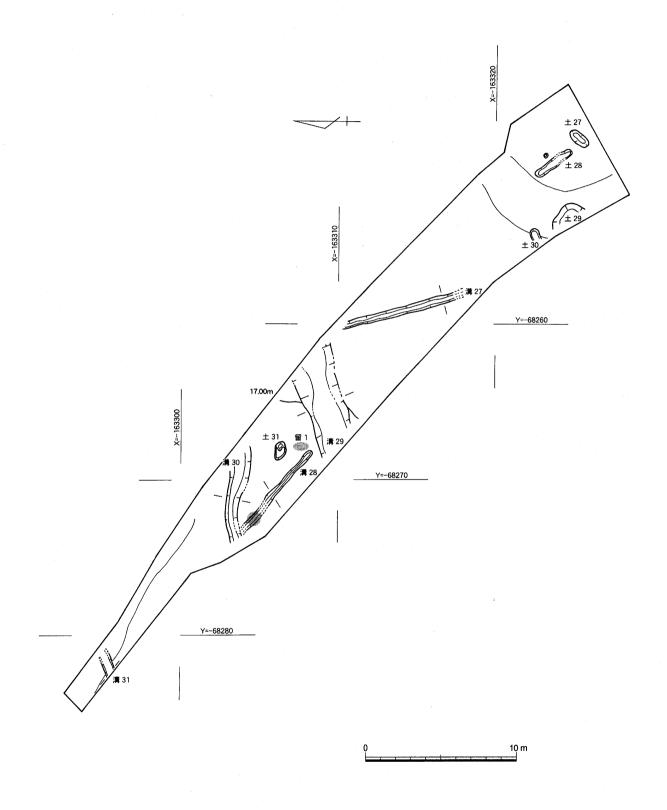
3 区は 6 m規格道路の南側、海抜高は 16.75 mから 17.50 mに位置している。平成 16 年度に T 16、平成 17 年度に T 17 が実施された箇所に該当する。調査以前は水田として利用されていた。

基本層序は、調査区西側では現代造成土 (1層) が堆積している。現代水田層である灰色粘性砂質土 (2層)、近世水田層である灰色粘性砂質土 (3層)、近世水田層の床土である浅黄色粘性砂質土 (4層)、中世の遺物を包含する暗黄褐色弱粘性砂質土 (5層)、にぶい黄橙色弱粘性砂質土 (7層) 褐灰色粘性砂質土 (8層) は弥生時代後期の土器を多く含有する包含層である。それより下層は遺物を含有しない層が続くが、調査区中央の溝 29 (第83図) を境に弥生時代の基盤層が異なる。東側は暗灰黄色粗砂、西側は明黄褐色粘土である。元々、この北西側に向かって地形が低く、傾斜していたものと推測される。

主な遺構は弥生時代、古墳時代、中世〜近世のものである。弥生時代では、土壙5基、溝5条、土器溜り1基を検出した。土壙は調査区の南側に集中する傾向にある。竪穴住居は検出できなかったが、溝が多く検出できた。調査区の北西側に位置する溝28・29や土器溜り1で、弥生時代の土器が多量に一括廃棄されていることから集落の中心部が近隣に存在することを窺わせる資料といえる。また、この調査区からは3点の分銅形土製品が出土している。古墳時代には溝1条が掘削されている。中世では、柱穴列1列、土壙2基、溝1条が検出した。近世では土壙1基、溝3条、耕作痕2基、下がりを検出した。中世段階までは集落域として利用されていたと考えられる。近世には、集落域外の水田域が拡がるものとみられる。



第82 図 3 区堆積状況柱状模式図 (1/60)



第83図 3区弥生時代遺構全体図(1/250)

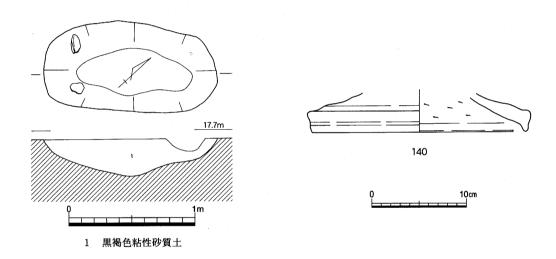
2 弥生時代の遺構と遺物

(1) 十塘

土壙 27 (第83・84 図、図版5-3)

調査区の東端に位置する。土壙 28 の南東 0.5 m、今回の発掘調査で海抜高が最も高い場所に位置している。古墳時代の柱穴に一部削平を受けている。規模は長軸 137cm、短軸 70cm を測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 30cm を測る。土壙の埋土は黒褐色粘性砂質土が単層堆積している。遺物は弥生土器 140 が出土しており、土壙の上部で検出した。140 は径 22.6cm を測る器台の脚部である。脚端部は凹面をなす。胎土は暗褐色を呈し角閃石を多く含む。また赤色顔料が塗布されている。

時期は弥生時代後期中葉に位置付けられる。



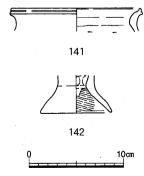
第84 図 土壙 27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙 28 (第 83 · 85 · 86 図、図版 6-1、 9-3)

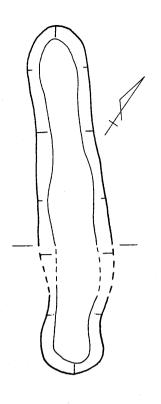
調査区南東部、土壙 27 の北西 0.5 m、土壙 29 の北東 2.3 mに位置する。規模は長軸 275cm、短軸 54cm を測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 15cm を測る。土壙の埋土は単層で、黒褐色粘性砂質土が堆積している。

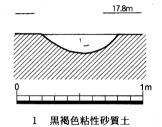
遺物は弥生土器の細片が多く出土しているが、図示できるものは甕 141 と 142 の 2 点である。甕 141 は口縁部を「く」の字状に折り曲げたあと、口縁端部がわずかに肥厚し、上方へ摘み上げて端面に凹線文を施している。142 は上半部を欠損した状態であり、底径 7.6cm を測る。胎土はいわゆる水こし粘土に近いものである。外面はユビオサエ、内面はハケメを施している。器種は特定できていない。

時期は、出土遺物から弥生時代後期に位置付けられる。

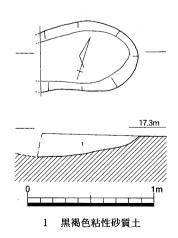


第 85 図 土壙 28 出土遺物 (1/4)





第86図 土壙28 (1/30)



第88図 土壙30 (1/30)

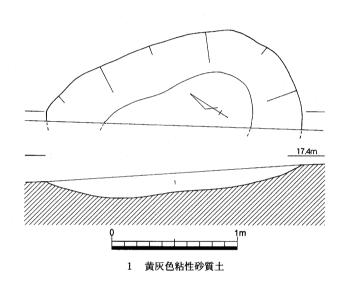
土壙 29 (第83・86図)

調査区東側、土壙 28 の南西 2.3 mに位置する。土壙の西半は調査区外へと続く。規模は長軸 200cm、短軸 70cm を測る。平面形は楕円形を呈するものとみられる。検出面からの深さは 20cm を測る。土壙は北西側が低くなっている。

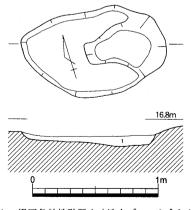
土壙の埋土は黄灰色粘性砂質土が堆積している。

遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。

時期は、出土遺物や埋土の観察から弥生時代後期の範疇に 位置付けられる。



第87図 土壙29 (1/30)



1 褐灰色粘性砂質土く地山ブロック含む〉

第89図 土壙31(1/30)

土壙 30 (第83・88 図)

調査区東側、土壙 30 の北西 2 mに位置する。土壙の西半は調査区外へと続く。規模は長軸 79cm、短軸 55cm を測る。平面形は楕円形を呈するものとみられる。検出面からの深さは 18cm を測る。土壙の埋土は単層で黒褐色粘性砂質土が堆積している。遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。時期は、出土遺物や埋土の観察から弥生時代後期の範疇に位置付けられる。

土壙 31 (第83・89図)

調査区中央、土器溜り1の北西1mに位置する。規模は長軸115cm、短軸67cmを測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは8cmを測る。土壙の埋土は褐灰色粘性砂質土が堆積している。遺物は図示できるものはないが、弥生土器の細片が出土している。

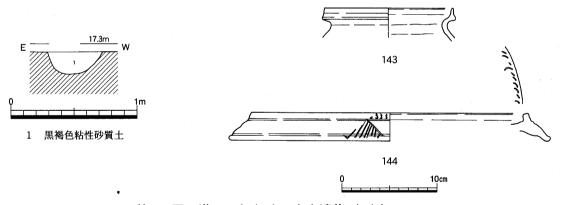
時期は、出土遺物や埋土の観察から弥生時代後期の範疇に位置付けられる。

(2) 溝

溝 27 (第83・90図)

調査区を南東方向から北西方向へ流走する溝である。南東側は中世の溝 33 によって切られている。 北西側は調査区外へ延びる。検出長は 7.5 m、上端幅 45cm、底面幅 20cm、検出面からの深さは 18cm を測る。断面形は「U」字形である。出土遺物は弥生土器の細片が多く出土しているが、図示 できるものは甕 143 と装飾器台 144 である。144 は口縁部外面に鋸歯文を施している。

時期は、出土遺物や埋土の観察から弥生時代後期の範疇に位置付けられる。

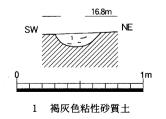


第 90 図 溝 27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

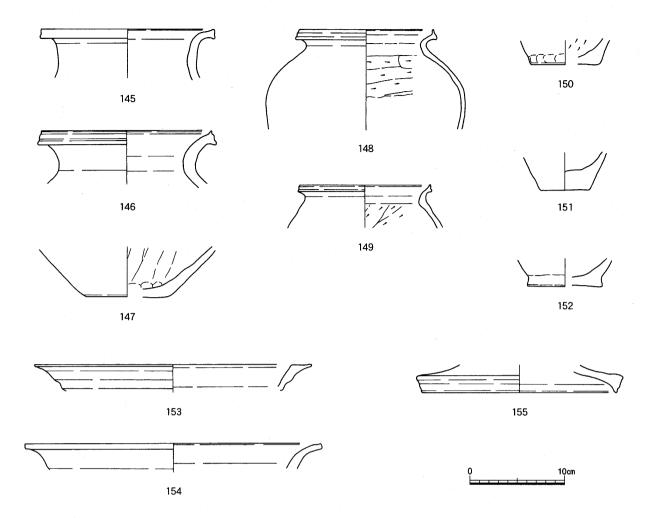
溝 28 (第 83·91·92·93 図、写真 1、図版 6-2、 9-3)

調査区中央、溝 29 の西側に位置し、南東方向から北西方向へ流走する溝である。北西側は溝 30 に切られている。検出長は 6.5 m、上端幅 37cm、底面幅 17cm、検出面からの深さは 11cm を測る。断面形は「U」字形である。溝の北西側において土器溜り(第 92 図)を検出した。

出土遺物は、弥生土器のほかにサヌカイト片が出土している。

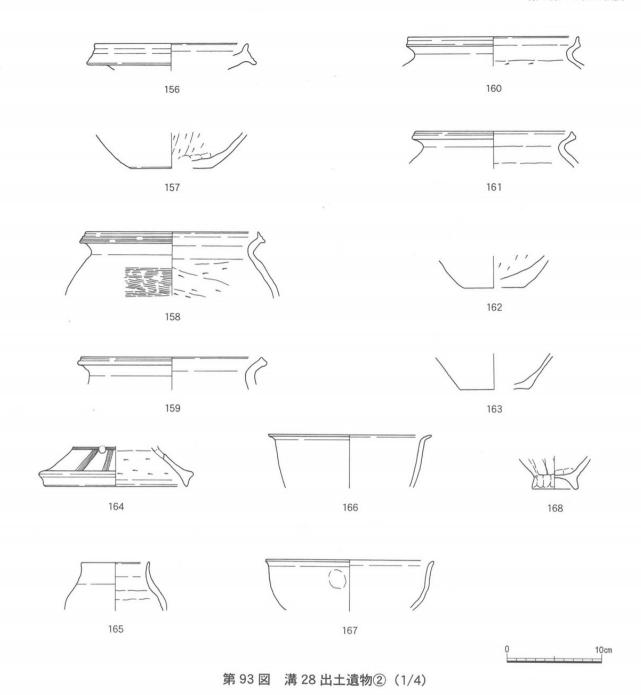


第91図 溝28 (1/30)



第 92 図 溝 28 出土遺物① (1/4)

145~147は壺である。145は広口壺で口径18.2を測る。口縁端部はヨコナデ調整により端面が凹む。 146 は口縁端部を肥厚し、2条の凹線文を施す。内面はヘラケズリによる調整である。147 は内面は ナデを施す。底径 8.8cm を測り、外面には黒斑が観察できる。148~152 は甕である。148 は口縁 端部を上方へ拡張し、端面にはヨコナデののち2条の凹線文を施す。形態的には肩部が屈曲するよう に張っている。内面は胴部から頸部まではヘラケズリで調整している。口径は14.2cm を測る。149 は口径 13.8cm を測る。内面はヘラケズリを施す。150 ~ 152 は甕の底部である。150 は底径 7.2cm を測る。151 は底径 5.2cm を測る。150・151 は外面に黒斑がみられる。153 ~ 155 は高杯である。 153 は口縁端部を外方へ拡張し、凹線文を施しているが不明瞭である。 口径は 29.4cm を測る。 154 は、 口径 31.4cm を測る。この高杯は、杯部から外反する口縁部を形成するもので、外面には黒斑がみら れる。155 は裾端部を肥厚させ、凹線を施す。底径は 20.6cm 測る。153・155 は胎土に角閃石を多 く含有し、内外面に赤色顔料を塗布している。156~168は土器溜り以外の弥生土器である。156・ 157 は壺である。156 は口縁端部を肥厚し、口径は16.2 を測る。157 は、内面はヘラケズリを施す。 外面に黒斑がみられる。底径は 8.6cm を測る。158 ~ 163 は甕である。158 は口縁端部を上方へ拡 張し、3条の凹線文を施す。外面はヨコ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリで調整している。 口径は 18cm を測る。159 は口縁端部をヨコナデで凹部となる。160 は口縁端部を上方へ拡張する。 内面はヘラケズリを施す。161 は口径 16.6cm を測る。162・163 は底部である。162 は底径 6.4 cm



を測り、内面はヘラケズリを施す。外面には黒斑がみられる。163 は底径 7.4cm を測る。調整は内外面ともに不明瞭である。外面には黒斑がみられる。高杯 164 は裾端部を外方に張り出させ、ヘラガキ沈線で施文する。円形の透かし孔は裏面に抜ける。内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。底径は 15cm を測る。165~167は鉢である。165 は口径 7.2cm を測る。内面はヨコナデを施す。外面には赤色顔料を塗布する。胎土には角閃石を含有されないものである。



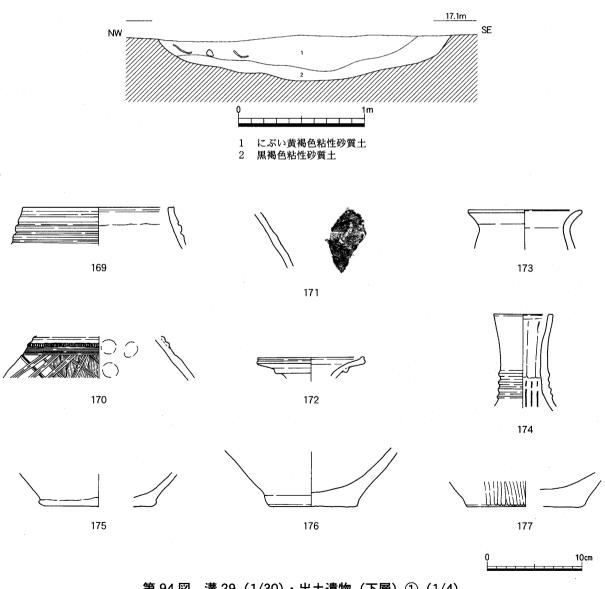
写真 2 溝 28 土器出土状況 (南東から)

166 は口径 1.4cm を測り、口縁部を外方へ外反する。167 は口縁部が僅かに開く。口径は17.8cm を測る。外面には黒斑がみられる。168は製塩土器の脚部である。外面はナデ調整を施している。外 面には黒斑、被熱変色がみられる。当地域での弥生時代の製塩土器の出土は初例となる。

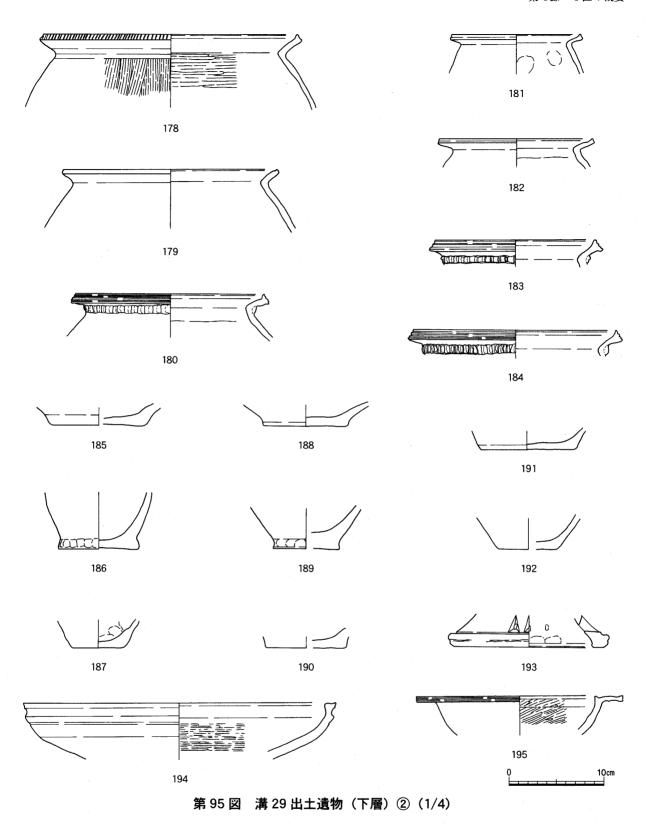
この溝の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉に位置付けられる。

満 29 (第83・94~101 図、写真 2、巻頭図版 2-1・2、図版 6-3、9-3、10-1)

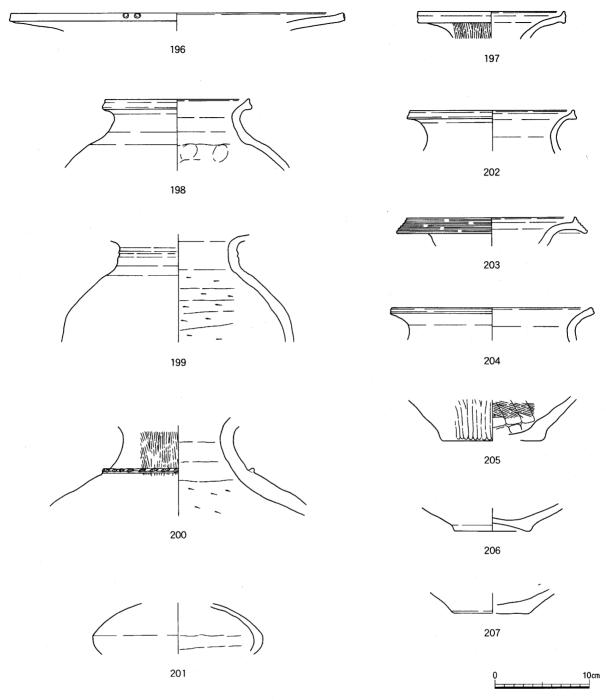
調査区の中央、土器溜り1南側に位置する。 平成17年度のT17の調査で確認されていた溝である。 北東方向から南西方向へ直線的に掘削されており、約5mにわたって検出された。検出面の幅は、上 端幅 235cm、底面幅 180cm である。検出面からの深さは 36cm を測る。底面の海抜高は北東側で 16.71 m、南西側で 16.60 mであり、西流することが分かる。溝の埋土は、 2 層に分類できる。上層 はにぶい黄褐色砂質土、下層は黒褐色粘性砂質土である。この溝からは、多量の弥生土器や分銅形土 製品、石器が出土している。土器の出土状況は、溝北側の肩部に最も集中する状態で検出した。溝中 央の最深部にても土器が点在する状況で検出している。土器は層位的には、上層・下層に分けられ、 下層は弥生時代中期、上層は弥生時代後期である。この溝の廃棄時期は弥生時代後期にかけてと位



第 94 図 溝 29 (1/30) - 出土遺物 (下層) ① (1/4)

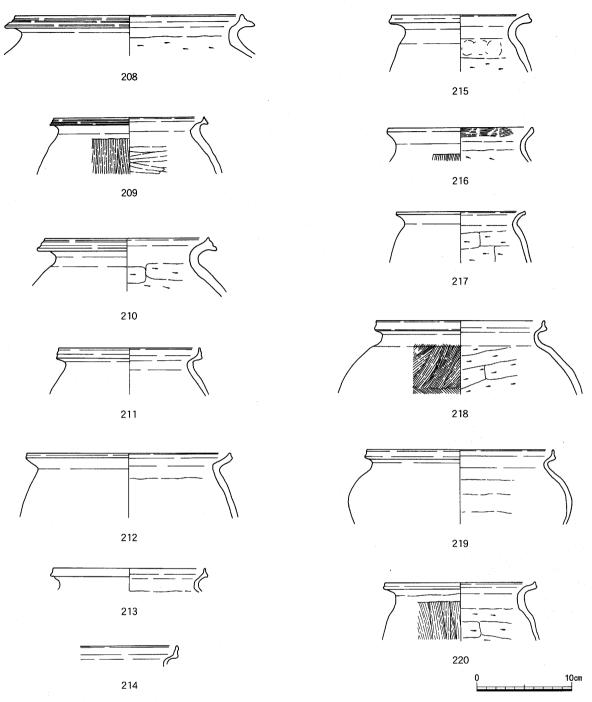


置付けられる。169~177 は壺である。無頸壺 169 は口縁端部が水平面を形成し、2条の凹線文を施す。170 は2条の突帯を巡らす。体部外面は、タテ方向の調整ののち櫛状工具による斜格子文を描く。171 は肩部の破片で櫛状工具による波状文や櫛描沈線で加飾をする。長頸壺 172 は口縁端部が外傾する面を形成している。口縁部下半には貼付突帯を施す。173 は小形の壺である。口径は12cmを測る。174 は溝の西から出土した細頸壺である。口径 6.2cm の口縁部の基部には3条の突帯を巡



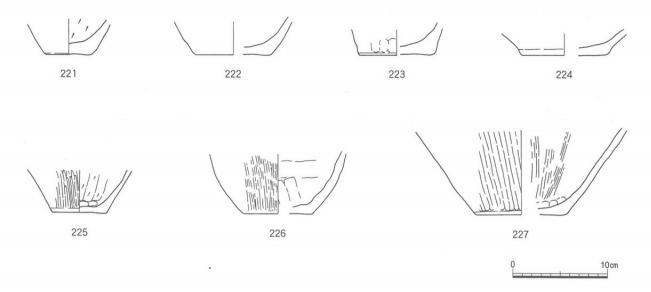
第 96 図 溝 29 出土遺物 (上層) ① (1/4)

らす。175~177 は底部である。176 は底径 9 cm を測り、外面に黒斑が観察できる。177 の外面はタテ方向のヘラミガキが施される。底径は11.2cm を測る。178~192 は甕である。178 は大型の体部に対し短く外反する口縁部をもつ。内傾する口縁部端面には刺突文を施す。外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。口径は26.8cm を測る。179・181・182 は「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部はわずかに肥厚させ外側に面をもつ。180・183・184 は口縁端部を上方に摘み上げ、端面には凹線文、頸部には指頭圧痕文を施す。185~192 は底部である。187 は内面にユビオサエを施す。底径は5.4cm を測る。188 は外面にヨコナデを施している。189 は底部に黒斑が観察できる。193 は高杯か台付鉢の脚部であるとみられる。脚端部は肥厚しており、三角形の



第 97 図 溝 29 出土遺物 (上層) ② (1/4)

透かしが施されている。195 は水平口縁部を垂下せず、わずかに端部を拡張し、口縁端部は内傾している。内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。ここからは溝上層の土器である。196 ~ 207 は壺である。196 は広口壺とみられる。口縁部端面には2個一対の円形浮文で加飾している。197 は外面をタテ方向のハケメを施す。198・199 の頸部には強いヨコナデにより、凹凸が形成されている。198 の口径は15.2cmを測る。口縁端部はヨコナデ調整により端面が凹む。200 は肩部には突帯が貼り付けられ、端面には刺突文を施す。201 は玉葱形の胴部をもつ細頸壺である。内面は強いナデ調整が施されている。胎土には角閃石の含有率が高い。内外面に赤色顔料を塗布している。203 は口径17.8cmを測る口縁端部を上下に拡張し、端面には5条の凹線文を施す。205 ~ 207 は底部である。205 は



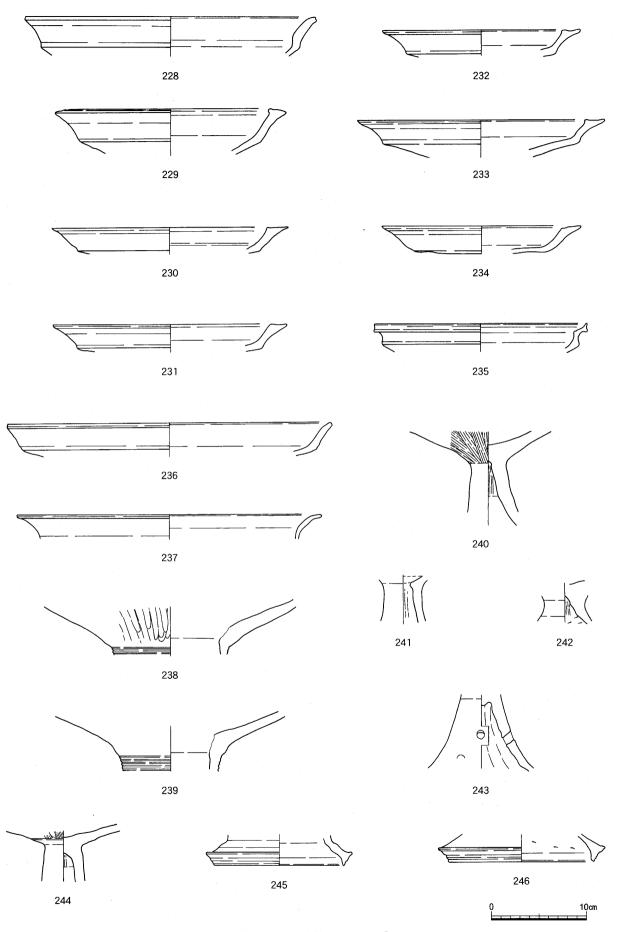
第 98 図 溝 29 出土遺物 (上層) ③ (1/4)



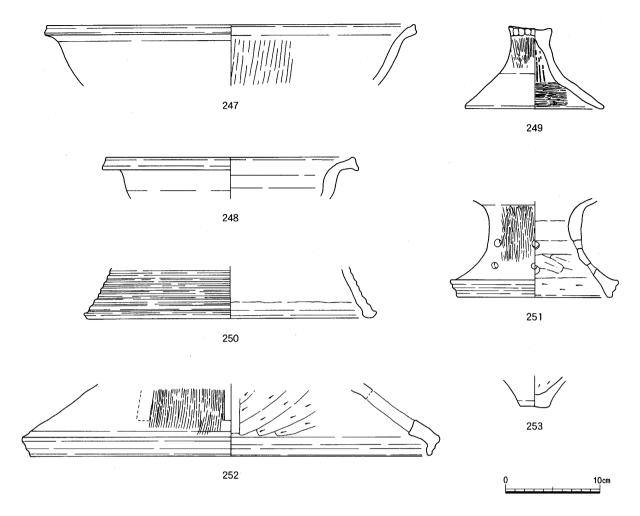
写真3 溝29土器出土状況 (南西から)

外面にタテ方向のヘラミガキを施す。208~227は甕である。208~210はは口縁端部に凹線文を施す。208は、内面はヘラケズリの調整を行う。209は口径16cmを測る。外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。211は口縁部を上方へ拡張している。端面はヨコナデ調整により凹む。212は口径21.4cmを測る。内面は不明瞭だが、ヘラミガキが施されている。213・214は口縁部を上方へ拡張するものである。214は外面に煤が付着している。215は肩部が張らないタイプである。内面はヘラケズリ、ヨコナデを施す。口径は14.4cmを測る。216・217は「く」の字状に屈曲する頸部から外反する口縁部となる。216は外面はタテ方向のハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部にはヨコ方向のハケメを施す。217は外面をヨコ方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。217は外面をヨコ方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。218・219は口縁部を上方に拡張させ、端部はヨコナデをする。外面調整は肩部にヨコナデ、胴部下半は左ナナメ、上半では右ナナメでハケメ

の方向が異なる。内面はヘラケズリを施す。口径は 17.8cm を測る。219 は肩部が屈曲するように張る。内面はヨコナデののち押圧を施す。胎土は角閃石を多く含み、内外面に赤色顔料を塗布している。口径は 19.8cm を測る。220 の外面はタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。口径は 15.8cm を測る。221 な底部である。221 は底径 4.8cm を測る。内面はヘラケズリを施す。底面には煤が付着している。222 は外面に黒斑がみられる。223 は外面に破裂痕跡が観察できる。225 は外面をタテ方向のヘラミガキ、内面はタテ方向のヘラケズリを施す。底部には押圧が認められる。226 は底径 8.2cm を測る。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はナデを施す。227 は外面はタテ方向のヘラミガキを施し、煤が付着している。228 ~ 246 は高杯である。228 ・ 236 ・ 237 の杯部は、口縁部が杯部から外反する口縁部を形成するものである。229 ~ 235 は口縁端部を肥厚させる

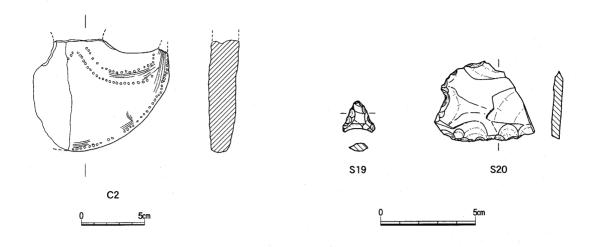


第 99 図 溝 29 出土遺物 (上層) ④ (1/4)



第 100 図 溝 29 出土遺物 (上層) ⑤ (1/4)

ものである。229 は口縁部が外方に開き、端部を肥厚させ、凹線文を施文する。231 は口縁端部を外 方へ拡張し、凹線を施す。235 は杯部から外方に屈曲し、端部を拡張する。236 は口径は 34.4cm を 測る。238・239 は杯部と脚部との堺に円盤充填がみられ、櫛描沈線を施す。238 の外面はタテ方向 のヘラミガキを施している。240~244は脚柱部である。240の杯部外面はタテハケを施している。 241 は円盤充填が認められる。243 は円形の透し孔を2個持つ。内面はタテ方向のナデを施している。 245・246 は脚部である。245 は裾端部を肥厚させて凹線文を施す。底径は 13.8 cm である。246 も 裾端部を肥厚させて凹線文を施す。内面はヨコ方向のヘラケズリを施している。底径は 15.4cm を 測る。高杯 231 ~ 235・241・243・245 は、胎土に角閃石が顕著に認められる。内外面ともに赤色 顔料を塗布している。247・248は鉢である。247・248は口縁部を肥厚させ、端部はヨコナデによ り凹部を形成している。口径 38.8cm を測る。調整は外面は不明瞭であるが、内面はタテ方向のヘラ ミガキを施している。248 は口径 26cm を測る。外面には黒斑が認められる。249 は蓋である。上 面径は 4.3cm、底径は 14.6cm を測る。上面はヘラミガキ、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面は ヨコ方向のヘラミガキを施している。また、外面には黒斑が認められる。250~252は器台である。 250 は裾部外面に 6 条の凹線文で施文する。底径は 29.8cm を測る。251 は口縁部を欠く、残存高は 10.2cm、底径 10.2cm を測る小型の器台である。脚端部を肥厚し、ヨコナデに凹部を形成している。 外面はタテ方向のヘラミガキ、内面は上半部はヨコナデ、裾端部はヨコ方向のヘラケズリ調整をして



第 101 図 溝 29 出土遺物 (1/3・1/2)

いる。筒部に2段8方向の円形透しが施される。外面裾端部には黒斑がみられる。胎土は角閃石を多く含有し、赤色顔料が塗布されている。252は脚端部は肥厚し、ヨコナデ調整により凹部を形成している。外面はタテ方向のハケメ、内面はナナメ方向のヘラケズリで調整されている。また方形透しを施している。脚端部外面には黒斑がみられる。253はミニチュア土器の底部である。底径は3cmを測る。内面はヘラケズリを施している。C2は大形の分銅形土製品であり、溝29の下層で出土した。表面は摩耗しており、残存状態は良くない。下半部右側部分の破片で、下弧に櫛描沈線とそれを刺突文で縁取り加飾を施している。S19は長さ15mm、幅17mm、厚さ4mm、重量0.5gを測るサヌカイト製の凹基式石鏃である。S20は抉りをもっていることから石包丁とみられる。材質はサヌカイトである。

溝30 (第83・102 図、図版7-1)

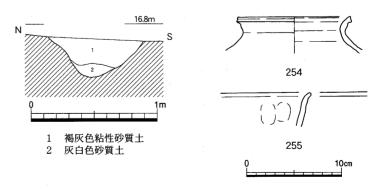
調査区西側に位置し、北東方向から西側方向に流走する溝である。溝 28 を切って掘削されている。西側は調査区外へ延びる。検出長は 5 m、上端幅 56cm、底面幅 20cm、検出面からの深さは 30cm を測る。底面の海抜高は北東側で 16.37 m、南西側で 16.35 mである。溝の埋土は 2 層に分類でき、上層は褐灰色粘性砂質土、下層は灰白色砂質土が堆積している。遺物は弥生土器の甕 254・鉢 255 が出土している。254 は口縁端部はヨコナデにより凹部が形成されている。口径は 11.8cm を測る。内面はヨコナデが施されている。口縁部には黒斑がみられる。255 は口縁部が外反するものである。内面には押圧を施す。外面には煤が

付着している。

時期は出土遺物や土層の観察から 弥生時代後期に位置付けられる。

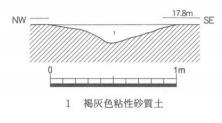
溝 31 (第83・103図)

調査区北西側に位置し、北東方向 から南西方向に流走する溝である。 検出長は 90cm、上端幅 50cm、底 面幅 15cm、検出面からの深さは 3 cm を測る。溝の埋土は褐灰色粘性



第 102 図 溝 30 (1/30)·出土遺物 (1/4)

砂質土が単層で堆積している。遺物は図示できるものはないが、 弥生土器の細片が出土している。時期は出土遺物や土層の観察 から弥生時代後期の範疇と考えられる。



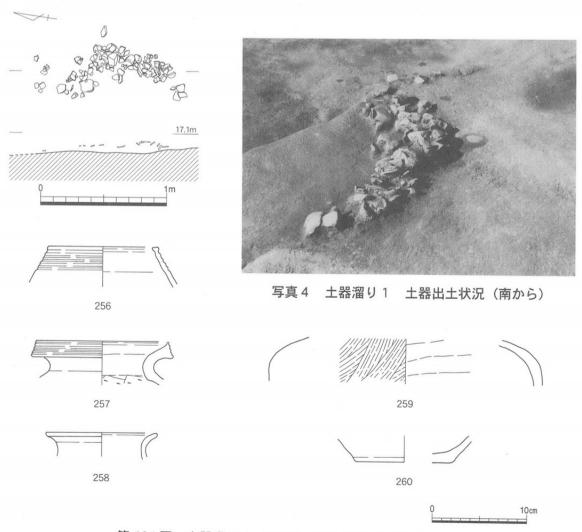
(3) 土器溜り

第 103 図 溝 31 (1/30)

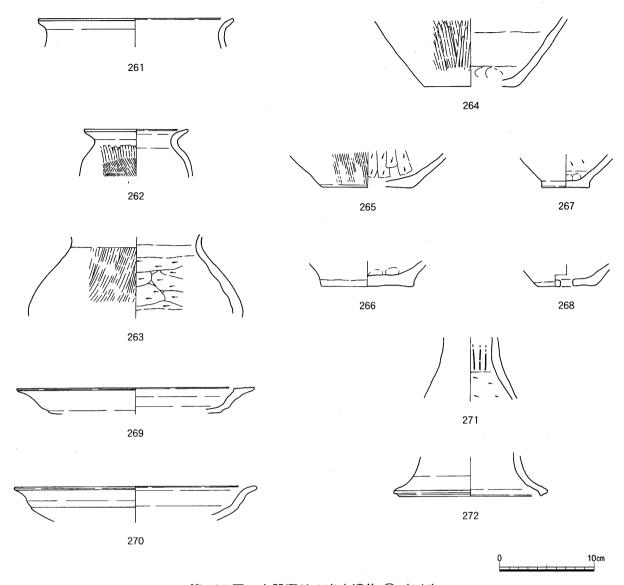
土器溜り1 (第83・104図、写真3、図版)

調査区の中央、溝 29 の北西側に位置する土器溜りである。南北 130cm、東西 60cm の範囲に土器片が密集して検出された。土器溜りの底面は南から東へ若干下がっている。

遺物は弥生土器が出土している。256 ~ 260 は壺である。256 は弥生時代中期の無頸壺である。口縁部はわずかに肥厚させ、6条の凹線文を施している。口径は11.6cm を測る。257 は口縁部外面に4条の凹線文が巡り、内面はヘラケズリは肩部付近までで頸部はヨコ方向のナデを施す。258 は外反する口縁部をもつ小形の長頸壺である。口径は11.8cm を測る。262 は体部である。外面はハケメ、



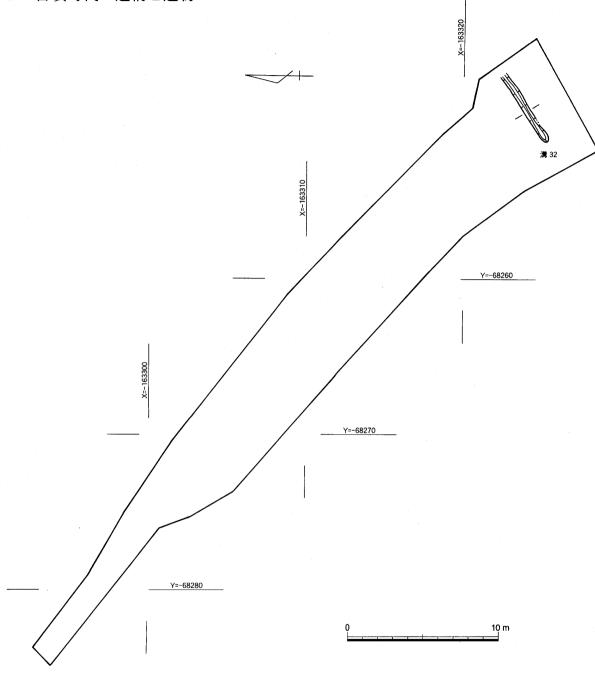
第 104 図 土器溜り 1 (1/30)・出土遺物 ① (1/4)



第 105 図 土器溜り 1 出土遺物 ② (1/4)

内面はヨコ方向のナデを施している。257・259 は胎土に角閃石を多く含有し、赤色顔料を塗布している。260 は底径 10.2cm を測り、内面には押圧で形成している。261~268 は甕である。261 は外反する口縁部をもち、口径 20.6cm を測る。262 は「く」の字に外反する口縁部をもつ。外面は頸部までタテ方向のヘラミガキののちハケ調整を施す。263 は口縁部を欠く。外面はハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリを施している。264~268 は底部である。264 は外面にヘラミガキ調整を行っている。265 は外面はタテハケ、内面はヘラケズリを施す。268 は底部に穿孔が認められる。269~272 は高杯である。269 は口縁端部を外方へ拡張し、凹線を施す。胎土中に角閃石を含み、赤色顔料を塗布している。270 は口縁部に杯部から外反する口縁部を形成する。272 は底径 15cm を測り、裾端部はヨコナデにより凹部を形成している。時期は、出土遺物から弥生時代後期の範疇に位置付けられる。

古墳時代の遺構と遺物 3

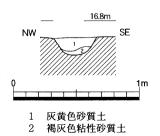


第 106 図 3 区古墳時代遺構全体図 (1/250)

(1) 溝

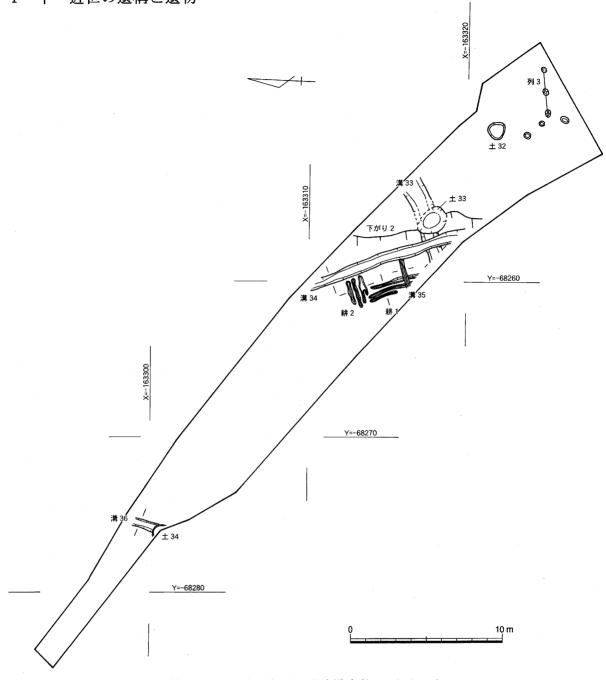
溝 32 (第 106・107 図、図版 10 - 1)

調査区の南側に位置する。検出長は4.5 m、上端 34cm、深さは13cmを測る。時期は須恵器の細片が出 土しており、古墳時代後期に位置付けられる。



第 107 図 溝 32 (1/30)

4 中・近世の遺構と遺物

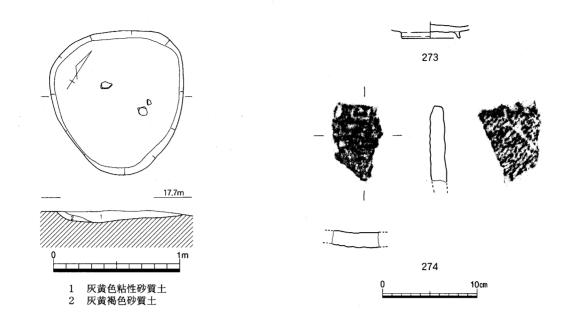


第 108 図 3 区中·近世遺構全体図 (1/250)

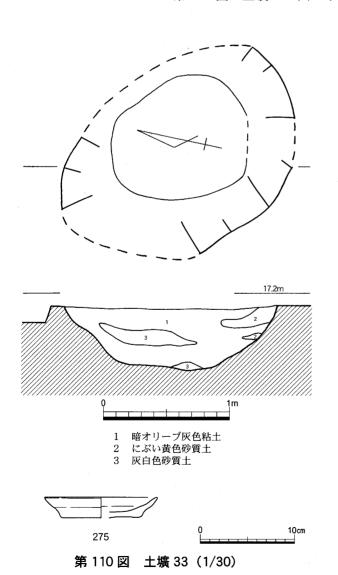
(1) 土壙

土壙 32 (第 108 · 109 図、図版 7 - 2)

調査区の南側、柱穴列3の北側3mに位置する。規模は、長軸114cm、短軸104 cm を測る。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは10cm を測る。土壙の埋土は上層は灰黄色砂質土、下層は灰黄色細砂が堆積している。遺物は土師器椀273、平瓦274が出土している。273はいわゆる早島式土器の底部で、径は6.2cmを測る。内面にはナデ調整を施している。274は凹面には布目



第 109 図 土壙 32 (1/30)・出土遺物 (1/4)



・出土遺物(1/4)

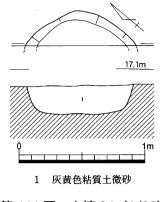
時期は、出土遺物や埋土の観察から中世 の範疇に位置付けられる。

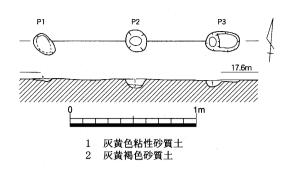
痕跡、凸面には縄目タタキが施されている。

土**塘 33** (第 108 · 110 図)

調査区の南側に位置する。溝 33 を切って掘削されている。検出の段階で溝 33 を調査後土壙 33 が存在していることが判明し、調査順序が逆となっていることを明記しておく。規模は長軸 206cm、短軸 143 cm を測る。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 48cm を測り、海抜高は16.63 mである。断面は逆台形を呈する。土壙内の埋土は、暗オリーブ灰色粘土が堆積しており、にぶい黄色砂質土や灰白色砂質土がブロック状に入る。また、底面付近には種別は特定できていないが、樹皮や枝が混交している状態であった。地山ブロックを含んでおり、人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物は、土師器皿 275 が出土している。 時期は、中世の範疇に位置付けられる。





第 111 図 土壙 34 (1/30)

第 112 図 柱穴列 3 (1/60)

土壙 34 (第108・111 図)

調査区の西側に位置する。溝 36 を切って掘削されている。南半は調査区外へ続く。規模は長軸 89cm、残存軸 28cm を測る。平面形は楕円形を呈するとみられる。検出面からの深さは 19cm を測る。土壙内の埋土は灰黄色粘質土が単層で堆積している。遺物は磁器の細片が出土している。時期は近世に位置付けられる。

(2) 柱穴列

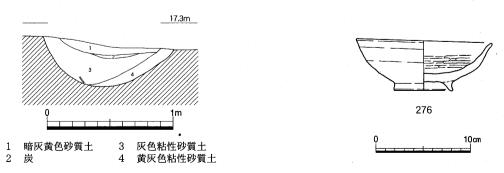
柱穴列3 (第108、112 図、図版7-3)

調査区東側、土壙 32 の南東側に位置する。東西 2 間分を検出したが東側は調査区外で続くものとみられる。柱穴の規模は長軸 34 \sim 54、短軸 31 \sim 37cm の円形を呈する。検出面からの深さは P i t 1 · 2 は 15cm、 P i t 3 は 5 cm と浅い。時期の特定できる遺物は出土していないが、埋土の観察から中世の範疇に位置付けられる。

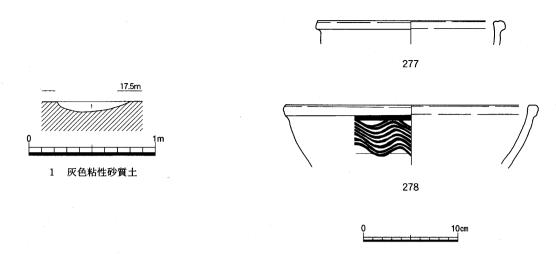
(3) 溝

溝 33 (第 108、113 図、図版 10 - 1)

調査区の東側に位置し、北東方向から南西方向に流走する溝である。土壙 33 に切られている。検 出長は 4.7 m、上端幅 106cm、底面幅 36cm、検出面からの深さは 40cm を測る。出土遺物は、土 師器椀 276 がある。口径は 14.4cm、器高は 5.1cm、底径 6.4cm を測る。時期は中世に位置付けられる。



第 113 図 溝 33 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第 114 図 溝 34 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝 34 (第 108、114 図)

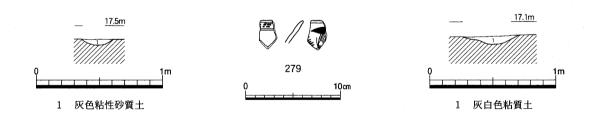
調査区の中央部に位置する北西-南東方向の溝である。溝 35 を切っている。遺物は、陶器 277・278 が出土している。時期は 17 ~ 18 世紀の範疇とみられる。

溝 35 (第 108、115 図)

調査区の中央部に位置する北東-南西方向の溝である。上端幅 25cm、下端幅 12cm、検出面からの深さは 5 cm を測る。遺物は磁器の細片 279 が出土している。時期は、近世に位置付けられる。

溝 36 (第 108、116 図)

調査区の西側に位置する北-南方向の溝である。土壙 34 に切られている。上端幅 45cm、下端幅 20cm、検出面からの深さは 7 cm を測る。時期は、出土遺物から近世に位置付けられる。



第 115 図 溝 35 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第 116 図 溝 36 (1/30)

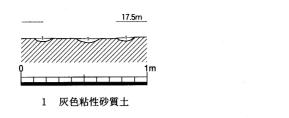
(4) 耕作痕

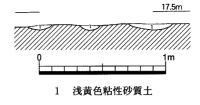
耕作痕1 (第108、117 図)

調査区の東側に位置する北西-南東方向に3条検出した。溝35を切っている。検出面からの深さは2cmと浅く、灰白色砂質土が堆積している。時期は、近世に位置付けられる。

耕作痕2 (第108、118 図)

調査区の東側に位置する東西方向に4条検出した。検出面からの深さは2cm を測り、浅黄色粘性砂質土が堆積している。時期は、近世に位置付けられる。





第 117 図 耕作痕 1 (1/30)

第 118 図 耕作痕 2 (1/30)

(5) 下がり

下がり2 (第108図)

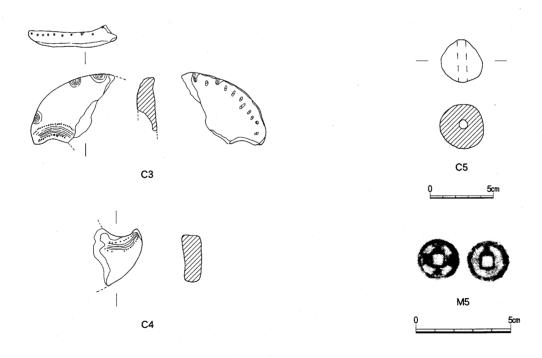
調査区の東側に位置し、溝 33 の上位に位置する。現在畦畔も同方向と共通している。上面は海抜高は 17.60 m、下面は 17.42 mと約 20cm の比高差がある。時期は、近世以降と考えられる。

5 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物 (第119 図、巻頭図版2-2)

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器のうち図示可能遺物、特徴的な要素がみられるものを中心に取り上げる。

C3・C4は分銅形土製品の一部である。C3は上半部左側部分の破片で、上縁に沿って重弧文、 くりこみ部に沿って櫛描沈線とそれを刺突文で縁取り加飾を施している。上縁部には11個の穿孔が 施されている。C4は下半部右側部分の破片で、くりこみ部に沿って櫛描沈線とそれを刺突文で縁取 り加飾を施している。C5は土錘である。M5は、銅銭「寛永通寶」であり、新寛永である。



第 119 図 3 区遺構に伴わない遺物 (1/3・1/2)

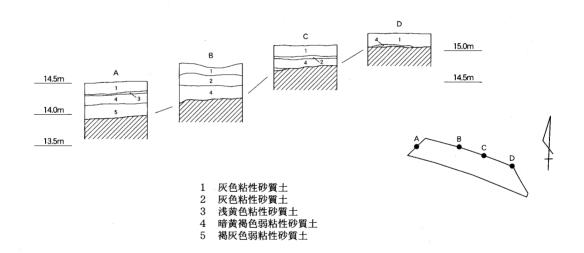
第5節 4区の調査

1 概要

4区は、3区と同様6m規格道路の北側、海抜高14.00mから15.50mに位置している。調査以前は水田として利用されていた。

基本層序は、現代水田層である灰色粘性砂質土 (1層)、近世水田層である灰色粘性砂質土 (2層)、水田層の床土である浅黄色粘性砂質土 (3層)、暗黄褐色弱粘性砂質土 (4層)、弥生時代の土器を含有する包含層である褐灰色弱粘性砂質土 (5層) が堆積している。それより下層は、遺物を含まない中新世の山砂利層である明黄褐色粘土である。

主な遺構は、近世の溝1条である。近世以前の遺構は検出できなかった。しかし、調査区北側の包含層の掘り下げで弥生時代前期・中期の土器が出土している。本調査区の土地利用は、近世段階から水田化されていったと考えられる。



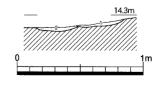
第 120 図 4 区堆積状況柱状図 (1/60)

2 近世の遺構と遺物

(1) 溝

溝 37 (第 121・122 図、図版 8 - 1 ・ 2)

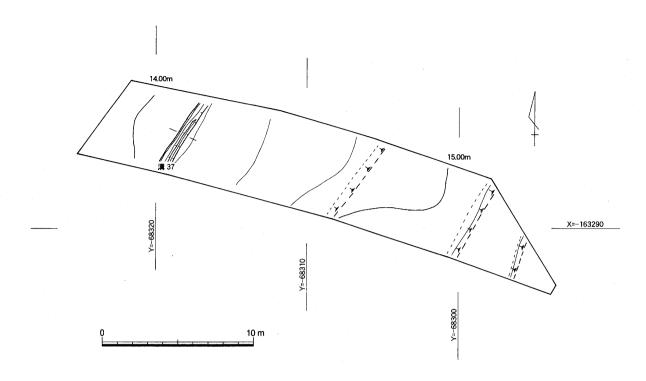
調査区西側に位置し、北東方向から南西方向へ流走する 溝である。検出長は 4.5 m、上端幅 70cm 検出面からの 深さは約5cm である。埋土は2層に分層できる。遺物は 陶磁器の細片が出土している。時期は、近世に位置付けられる。



1 黄灰色粘性砂質土

2 灰黄色粘性質土 〈炭含む 〉

第 121 図 溝 37 (1/30)



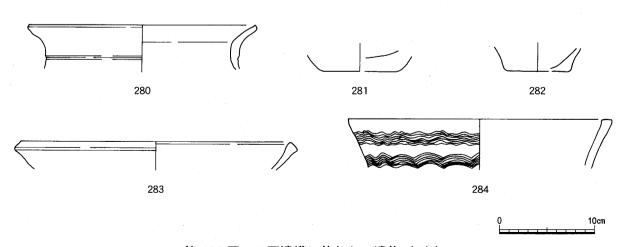
第 122 図 4 区遺構全体図 (1/250)

3 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物 (第123図)

278

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器のうち図示可能遺物、特徴的な要素がみられるものを中心にを取り上げる。280~282 は弥生土器である。280 は弥生時代前期の壺である。 頸部上半には沈線が1条施されている。口径は24cmを測る。281 は壺の底部で径7.6cmを測る。282 は弥生時代中期の甕の底部であり、黒斑が観察できる。283 は捏鉢で口径28.6cmを測る。内面はハケ調整を施し、焼成は軟質である。284 は鉢であり、外面には波波状文が施されている。口径は28cmを測る。



第 123 図 4 区遺構に伴わない遺物 (1/4)

-83 -

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷

今回の調査では、弥生時代、古墳時代後期、中世、近世の4時期の遺構・遺物を検出した。以下に 4時期の主要遺構の変遷を示す。

弥生時代

明確に弥生時代前期と判断しうるものは認められていない。溝1や包含層で少量であるが土器は出土している。弥生時代中期では、2区で竪穴住居や土壙の集落関連遺構が確認できる。本遺跡の遺構数が急増するのは弥生時代後期になってからである。居住域は、2区から1区へ比較的安定した南側の微高地へと移動するものと考えられる。1区の竪穴住居1・2が位置する微高地上では、土壙8基、溝2条、柱穴列1列を確認した。また、1区・3区を南東から北西方向に流走する溝1・溝29は、同一の遺構と考えられ、本遺跡の一部が谷部に立地することから排水目的に掘削された可能性がある。1区よりも標高が高く安定した基盤の3区では、竪穴住居は確認されてはおらず、溝・土壙・土器溜りを確認した。南側の標高の高い方に土壙、北側の低い方に溝を掘削している。狭い調査区でありながらも多量の弥生土器、破砕された分銅形土製品3点が出土している。特に溝29は北側の肩に人為的に一括廃棄された可能性のある土器を確認した。この溝は、下層で弥生時代中期の土器を含むことから少なくとも弥生時代中期に掘削され、弥生時代後期段階で埋没していると考えられる。3区の土器の出土状況から弥生時代後期の本遺跡の範囲は、調査区の東側に展開するものと考えられる。また、調査区から150mの南東側一帯には、弥生時代の遺跡として周知されている三ヶ田遺跡が位置しており、本遺跡と関係が指摘できる。

古墳時代後期

3区を東西方向に流走する溝 32 が 1 条検出したのみである。出土遺物は包含層であるが須恵器を 散見することができる。

中世

1・2 区では溝 2 条、3 区では土壙 2 基、柱穴列 1 列、溝 1 条を検出した。土壙 33 や溝 33 からは、12 世紀代の土器が出土している。

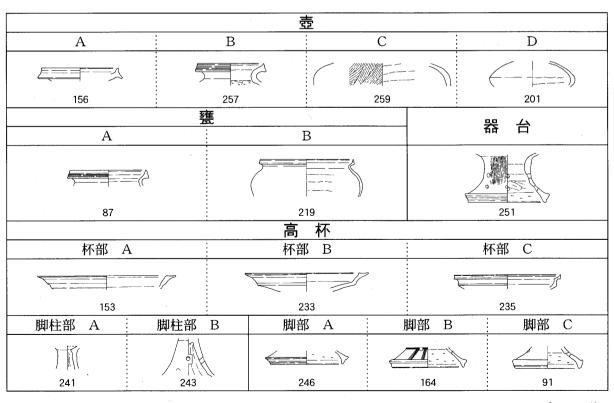
近世

全ての調査区において水田化されており、集落に関する遺構は検出されていないが、2区において 大量の石を廃棄した土壙が検出されている。この土壙は、溝を切って掘削されており、2基1対で位 置している。

第2節 弥生時代後期の土器について

森山遺跡出土の弥生土器の中には、肉眼観察で認識可能な土器の一群が存在する。胎土に角閃石を多く含有し、内外面に赤色顔料を塗布する土器である。器種組成は壺・甕・高杯・器台である。更に各器種については主に形態面から細分した。当遺跡でこの種の器種は下図に示したとおり、壺は4種、甕は2種、高杯の杯部が3種、脚柱部2種、脚部3種、器台は1種からなる。以下は主要器種形態について概観していく。壺Aは口縁部端部を上下方へ摘み出す。壺Bは口縁端部を肥厚し、凹線文を施す。壺C・Dは胴部である。Dは胴部が扁平な玉葱形を呈し、細長の口頸部が付くものである。甕A・Bは口縁端部を上方へ摘み上げる。口縁端部を肥厚し凹線文を施すものをA、肥厚しないものをBとする。高杯は、完形品の出土はない。ここでは杯部・脚柱部・脚部に分類する。杯Aは口縁部を外方し、強いナデにより稜が形成されている。杯部Bは口縁端部上面には凹線文が施される。杯Cは、二重口縁を呈する。脚柱部Aは、接合部に円盤充填を施す。脚柱部Bは脚頂部から裾部にかけて緩やかに「ハ」の字状に開き、円形透かし孔を施す。脚部Aは肥厚した脚端部の端上部を小さく外方に摘み上げ、端部外面に凹線文を施す。脚Bは脚部Aと形態的差異はないが、櫛描沈線を施す。脚部Cは脚端部は鈍く肥厚しており、上方へ突出する。器台は小形に分類できるもの1種のみである。脚端部は一見すると高杯の脚部とあまり相違なく、鈍く肥厚し端上部を小さく摘み上げる。

本市内でこの種の土器は、内平遺跡・道面遺跡・段林遺跡・竹林寺天文台遺跡で確認されている。また、 当該期の小田川流域の遺跡でも出土しており、遙照山山系を隔てた地域との関係を今後比較検討して いく必要がある。



0 10cm

第 124 図 土器分類図 (1/8)

森山遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

1. 分析目的

森山遺跡の3区溝29(弥生時代中期~後期)からは考古学的(形態・技法・胎土など)検討により、この地域で生産されたと考えられる土器が出土している。この胎土分析では、自然科学的分析手法を用いて、この溝出土の弥生時代後期の土器を分析し、遺構内や周辺遺跡出土土器と胎土比較することで、森山遺跡および周辺遺跡の弥生時代後期に生産された土器の特徴をみいだすことを目的としている。そして在地で生産されたものか、他地域からの搬入品かを検討した。

2. 分析方法と試料

分析方法は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の2つの方法で検討した。

蛍光 X線分析法では、胎土の成分(元素)量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分(元素)は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zr の 13 成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光 X線分析計(t/13-t/27//t/1/27 社製 SEA2010L)を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成型機で約 15^{-1} 、の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による胎土観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒(岩石・鉱物)の種類、大きさ、含有量について調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、非常に多い・多い・少ない・まれに、の4段階で表した。

分析に供した試料は、第1表に示した森山遺跡 15点(壺・高杯)、和田遺跡 4点(壺・特殊器台)、 内平遺跡 6点(壺・高杯)、道面遺跡 1点(壺)の合計 26点である。

3. 分析結果

【蛍光X線分析結果について】

胎土分析の結果、Ca・Kの成分に顕著な差がみられることから、K-Ca 散布図により胎土の比較をした。

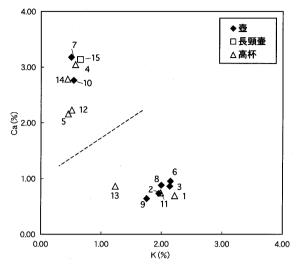
第 1 図 K-Ca 散布図では、森山遺跡内で器種により胎土に違いかあるかどうか検討した。すると Ca 量が約 2% 以上の領域に壺 $(7\cdot10)$ 、長頸壺 (15)、高杯 $(4\cdot5\cdot12\cdot14)$ の 7 点が分布し、その他の土器は Ca 量が 1% 以下に分布した。

第2図 K-Ca 散布図では、浅口市内の各遺跡(和田遺跡・内平遺跡・道面遺跡)出土土器と比較した。その結果、Ca 量が約2%以上の領域には森山遺跡と内平遺跡(23:高杯)土器が分布し、その他の土器はすべて Ca 量が約1%以下の領域にまとまった。つまり浅口市内の土器は二つの胎土に分類された。

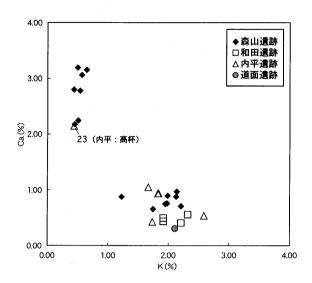
第3図K-Ca散布図では浅口市内の遺跡以外で、以前分析した井原市高越遺跡出土土器と比較した。 その結果、高越遺跡の土器は、Ca量が約0.6%~約3.5%のあいだに分布した。また浅口市内の土器 とは分布域が少し異なっていた。

第4図K-Ca 散布図では、岡山県内の特殊器台の胎土と比較した。すると森山遺跡のCa 量が2%

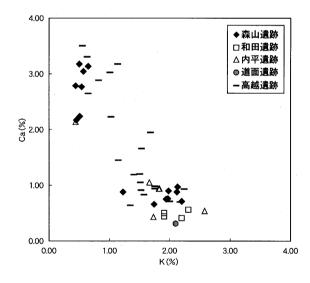
以上の土器は、立坂型の特殊器台の胎土が分布する領域と重なった。



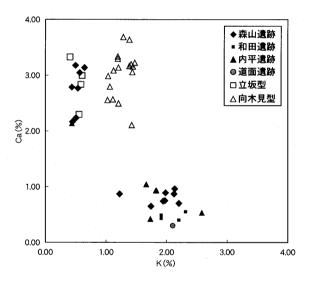
第1図 森山遺跡出土土器の器種別比較(K-Ca散布図)



第2図 浅口市内各遺跡出土土器の比較(K-Ca散布図)



第3図 浅口市内各遺跡と他地域の比較 (K-Ca散布図)



第4図 各遺跡と特殊器台の比較(K-Ca散布図)

【実体顕微鏡観察結果について】

実体顕微鏡による砂粒観察では、以下のような特徴ある4つの胎土に分類できた。

- 1類 ・・・・ 石英 (1mm 前後) を多く含み、長石 (1mm 以下)・雲母 (1mm 以下)、火山ガラス (0.5mm 以下)を少し含んでいる (写真1・2) (試料番号1・2・3・6・8・9・11・16・17・18・19・20・24・25・26)。
- 2類 ・・・・石英(1mm 前後)・長石(1mm 以下)・雲母(1mm 以下)を含み、常に多くの角閃石(1mm 以下)を含んでいる(写真 3・4) (試料番号 4・5・7・10・12・14・15・23)。
- 3類 ・・・・ 石英 (1mm 前後)・長石 (1mm 以下)・角閃石 (1mm 以下)を含み、多くの黒雲母 (1mm 以下)を含んでいる (写真 5) (試料番号 13)

4類 ・・・・ 石英 (1mm 以下) を多く含み、長石 (0.5mm 以下)・雲母 (0.5mm 以下)、火山ガラス (0.5mm 以下) を少し含んでいる。素地土に精製された粘土を使用している (写真 6) (試料番号 21・22)。

以上のように、1・4類は砂粒構成が似ており花崗岩の岩片らしきものが観察される。森山遺跡周辺の地質基盤層は花崗岩で構成されていることから、この1・4類は遺跡周辺の粘土を使用していることが推測される。また2類は特殊器台に使用されている粘土に類似している。3類は黒雲母を多く含み特徴圧粘土である。つまり、1・4類は在地で、2・3類は搬入された土器と推定される。

4. まとめ

蛍光X線分析と実体顕微鏡(砂粒観察)による胎土分析を実施したところ、次のようなことが推測された。

- (1) 蛍光 X 線分析では大きく 2 つの胎土に分類された。それは特殊器台に使用されている粘土とそれ以外の粘土であった。また砂粒観察では 4 つの胎土に分類され、 $1\cdot 4$ 類は在地産(遺跡周辺で生産)、2 類は特殊器台の胎土に類似、3 類は生産地が不明であるが、他地域からの搬入品と推測された。
- (2) 特殊器台との比較では、2 類の胎土が立坂型の胎土と類似していた。つまり森山遺跡出土の壺・高杯は特殊器台の胎土で製作されていることが推定された。

以上、事実報告のみとなってしまった。今後、高粱川の西部地域での分析試料の蓄積をまって改めて検討したい。

この分析の機会を与えていただいた水田貴士氏をはじめ浅口市教育委員会の職員の方々にはいろい ろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

試料 番号	掲載 No.	遺跡名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	К	Р	Rb	Sr	Zr
1	229	森山遺跡	高杯	68.45	0.71	17.77	5.42	0.07	1.40	0.71	0.32	2.20	3	259	173	314
2	199	森山遺跡	壺	66.14	0.74	19.20	6.65	0.09	1.30	0.75	1.77	1.94	1.26	303	186	347
3	198	森山遺跡	壺	65.53	0.59	19.18	7.41	0.20	1.46	0.88	1.26	2.12	1.12	361	152	299
4	235	森山遺跡	高杯	50.11	0.96	22.59	15.92	0.30	2.00	3.05	2.74	0.56	1.51	90	276	101
5	234	森山遺跡	高杯	52.26	1.31	23.67	15.13	0.27	2.36	2.17	1.93	0.44	0.31	104	248	107
6	226	森山遺跡	底部(壺?)	66.39	0.57	19.45	5.18	0.05	1.56	0.97	2.89	2.13	0.66	342	167	335
7	245	森山遺跡	壺	50.21	1.08	22.18	16.89	0.31	2.06	3.18	2.10	0.49	1.35	89	340	165
8	217	森山遺跡	甕	64.86	0.59	20.15	6.57	0.09	1.67	0.90	2.02	1.98	1.02	297	142	308
9	208	森山遺跡	甕	65.67	0.66	19.98	5.48	0.07	2.37	0.66	2.05	1.74	1.16	263	139	285
10	219	森山遺跡	甕	50.79	0.95	23.79	14.71	0.27	2.12	2.77	2.45	0.53	1.45	66	225	194
11	228	森山遺跡	高杯	64.43	0.55	19.35	7.16	0.08	1.66	0.76	2.03	1.97	1.73	319	188	326
12	232	森山遺跡	高杯	50.81	0.99	21.57	17.85	0.33	2.13	2.24	1.78	0.50	1.39	127	211	203
13	236	森山遺跡	高杯	60.08	0.91	21.10	10.19	0.14	1.57	0.88	2.20	1.22	1.51	169	185	513
14	246	森山遺跡	高杯 (脚部)	50.56	0.85	23.35	16.89	0.31	1.75	2.79	1.41	0.43	1.52	106	353	87
15	201	森山遺跡	長頸壺	53.29	1.01	22.01	14.55	0.27	2.04	3.14	2.27	0.64	0.51	147	283	152
16		和田遺跡	壺	69.21	0.74	18.65	4.38	0.05	1.45	0.44	2.27	1.91	0.67	233	125	438
17		和田遺跡	特殊器台	67.29	0.82	18.00	5.75	0.09	1.61	0.56	3.17	2.31	0.18	342	141	412
18		和田遺跡	特殊器台	67.71	0.65	17.86	5.49	0.13	2.64	0.50	2.73	1.91	0.11	249	94	332
19		和田遺跡	特殊器台	68.71	0.87	18.22	5.08	0.06	1.35	0.41	2.83	2.20	0.14	319	131	380
20		内平遺跡	壺	68.45	0.62	19.70	4.10	0.05	1.43	0.54	1.84	2.58	0.49	406	112	308
21		内平遺跡	壺	61.88	0.68	19.93	10.59	0.11	1.42	0.94	2.16	1.83	0.20	321	198	621
22		内平遺跡	壺	60.11	0.81	20.58	12.53	0.12	1.34	0.94	1.32	1.82	0.20	347	195	641
23		内平遺跡	高杯	55.82	0.61	23.77	11.43	0.21	3.08	2.14	2.34	0.43	0.04	100	179	145
24		内平遺跡	高杯	70.13	0.56	18.29	3.42	0.03	2.64	0.43	2.46	1.73	0.15	213	108	294
25		内平遺跡	高杯	67.46	0.82	20.05	5.45	0.08	1.45	1.05	1.74	1.66	0.09	245	214	308
26		道面遺跡	壺	68.34	0.93	17.86	6.98	0.08	1.27	0.31	1.92	2.10	0.04	260	82	. 579

第1表 森山遺跡ほか出土土器の胎土分析一覧表(%) 単位:Si~P(%)、Rb~Zr (ppm)

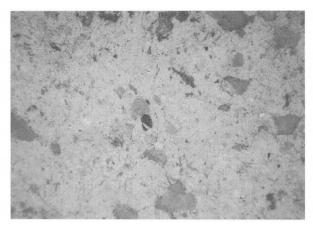


写真 1. 1類(森山遺跡:試料番号 1) 高杯



写真 2. 1類(森山遺跡:試料番号 8) 壺

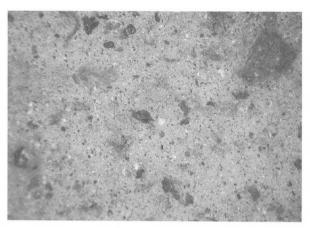


写真 3. 2 類(森山遺跡:試料番号 5) 高杯



写真 4. 2 類(森山遺跡:試料番号 8) 壺

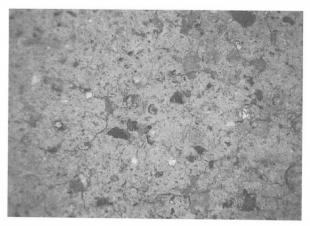


写真 5. 3 類(森山遺跡:試料番号 13) 高杯

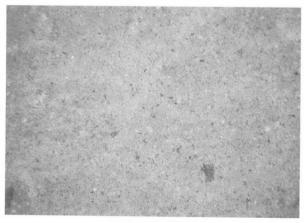


写真 6. 4 類 (內平遺跡: 試料番号 21) 壺

遺物観察表

凡例

土器・陶磁器

- ・色調(外面)は『新版標準土色帖(2002年度版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 色彩研究所票監修)を使用した。
- ・状態は、主要計測部位である口縁部を「口」、胴部を「胴」、底部を「底」、「脚部」を「脚」など と表し、残存状況を分数あるいは小破片は「片」と示した。また、復元も含めて全体の残存状況 が高いものは、「完形」、「ほぼ完形」と表した。

石器・石製品

・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。

金属器

・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。

土製品

・「計測値」、「重量」の数値は、現状の最大値を示した。「色調(外面)」は土器観察表に準じる。

土器観察表

掲載	and the contract of	\u00e44	and the same	nn	LI 4	7D -6-16 Ves		計測値cm		, and
番号	調査区	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状况	口径	底径	器高	備考
1	Т7		須恵器	壺	灰	肩			4.4	
2	T 14	_	弥生土器	壺	褐	口 1/6 以下	13.6		2.5	内面に赤色顔料
3	T 14	_	弥生土器	甕	浅黄	口 1/8 以下	18.4	-	2.5	
4	T 14	_	弥生土器	甕	にぶい黄	口 1/8 以下	23.4		4.5	
5	T 14	_	須恵器	壺	うすい灰	口 1/5 以下	22.6		4.2	
6	T 14	_	弥生土器	高杯	にぶい黄橙	脚柱 1/2 以下			5.8	
7	T 16	_	弥生土器	甕	浅黄	口 1/4 以下	12.4		5.6	赤色顔料
8	T 16	_	弥生土器	壺	にぶい黄橙	底のみ		8.2	4.5	黒斑
9	T 16		弥生土器	甕	暗褐	底のみ		5.3	4.3	
10	T 16	_	弥生土器	甕	明赤褐	底のみ		5.9	3	
11	T 17	-	縄文土器	鉢	にぶい橙	П			1.8	黒斑、スス
12	Т 17		弥生土器	甕	褐	П			3.2	
13	T 17		弥生土器	壺	浅黄橙	口 1/4 以下	17.6		5.8	黒斑、赤色顔料
14	T 17		弥生土器	壺	赤褐	底 4/5 以下		12.6	8	スス付着
15	Т 17	_	弥生土器	褒	浅黄橙	口 1/5 以下	21.6		2.1	
16	Т 17	_	弥生土器	甕	にぶい黄橙	口 1/8 以下	23.2		4.4	
17	Т 17	_	弥生土器	甕	にぶい橙	口 1/8 以下	16		7.7	
18	Т 17		弥生土器	甕	灰白	口 1/8 以下	13.6		4.8	
19	Т 17		弥生土器	甕	にぶい黄橙	口 1/8 以下	19.4		5.5	黒斑
20	Т 17		弥生土器	甕	にぶい黄橙	底 1/4 以下		7.4	4.3	
21	Т 17	_	弥生土器	甕	灰黄	底 1/4 以下		9	3.8	
22	Т 17	_	弥生土器	要	にぶい褐	底 1/2 以下		7	5.8	黒斑
23	T 17	_	弥生土器	————— 高杯	極暗赤褐	口 1/8 以下	20.4		4.6	黒斑
24	T 17	_	弥生土器	高杯	にぶい黄橙	脚裾 1/21 以下		20.4	4.3	 三角形透かし
25	T 17		弥生土器	高杯	にぶい黄橙	脚裾 1/6 以下		19.2	6.3	三角形透かし、黒斑
26	Т 17	_	須恵器	甕	灰白	肩		,	5.5	***************************************
27	T 17		平瓦	:	灰白	·			9.5	
28	1区	竪穴住居1	弥生土器	壺	明黄褐	口 1/12 以下	22.2		1.7	内外面とも赤色顔料
29	1区	 竪穴住居 1	弥生土器	壺	にぶい黄橙	肩~胴 1/8 以下			3.8	
30	1区	竪穴住居1	弥生土器		にぶい黄橙				1.5	
31	1区	竪穴住居 2	弥生土器		浅黄	口 1/8 以下	26		2.8	
32	1区	竪穴住居 2	弥生土器	甕	にぶい黄	底 1/5 以下		8.4	2	黒斑
33	1区	竪穴住居 2	弥生土器	甕	黄灰	底 1/8 以下		6.6	2	
34	1区	土壙 1	弥生土器	壺	にぶい黄橙	底 1/5 以下		8	1.3	黒斑
35	1区	土壙 1	弥生土器		灰黄	口 1/12 以下	16.8		2.4	黒斑、スス
36	1区	土壙 1	弥生土器	壺	黄褐				2.5	, m, 21 , 1, 1
37	1区	土壙 1	弥生土器	変		底 1/5 以下		9.6	1.4	
38	1区	土壙 1	弥生土器	 鉢		底 1/5 以下	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	12.8	5	黒斑
39	1 🗵	土壙 10	弥生土器			口 1/6 以下	16.8		4	
40	1区	土壙 10	弥生土器	甕	黄褐		20.0		2.6	
41	1区	溝1	弥生土器	壺	暗灰黄	口 1/12 以下	35.2		3.9	
42	1区	溝 1	<u> </u>	壺	浅黄	口 1/8 以下	29		5.7	,
43	1区				にぶい黄	-1/02/1	23		0.1	
44	1区					1/8以下		11.2	2.1	<u> </u>
45	1区	溝 1	弥生土器	甕		1/12 以下	23.4	11.6	8.5	
46		溝1								
	1 🗵		弥生土器	変 変 っ	灰黄褐	1/8以下	25.6	1.0	7.5	
47	1区	溝1	弥生土器 	要	暗灰黄	1/8以下		13	4.6	
48	1区	溝 1	弥生土器	盡	にぶい黄橙	底 1/3 以下		10.2	1.6	EB rW
49	1区	溝 1	弥生土器	悪	浅黄	1/0 NT		8.8	3	黒斑
50	1区	溝 1	弥生土器	要	黒褐	1/8 以下		8.4	5	内面にスス付着、外面に黒

掲載				<u>-</u>		4		計測値cm		
番号	調査区	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	口径	底径	器高	備考
51	1区	溝 1	弥生土器	ジョッキ形	にぶい黄	底のみ		11.6	5.4	黒斑
52	1区	溝 1	弥生土器	壺か器台	浅黄	口 1/9 以下	24.8		4.5	
53	1区	溝 1	弥生土器	壺	灰黄	口 1/8 以下	18.8		4.4	
54	1区	溝 2	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底 1/8 以下		9.2	1.6	
55	1区	溝 3	弥生土器	甕	にぶい橙			6.6	6.8	黒斑
56	1区	溝 3	弥生土器	高杯	にぶい黄	口 1/12 以下	25.4		2.3	
57	1区	溝 5	土師器	椀	灰白	底 1/8 以下		11.4	1.1	
58	1区	溝 8	磁器	碗	灰白	口 1/12 以下	16		2.5	
59	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	浅黄				2	
60	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	無頸壺	にぶい黄	口 1/12 以下	16.4		5.6	
61	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	淡黄	口 1/8 ~頸	9.6		4.2	
62	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	暗灰黄	口 1/8 以下	9.6		1.9	
63	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	黒褐	底 1/2 以下		9.2	2.7	黒斑
64	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	浅黄	底 1/2 以下		8.6	2.5	:
65	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	褐	口 1/8 ~肩	13		2.8	
66	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	浅黄	П	14.6		3.9	
67	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄橙	口 1/5 ~肩	14.6		5	
68	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	独	灰黄	口~肩 1/8 以下	18		5	黒斑
69	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	灰黄	底 1/2 以下		4.6	4.5	
70	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	暗灰黄	底 1/2 以下		9.6	2.9	
71	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	獲	明褐	底 1/2 以下		7.4	3.4	黒斑
72	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	黒褐	口 1/12 以下	30.2		2.8	外面に黒斑
73	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい黄	口 1/12 以下	24.4		4.7	
74	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	支脚	淡黄	1/2以下	5.8		5.7	黒斑
75	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	台付鉢	浅黄	底のみ		9	3	黒斑
76	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	淡黄	П	16.8		4.8	
77	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	褐	口 1/5 以下	18		5.8	黒斑、赤色顔料
78	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄橙	口 1/4 以下	20.2		2.5	
79	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	淡黄	口 1/4 ~肩	17.4		5.5	黒斑、スス
80	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	淡黄	口 1/4 以下	14.6		7.6	
81	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	淡黄	口 1/4 以下	20.2		4	黒斑
82	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	灰黄	底 1/2 以下		7.6	3.1	外面に黒斑
83	1 🗵	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	灰白	底 1/8 ~胴下半		11	5.5	
84	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	淡黄	口 1/4 以下	19.8		4	
85	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	淡黄	口 1/8 以下	24.4		5.4	
86	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	浅黄	口 1/4 以下	16.6		4.1	
87	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい褐	口 1/5 以下	16		2.3	内外面とも赤色顔料
88	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	明赤褐	底のみ		4.6	2	
89	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい褐	口 1/8 以下	20.8		2.9	内外面とも赤色顔料
90	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	淡黄	脚~杯		-	4.5	
91	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	脚 1/5 以下		13.4	4.6	外面に赤色顔料
92	1区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	鉢	暗灰黄	口~胴			6.4	
93	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	鉢	淡黄	口~胴 1/9 以下	41		14.8	黒斑
94	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	甑把手	にぶい黄橙				6	黒斑
95	1区	遺構に伴わない遺物	須恵器	高杯	灰	脚柱 1/2 以下		3.8	4	
96	1区	遺構に伴わない遺物	須恵器	高台付杯	暗青灰	高台 1/8 以下		15.2	2.6	
97	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	杯蓋	灰白		つまみ径 2.7		1.3	
98	1区	遺構に伴わない遺物	黒色土器	椀	浅黄	底 1/4 以下		8.6	1.2	黒斑
99	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	にぶい黄褐	底 9/10 以下		6	4.6	スス
100	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	にぶい黄橙	高台 1/3 以下		6.2	1.7	

掲載	調査区	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状况		計測値 c m		備考
番号	10-11-11-11-11-11-11-11-11-11-11-11-11-1	ALITE		UD 135	7 M C 474		口径	底径	器高	
101	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	にぶい黄橙	高台		4.6	4.3	藁痕
102	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	浅黄 	口~胴 1/7 以下	37.6		6.5	黒斑
103	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	捏鉢	にぶい黄	口 1/8 以下	31.4		3.5	
104	1区	遺構に伴わない遺物	平瓦		にぶい黄橙				6.7	
105	1区	遺構に伴わない遺物	平瓦		にぶい橙	•			8.5	
106	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	焙烙	にぶい褐	口 1/2 以下	42.2		7.9	黒斑
107	1区	遺構に伴わない遺物	土師器	焙烙	にぶい黄橙	口 1/8 以下	34.4		34	スス付着
108	1区	遺構に伴わない遺物	施釉磁器	鉢	明オリーブ灰	高台 1/2 以下		8	11.5	
109	1区	遺構に伴わない遺物	施釉陶器	鉢	にぶい赤褐	底 1/5 以下		16.4	5.2	肥前
110	2区	土壙 17	弥生土器	甕	黄灰	底~胴 1/8 以下		7	2.9	黒斑
111	2区	土壙 20	土師器	ш	黒褐	П			1.9	内外面ともにスス付着
112	2区	土壙 21	土師器	土釜	暗灰黄	鍔5cm程度			0.9	スス付着
113	2区	土壙 22	土師質土器	擂鉢	浅黄	П			3.9	
114	2区	土壙 22	染付磁器	ш	明緑灰	底 1/6 以下 高台欠く		10.6	0.8	肥前
115	2区	土壙 23	施釉磁器	碗	オリーブ灰	口~胴 1/4 以下	11.6		4.9	
116	2区	土壙 23	土師器	ш	にぶい黄褐	口~底 1/5 以下	8.4		1.1	
117	2区	土壙 23	染付磁器	Ш	明緑灰	底 1/3 以下		8.8	1.3	肥前
118	2区	土壙 23	施釉陶器	鉢	にぶい橙	口 1/16 以下	18.8		2.4	
119	2区	土壙 23	施釉陶器	鉢か皿	にぶい橙	底~胴 1/2 以下		12.4	5.3	
120	2区	土壙 24	施釉陶器	Ш	オリープ灰	口片			2.5	京焼
121	2区	土壙 24	施釉陶器	碗	浅黄	底 1/12 以下		5	0.7	肥前
122	2区	土壙 25	土師質	鉢	灰オリーブ				2.9	
123	2区	土壙 26	瓦質	椀	灰白	口~高台	19.2		4.8	
124	2区	土壙 26	施釉陶器	碗	灰オリーブ	底 1/4 以下		5	2.4	
125	2区	土壙 26	須恵器	鉢	にぶい黄褐	口 1/16 以下	31		2.7	亀山系
126	2区	溝 19	施釉陶器	碗	浅黄	底 1/4 以下		10.4	1.5	肥前
127	2区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	浅黄	口 1/8 ~頸	16		1.8	
128	2区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口のみ			1.4	
129	2区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	淡黄	口のみ			1.7	
130	2区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	灰白	杯~脚柱 1/3 以下			5.3	- Advantage
131	2区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高杯	橙	脚端のみ			1.8	21477547
132	2区	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	灰	口 1/8 以下	14		3.9	
133	2区	遺構に伴わない遺物	須恵器	 杯身	灰	底 1/8 以下		14.2	1.5	
134	2区	遺構に伴わない遺物	亀山焼系	甕	にぶい黄				4.2	
135	2区	遺構に伴わない遺物	土師器	鍋	にぶい黄橙	脚 1/3 以下	直径 2.8	3	12.9	スス付着
136	2区	遺構に伴わない遺物	内耳	鍋	褐灰	口 1/8 以下	34		2.8	 スス 付着
137	2区	遺構に伴わない遺物	土師器		にぶい黄橙	口 1/8 以下	31.4		4.2	黒斑
138	2区	遺構に伴わない遺物	染付磁器	椀	明緑灰	底 1/2 以下		8	2.5	
139	2区	遺構に伴わない遺物		擂鉢	暗赤灰	口 1/8 以下	35.4		10.8	
140	3区	土壙 27	弥生土器	器台	赤褐	脚 1/4 以下		22.6	4.1	赤色顔料、黒斑
141	3区	土壙 28	弥生土器		浅黄	口~肩 1/12 以下	13.6	***	2.4	
142	3区	土壙 28	弥生土器		にぶい褐	底~胴 1/4 以下		7.6	4	
143	3 🗵		弥生土器		にぶい黄橙	口~肩	13.6		4.1	黒斑
144	3 ⊠	溝 27	弥生土器	器台	にぶい黄橙		29.2		3	
145	3区	溝 28	弥生土器	壶	にぶい黄橙	口~頸	18.2		5.2	
146	3区	溝 28	弥生土器	壶	橙	口~肩 1/4 以下	18		5.6	
147	3区	溝 28	弥生土器	甕	にぶい黄	底~胴 1/5 以下		8.8	5	スス、黒斑
148	3区		弥生土器	選	橙	口~胴 1/4 以下	14.2	3.0	10.6	ANTE
149	3区	溝 28	弥生土器	選		口~胴 1/4 以下	13.8		4.5	
150		構 28	弥生土器	養	 黒褐	底 1/4 以下	10.0	7.2	2.6	黒斑
100	3区	件 40	か土 土 ि	流	派阀	1/4以广		1.4	2.0	IN m

調査区	hade that does	and the second	nn ee	Ad		i	計測値cm		
网旦口	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状况	口径	底径	器高	備考
3 区	溝 28	弥生土器	甕	にぶい黄橙	底のみ		5.2	3.5	黒斑
3区	溝 28	弥生土器	鉢	褐	底 1/4 以下		8	2.8	-
3区	溝 28	弥生土器	髙杯	にぶい黄褐	口 1/10 以下	29.4		2.8	内外面とも赤色顔料
3区	溝 28	弥生土器	高杯	明黄褐	П	31.4		2.7	黒斑
3区	溝 28	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	脚		20.6	2.8	内外面とも赤色顔料
3区	溝 28	弥生土器	壺	にぶい褐	口 1/8 以下	16.2		2.8	内外面とも赤色顔料
3区	溝 28	弥生土器	壺	黒褐	底~胴 1/4 以下		8.6	3.6	黒斑
3区	溝 28	弥生土器	甕	明赤褐	口~肩 1/4 以下	18		6.8	
3区	溝 28	弥生土器	甕	淡黄	口のみ	19		2.9	
3区	溝 28	弥生土器	甕	明赤褐	口~肩	18		2.1	内外面とも赤色顔料
3区	溝 28	弥生土器	甕	暗灰黄	口~肩 1/4 以下	16.6		3.4	
3区	溝 28	弥生土器	甕	黒褐	底 1/8 以下		6.4	2.9	スス付着、黒斑
3区	溝 28	弥生土器	甕	にぶい黄橙	底 1/2 以下		7.4	3.5	黒斑
3区	溝 28	弥生土器	高杯	にぶい赤褐	脚 1/5 以下		15	4.3	外面に赤色顔料
3区	溝 28	弥生土器	鉢	赤褐	口~脚 1/8 以下	7.2		5.1	内外面とも赤色顔料
3区	溝 28	弥生土器	鉢	にぶい橙	口~胴 1/5 以下	17.4		5.7	
3区	溝 28	弥生土器	鉢	灰黄	口~胴 1/4 以下	17.8		5.3	黒斑
3区	溝 28	弥生土器	製塩土器	にぶい橙	脚~胴下半		4.8	3.2	黒斑
3区	溝 29 (下層)	弥生土器	無頸壺	褐	頸~胴上半			4.3	
3区	溝 29 (下層)	弥生土器	無頸壺	にぶい黄橙	口 1/16 以下	16		3.9	
3 区	溝 29 (下層)	弥生土器	壺	灰黄	頸?			5.6	
3区。	溝 29 (下層)	弥生土器	壺	浅黄	口~頸 1/4 以下	11.2		2.2	
3 ⊠	溝 29 (下層)	弥生土器	壺	淡黄	口~頸 1/8 以下	12		4.1	
3区	溝 29(下層)	弥生土器	細頸壺	明赤褐	 頸のみ	6.2		9.7	
3区	溝 29(下層)	弥生土器	壺	黄褐	底 1/6 以下		12.2	2.7	
3区	溝 29(下層)	弥生土器	壺	淡黄	底~胴下半		9	5.8	スス付着、黒斑
3区	溝 29 (下層)	弥生土器	甕	淡黄	底 1/6 以下		11.2	3.4	黒斑
3区	溝 29(下層)	弥生土器	甕	にぶい黄	口~肩 1/2				
3区	溝 29 (下層)	弥生土器		にぶい黄褐	口~胴 1/4 以下	20.6		6.2	
3 ⊠	溝 29(下層)	弥生土器	甕	浅黄	口~頸 1/5 以下	19.8		4.6	
3 ⊠	溝 29(下層)	弥生土器	独	灰黄	口~胴 1/4 以下	13.6		4.1	
3区	溝 29 (下層)	弥生土器	甕	にぶい黄褐	口~頸 1/5 以下	16.2		3	
3 ⊠	溝 29(下層)	弥生土器	甕			17		2.5	
	溝 29 (下層)	弥生土器				-			
-		弥生土器					9.8		
3区		弥生土器			底~胴下半		8.4	6	
3区	溝 29 (下層)	弥生土器			底 1/2 以下		5	4.3	 黒斑、スス
3区	溝 29 (下層)	弥生土器	独	黒褐	底 1/3 以下		8.4	1.2	スス付着
3 🗵					底のみ			2	スス付着、黒斑
3区		弥生土器							黒斑
-									三角形透かし
						33	-0.0		
									· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
3 🗵	溝 29 (下層) 溝 29 (下層)	弥生土器	壺	灰白	口1/8以下	34.8		1.9	
3 🗵	# 29 (下層) # 29 (下層)			褐					
U 10	行るの(下層)	弥生土器	壺		口 1/6 以下	15.6		2.8	
	進 20 / L 図\	7/c 44 _1 . UD	圭	10		100		7.0	
3区	溝 29 (上層) 溝 29 (上層)	弥生土器 弥生土器	壺壺壺	褐 	口~胴 1/4 以下 頸~胴半分	15.2		7.2	外面に赤色顔料
	3 K 3 K 3 K 3 K 3 K 3 K 3 K 3 K 3 K 3 K	3区 溝 28 3区 溝 29 3区	 3 区 溝 28 弥生土器 3 区 溝 29 (下層) 弥生土器 	3区 溝 28 弥生土器 高杯 3区 溝 28 弥生土器 高杯 3区 溝 28 弥生土器 壺 3区 溝 28 弥生土器 壺 3区 溝 28 弥生土器 愛 3区 溝 28 弥生土器 夢 3区 溝 28 弥生土器 参 3区 溝 28 弥生土器 参 3区 溝 28 弥生土器 参 3区 溝 29 (下層) 弥生土器 無頸壺 3区 溝 29 (下層) 弥生土器 壺 3区 溝 29 (下層) 弥生土器 壺 3区	3 区 溝28 弥生土器 鉢 機 3 区 溝28 弥生土器 高杯 にぶい黄褐 3 区 溝28 弥生土器 壺 にぶい横褐 3 区 溝28 弥生土器 壺 にぶい横褐 3 区 溝28 弥生土器 壺 男赤褐 3 区 溝28 弥生土器 壺 明赤褐 3 区 溝28 弥生土器 壺 明赤褐 3 区 溝28 弥生土器 壺 明赤褐 3 区 溝28 弥生土器 妻 明赤褐 3 区 溝28 弥生土器 妻 用流 3 区 溝28 弥生土器 妻 にぶい黄橙 3 区 溝28 弥生土器 鉢 にぶい世間 3 区 溝28 弥生土器 鉢 にぶい世間 3 区 溝29 (下層) 弥生土器 郵 反 3 区 溝29 (下層) 弥生土器 五 及 次 3 区 溝29 (下層) 弥生土器 五 次 次 次	3区 溝28 弥生土器 鉢 横 底1/4以下 3区 溝28 弥生土器 高杯 にぶい黄褐 口 1/10以下 3区 溝28 弥生土器 高杯 にぶい黄褐 口 1/10以下 3区 溝28 弥生土器 流杯 にぶい黄褐 口 1/10以下 3区 溝28 弥生土器 流杯 にぶい荷 口 1/10以下 3区 溝28 弥生土器 壺 原本 田 1/4以下 3区 溝28 弥生土器 壺 明赤褐 口 口 1/4以下 3区 溝28 弥生土器 瓊 明赤褐 口 口 口 1/4以下 3区 溝28 弥生土器 瓊 明赤褐 口 口 一 1/4以下 3区 溝28 弥生土器 瓊 明赤褐 口 口 口 1/4以下 3区 溝28 弥生土器 瓊 明赤褐 口 口 1/4以下 3区 溝28 弥生土器 瓊 原板 丘 1/8以下 1/5以下 1/	3 3 3 3 3 3 4 3 3 4 3 3	3 第28 弥生土部 新 第 底 1 1 1 1 1 1 1 1 1	3日区 排名 数 数 取出 取出 2日 2名 3日区 清名 外生土器 高杯 におい資報 日1/10以下 94 28 3日区 清名名 外生土器 高杯 小規報 日 26 28 3日区 清名名 労生土器 養金 におい資報 日1/18以下 162 28 3日区 清名名 労生土器 養金 現外機 日1/18以下 162 28 3日区 清名名 労生土器 養金 明末棚 ロ〜肩1/4以下 18 26 3日区 清名名 労生土器 養金 明末棚 ロ〜肩1/4以下 16 20 3日 清名名 労生土器 養金 明末棚 ロ〜肩1/4以下 16 20 3日 清名名 労生土器 養金 明末棚 ロ〜肩1/4以下 16 20 3日 清名名 労生土器 養金 無限 田川本 17 16 20 3日 清名名 労生土器 養金 民港 日本 10年間

掲載							j	計測値 c m	1	
拘戦 番号	調査区	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	口径	底径	器高	備考
201	3 ⊠	溝 29(上層)	弥生土器	細頸壺	にぶい褐	胴 1/5 以下			5.4	赤色顔料
202	3区	溝 29(上層)	弥生土器	壺	浅黄橙	口~頸 1/5 以下	17.2		4.3	赤色顔料
203	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	壺	褐	口~頸 1/5 以下	17.8		3	
204	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	壺	暗灰黄	口~頸 1/8 以下	21.2		3.5	
205	3区	溝 29(上層)	弥生土器	壺	淡黄	底 1/4 以下		10.6	4.3	-
206	3区	溝 29(上層)	弥生土器	壺	浅黄	底 1/4 以下		8.2	2.4	
207	3区	溝 29(上層)	弥生土器	壺	淡黄	底 1/4 以下		7.8	2.2	
208	3 ⊠	溝 29 (上層)	弥生土器	褒	褐	口~頸 1/8 以下	24		4.1	
209	3 ⊠	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	灰黄褐	口~胴 1/8 以下	16		6	
210	3 ⊠	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	淡黄	口~頸 1/4 以下	17.4		5.7	
211	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	独	明赤褐	口~肩	14.8		4.9	
212	3区	溝 29(上層)	弥生土器	甕	灰白	口~胴上半	21.4		6.8	
213	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	明赤褐	口 1/8 以下	16		2.4	赤色顔料
214	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	灰黄褐	口~頸			2.3	外面にスス付着
215	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	浅黄橙	口~胴 1/6 以下	14.4		6	
216	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	甕		口 1/4 以下	15.2		3.6	
217	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	痩	にぶい黄褐	口~胴 1/6 以下	13.6		5.4	
218	3 ⊠	溝 29(上層)	弥生土器	甕	赤褐	口~胴 1/4 以下	17.8		7.7	赤色顔料
219	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	赤褐	口~胴 1/8 以下	19.8		7.9	内外面とも赤色顔料
220	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	淡黄	口~胴	15.8		6.1	
221	3 ⊠	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	にぶい橙	底 1/2 以下		4.8	3.2	スス
222	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	变	暗灰黄	底 1/4 以下		8	3.5	スス付着、黒斑
223	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	変	灰黄	底 1/2 以下		8	2.7	
224	3区	溝 29(上層)	弥生土器	甕	にぶい褐	底 1/5 以下		9.2	2.2	黒斑
225	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	変	にぶい黄	底~胴下半		5.7	4.5	71172
226	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	甕	灰黄	底 1/4 以下		8.2	6.3	
227	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	要	黄褐	底~胴下半		19.2	8.8	スス付着、黒斑
228	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯		口 1/8 以下	30.8	10.2	4.1	八八门相、一一
229	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	灰白	口~杯 1/10 以下	24.6		4.8	
30	3区			高杯	明赤褐	口~杯 1/12 以下	25		4.7	
31	3区	溝 29 (上層)		高杯	にぶい黄褐	口~杯 1/10 以下	24.8		2.9	内外面とも赤色顔料
32	3区	溝 29 (上層)			にぶい場	口~杯 1/8 以下	21.2	,	2.8	
33										内外面とも赤色顔料
	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	褐	口~杯 1/5 以下	26.2		4	内外面とも赤色顔料
34	3区	溝 29 (上層) 	弥生土器	高杯	にぶい黄橙	口~杯 1/5 以下	21		2.9	内外面とも赤色顔料
35	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	口~杯 1/8 以下	22.6		3	内外面とも赤色顔料
36	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯 	にぶい黄	口~杯	34.4		3.5	
37	3 🗵	溝 29 (上層) 沸 20 (上層)	弥生土器 	高杯	淡黄	口 1/12 以下	32.4		2.3	
238	3区	溝 29 (上層) 	弥生土器	高杯	にぶい褐	杯			5.1	·
239	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	赤褐	杯			5.8	
240	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	灰白	杯下半~脚柱			9.9	
241	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	にぶい褐	脚柱 1/2 以下			4.3	内外面とも赤色顔料
242	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	台付鉢	にぶい橙	脚柱 1/2 以下			4.4	
43	3区	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	脚 1/4 以下		13.8	3.2	赤色顔料
44	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	淡黄	杯下半~脚柱			5.4	
45	3 🗵	溝 29 (上層)	弥生土器	高杯	にぶい黄褐	脚のみ	-		7.8	内外面に赤色顔料
46	3区	溝 29(上層)	弥生土器	高杯	にぶい褐	脚 1/6 以下		15.4	2.9	内外面とも赤色顔料
47	3区	溝 29(上層)	弥生土器	鉢	にぶい褐	口~胴 1/12 以下	38.8		6.4	
48	3区	溝 29(上層)	弥生土器		橙	口~胴 1/10 以下	26		4.5	黒斑
249	3区	溝 29(上層)	弥生土器	蓋	暗灰黄	ほぼ完存		14.6	8.4	黒斑
250	3 区	溝 29 (上層)	弥生土器	器台	淡黄	脚裾 1/16 以下		29.8	5.2	

掲載 番号	調査区	遺構名	種別	器種	外面色調	残存状況	ā	†測値cn	1		
							口径	底径	器高	備考	
251	3区	溝 29(上層)	弥生土器	器台	にぶい黄褐	底 1/6 ~脚柱 1/2 以下		16.2	10.2	外面に赤色顔料、黒斑	
252	3区	溝 29(上層)	弥生土器	器台	淡黄	底 1/12 以下		42.2	7.7	黒斑	
253	3区	溝 29 (上層)	ミニチュア土器	甕	暗灰黄	底のみ		3	2.8	黒斑	
254	3 ⊠	溝 30	弥生土器	甕	にぶい黄	口~肩 1/5 以下	11.8		3.6	黒斑	
255	3 区	溝 30	弥生土器	甕	黄灰	口~胴上半			3.5	黒斑、スス付着	
256	3区	土器溜り1	弥生土器	無頸壺	暗灰黄	口 1/8 以下	11.6		3.9		
257	3区	土器溜り 1	弥生土器	壺	にぶい黄褐	口~肩 1/4 以下	14		4	内面に赤色顔料	
258	3区	土器溜り1	弥生土器	壺	褐	口~肩 1/8 以下	11.8		2.5		
259	3区	土器溜り 1	弥生土器	細頸壺	にぶい褐	胴 1/5 以下			4.8	外面に赤色顔料	
260	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	灰黄	底 1/16 以下		10.2	2.2		
261	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	淡黄	П	20.6		3		
262	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	暗灰黄	口~胴 1/8 以下	11		5	黒斑	
263	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	灰黄	肩~胴 1/4 以下			8.6	黒斑	
264	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	灰黄	底~胴		9.8	7.1		
265	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	淡黄	底 1/4 以下		9.6	3.3	黒斑	
266	3区	土器溜り 1	弥生土器	壺	灰黄	底 1/4 以下		9.6	2.4		
267	3区	土器溜り 1	弥生土器	甕	にぶい黄褐	底~胴 1/2 以下		5.2	3	黒斑	
268	3 区	土器溜り 1	弥生土器	甕	にぶい橙	底 1/2 以下		. 6	1.8	黒斑	
269	3区	土器溜り 1	弥生土器	高杯	にぶい褐	口 1/12 以下	25.2		3.5	赤色顔料	
270	3区	土器溜り 1	弥生土器	高杯	灰黄	口 1/12 以下	25.6		3.7		
271	3区	土器溜り 1	弥生土器	高杯	にぶい橙	脚柱 1/4 以下			6.5		
272	3区	土器溜り 1	弥生土器	髙杯	浅黄橙	脚底~脚柱	脚径 15		4.3		
273	3区	土壙 32	土師器	椀	灰白	高台~胴		6.2	0.9		
274	3 区	土壙 32	平瓦		灰						
275	3区	土壙 33	土師器	Ш	にぶい黄橙	口~底 1/4 以下	11.8		2.2		
276	3区	溝 33	土師器	椀	浅黄橙	ほぼ完存	14.4		5.1		
277	3区	溝 34	施釉陶器	鉢	黒褐	口 1/12 以下	19.8		2.5		
278	3区	溝 34	施釉陶器	鉢	にぶい橙	口~胴 1/5 以下	26.4		6.6		
279	3区	溝 35	染付磁器	碗	灰白	口~胴			2.4		
280	4区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	褐	口 1/8 以下	24		4.6	黒斑	
281	4区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	にぶい黄橙	底 1/2 以下		7.6	1.6		
282	4区	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	赤橙	底 1/2 以下		6.8	2.5	黒斑	
283	4区	遺構に伴わない遺物	土師器	鉢	黄褐	口 1/16 以下	28.6		3		
284	4区	遺構に伴わない遺物	陶器	鉢	灰黄褐	口 1/8 以下	28		4.9		

石器・石製品観察表

11 位 11 次印											
掲載 番号	調査区	遺構名	器種	最大長	計測値 (mn 最大幅	最大厚	重量(g)	石材	時期	残存状況	備考
S 1	1区	遺構に伴わない遺物	石鏃	36.0	18.0	6.0	2.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 2	1区	遺構に伴わない遺物	石鏃	23.5	20.5	3.5	1.20	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 3	1区	遺構に伴わない遺物	石鏃	19.5	20.5	3.0	0.70	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 4	1区	遺構に伴わない遺物	石包丁	81.5	47.5	9.0	40.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 5	1区	遺構に伴わない遺物	石包丁	88.0	47.0	12.0	72.50	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 6	1区	遺構に伴わない遺物	石包丁	62.0	37.5	8.5	33.50	サヌカイト	弥生時代	欠損	
S 7	1区	遺構に伴わない遺物	石包丁	63.0	42.0	11.0	35.00	サヌカイト	弥生時代	欠損	
S 8	1区	遺構に伴わない遺物	石包丁	67.0	42.5	7.0	34.50	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 9	1区	遺構に伴わない遺物	石包丁	73.0	35.0	6.5	23.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 10	1区	遺構に伴わない遺物	石錐	36.0	8.5	5.0	15.00	サヌカイト	弥生時代	欠損	
S 11	1区	遺構に伴わない遺物	石匙	33.5	50.5	5.0	11.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 12	1区	遺構に伴わない遺物	石匙	45.5	44.5	5.0	12.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 13	1区	遺構に伴わない遺物	スクレイパー	62.5	55.5	8.5	45.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 14	1区	遺構に伴わない遺物	スクレイパー	63.0	47.0	12.5	44.00	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 15	2区	竪穴住居3	石鏃	20.0	11.5	3.0	0.50	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 16	2区	溝 15	石包丁	8.0	34.0	9.5	32.50	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 17	2区	遺構に伴わない遺物	石鏃	18.5	13.5	3.0	0.50	サヌカイト	弥生時代	欠損	
S 18	2区	遺構に伴わない遺物	石斧	69.0	79.0	42.0	274.00	砂岩	弥生時代	欠損	
S 19	3区	溝 29	石鏃	15.0	17.0	4.0	0.50	サヌカイト	弥生時代	完形	
S 20	3 ⊠	溝 29	石包丁	42.0	51.0	4.5	16.50	サヌカイト	弥生時代	完形	
				金属	製品観察	>表					
掲載 番号	調査区		器種		├測値 (mr		重量 (g)	材質	時期	残存状况	備考
一番与 M 1	1区	土壙 10		最大長 43.0	最大幅 13.0	最大厚 4.0	3.59	鉄	弥生時代	ほぼ完形	*-,11
M 2	1区	遺構に伴わない遺物	—————————————————————————————————————	28.0	9.0	8.0	2.24	———— 鉄		欠損	
M 3	1区	遺構に伴わない遺物		57.0	26.0	7.0	13.23	 鉄	<u>.</u>	欠損	
M 4	1区	遺構に伴わない遺物	馬鍬	214.0	28.0	21.0	208.36	 鉄		ほぼ完形	
M 5	3区	遺構に伴わない遺物	銭貨「寛永通寶」	214.0	22.0	1.0	2.13	銅	近世	完形	
		(2) 1147 (2) 147 (2)	双 页 " 兄 小 应 页]	-		1.0	2.10	949	<u> </u>	<u> </u>	
		·		土製	品観察						
掲載 番号	調査区	遺構名	器種	最大長	計測値 最大幅	(mm) 最大厚	孔径	重量(g)	色調	残存状況	備考
C 1	1区	溝 1	土錘	62.0	42.0		11.0	107.0	灰黄	ほぼ完存	黒斑あり
C 2	3区	溝 29	分銅形土製品	88.0	100.6	21.0		210.5	橙	1/4	黒斑あり
C 3	3区	遺構に伴わない遺物	分銅形土製品	42.0	45.0	14.0		45.5	灰黄	1/4	
C 4	3区	遺構に伴わない遺物	分銅形土製品	48.0	40.0	14.0		24.5	灰黄	1/4	
C 5	3区	遺構に伴わない遺物	土錘	36.0	35.0		7.0	33.5	浅黄	ほぼ完存	黒斑あり



1 調査区遠景 (北西から)



2 1区弥生時代全景 (南東から)



3 竪穴住居 1・2 (東から)

図版 2



1 竪穴住居 1土器出土状況 (東から)



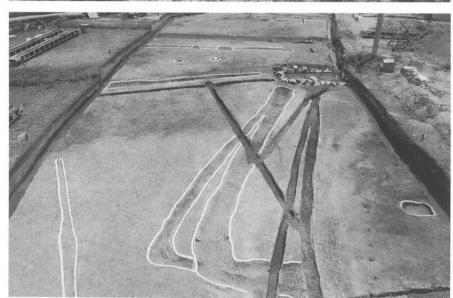
2 土壙 10土器出土状況 (南から)



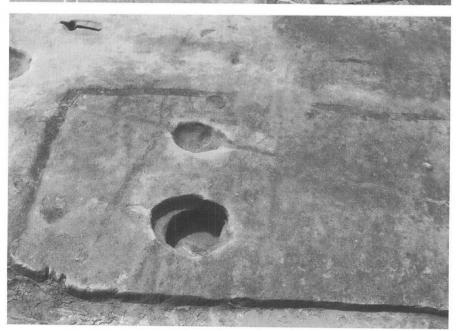
3 溝1(北西から)



1 溝1堆積状況 (北東から)



2 中・近世全景 (北西から)

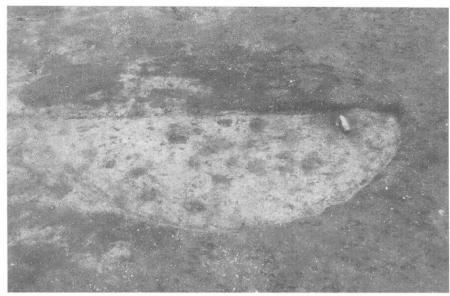


3 竪穴住居 3 (北東から)

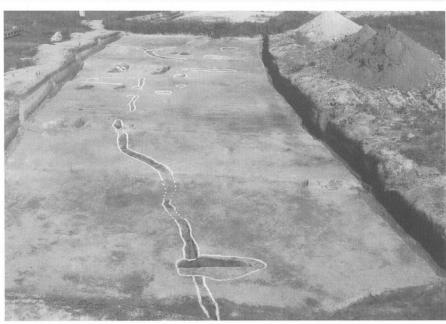
図版 4



1 竪穴住居 4 (北東から)



2 土壙 15 (南から)



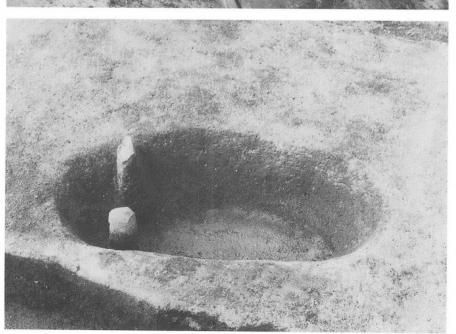
3 溝 15 (南東から)



1 溝 15 石包丁出土状況 (北から)

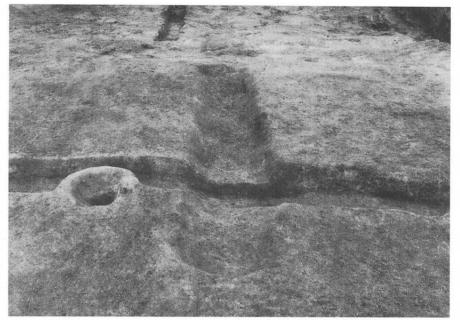


2 3区弥生時代全景 (北西から)

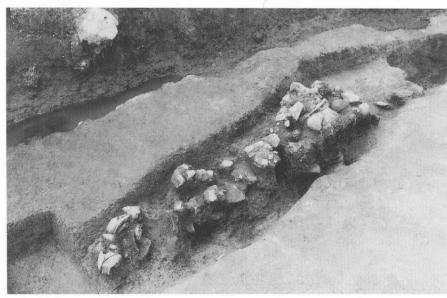


3 土壙 27 (南東から)

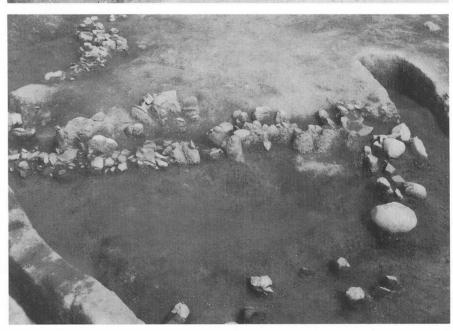
図版6



1 土壙 28 (南東から)



2 溝 28土器出土状況 (東から)



3 溝 29 土器出土状況 (東から)



1 溝 30 (南東から)



2 土壙 32 (南東から)

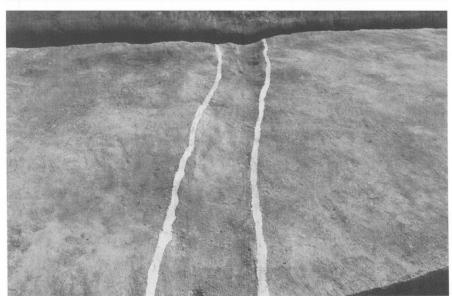


3 柱穴列3 (東から)

図版8



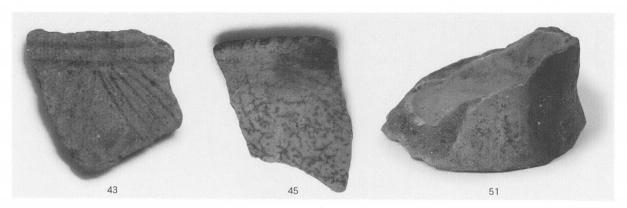
1 4区完掘状況 (南東から)



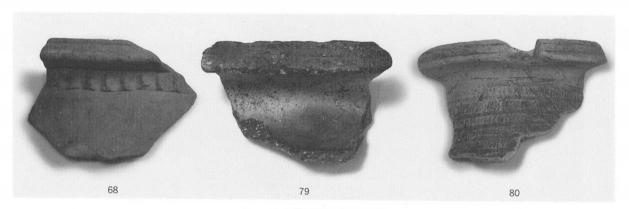
2 溝 37 (北から)



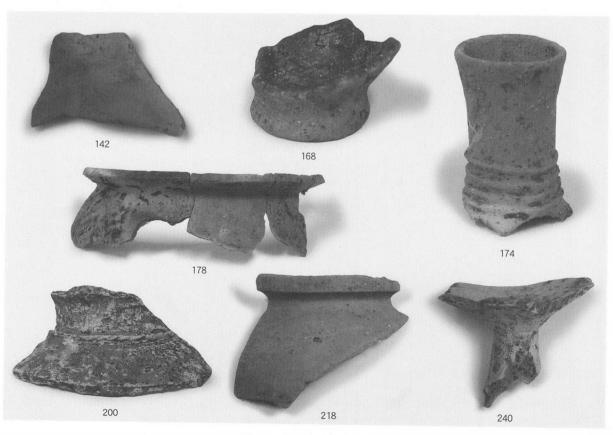
3 現地説明会風景



1 1区溝1出土遺物

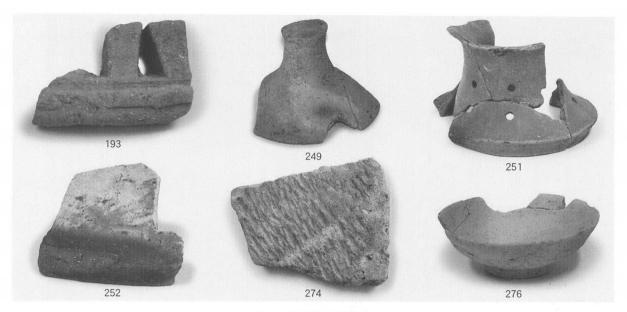


2 1区包含層出土遺物

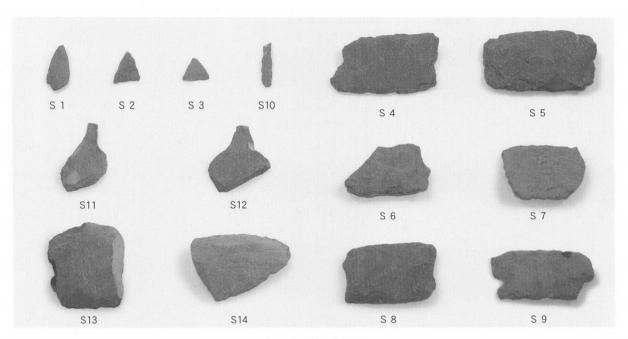


3 3 区出土遺物①

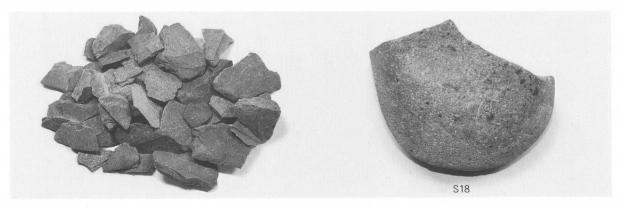
図版10



1 3区出土遺物②



1 1区出土石器



3 1区出土サヌカイト片

4 2区出土石斧

報告書抄録

ふりがな	もりやま	ひせき										
書名		遺跡										
副書名	問題を関する。 一般の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の表現の											
巻次	協力が出土地区画金星事業に仕り程成文化別元加両直 1											
シリーズ名												
シリーズ番号	1											
編著者名	水田貴士 白石 純											
編集·発行機関	浅口市教育委員会											
所 在 地	〒719-0243 岡山県浅口市鴨方町鴨方2244-2 TEL 0865-44-7055											
発行年月日	西暦200	8年3月	31日									
ふりがな所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯。//	東緯。,,,,	調査期間	調査面 (m²)	調香原因				
もり やま い せき 森 山 遺 跡			213	34° 31′ 31″	133° 35′ 23″	2006. 5 . 9 ~ 2006.10 . 14	1,50	0 鴨方駅南土 地区画整理 に伴う発掘 調査				
所収遺跡名	種別主な問	字代 =	<u> </u> Eな遺構		主	な遺物		特記事項				
森 山 遺 跡	集落 弥生時 古墳時 中	土柱 溝土 溝 土 溝 土 溝	文住居4 廣21基 六列1 八子 八子 八子 八子 八子 八子 八子 八子 八子 八子	海磁装石 装土製品	土師器・須恵器) 陶磁器(瓦質土器・陶器) 国内最大級 分銅形土製							
	近	溝2	t 土壙12基 溝23条 柱穴列2列		歯・	TA VJ	i.					

浅口市埋蔵文化財発掘調査報告 1

森 山 遺 跡

鴨方駅南土地区画整理に伴う発掘調査

平成20年3月19日 印刷 平成20年3月31日 発行

編集 浅口市教育委員会 岡山県浅口市鴨方町鴨方2244-2

印刷 印刷のよこやま 岡山県浅口市鴨方町益坂270

